

31
732



始



トコノチ

31-732



あつもの

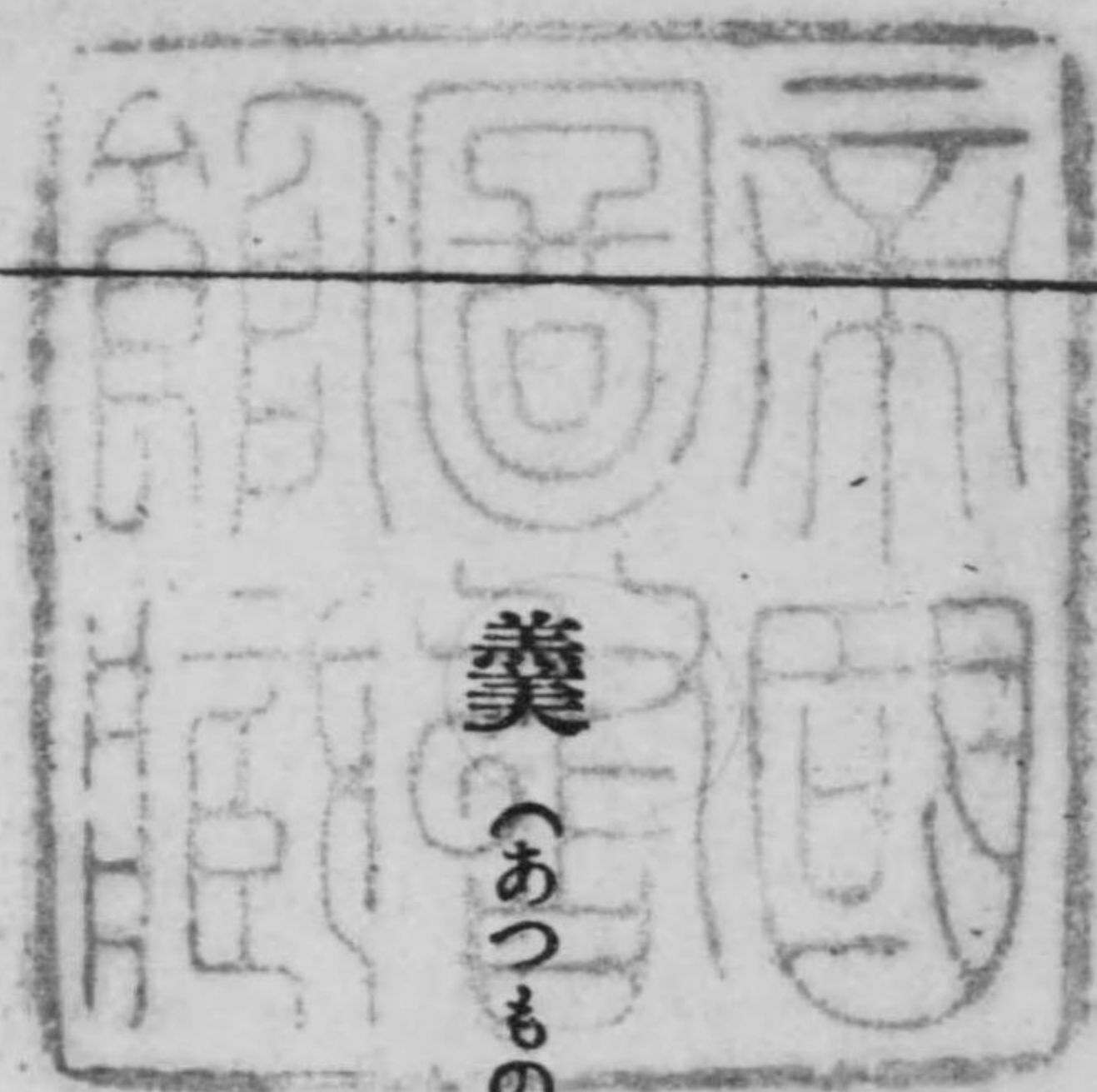
春陽堂版

谷崎潤一郎

大作

7.9.2

内交



義 (あいうえお)



汽車は沼津を出てから、だんだんと海に遠ざかつて、爪先上りの裾野の高原を進んで行くらしかった。八月の真晝の日光が、濃い藍色に晴れた空から真直に射下して、折々一寸二寸ぐらぬづゝ、窓枠の縁を焼き付けて居た。

橋は此の暑いのに、「高」の小倉の制服をきちんと着込んで、乗客の疎らな二等室の片隅に腰を掛けて居た。彼の向ひ側には十七八の藝者らしい女と、其の姐さん株が、乃至は待台の女將かと推測される四十近い婦人が、俥の膝懸を臂に敷いて、双方から凭れかゝるやうにしどけなく据わりながら、富士山の頂上を眺めつゝ、何かひそく語り合つて居た。車の動揺するまゝに、柔かいびろうどの布圍が馬の背の如く躍り上ると、肉附の好い藝者の體ほしなやかに採まれて、房々とした髻毛まで、鳥が呼吸をするやうに、ふわり、ふわりと顛へて見える。

豊川稻荷へでもお参りに行つた歸りであらう、豊橋、濱松、辨天あたりの旅館のレツテルを貼つた荷物やら土産やらが、椅子の下にも棚の上にも澤山載せてあつた。若い方が、足許のお茶の土瓶を取り上げて、

「姐さん、歸るまで保つてせうか。」

と云ひながら、蓋を開いて覗き込むと、

「大丈夫だとも、内へ持つて行けば屹度鳴き出すよ。」

かう云つて、年寄も一緒に覗いて居る。土瓶の中には、大方河鹿でも入つて居るらしい。

「若しか途中で死んぢやつたら、口惜しいわね。」

と、若い女はあどけない口元で笑つて居る。

一二時間の後、國府津の停車場へ着いてから、東京まで密に自分と同乗する筈の美代子が入つて來たら、此の女達ほどんな眼つきをするだらう。さう考へると、橋は面白いやうな、恐ろしいやうな氣持がした。學生としては贅澤な二等室を撰んだのも、美代子の便利を慮つた爲めであるのに、かう云ふ女と乗り合はせては、却つて肩身の狭い思ひをしなければならぬ。あの憤ましやかな、お嬢さん育ちの美代子の事だから、氣の毒な程小さくなつて、自分の側へハッそりと身を寄せかけはしないだらうか。

其の時のいぢらしい姿を想ふと、彼は又抑へ切れぬ楽しさと歎ばしさに襲はれた。六月の末、沼津へ行き掛けに箱根を訪れて、病み上げの杖に縋りながら、美代子と一緒に大涌谷を見物したのは、もう二た月ばかり前になる。一旦生命迄も奪られようとした煩ひの痕を癒やすべく、

それから毎日々々千本松原の沙風に體を鍛へて、面變りのする程眞黒に肥太つた現在の構子を見せたらば、どんなに美代子は嬉しがらう。初戀の人と唯二人、生れて始めて汽車旅行を試みる今日の機會に、何もそれ程世間を憚る必要はあるまい。美代子に對する自分の感情が純潔である以上、少しも疚しくない證據に、自分は殊更學校の制服を纏つたのではないか。……彼はかう度胸を据ゑて、勇躍するやうに窓際へ立ち上つた。

戶外には涼しい風がぱた／＼と鳴つて鏗の廣い麥藁帽子を飛ばさんばかりに、吹き通して居た。彼は襟頭に滲み出た汗の一時に乾き切るやうな心地好さを味はひながら、窓枠に兩肘を衝いて、沿道の景色を眺め入つた。

いつの間にか汽車は御殿場近くの山麓をどん／＼走つて居る。冲天に輝く太陽の威力を眞甲に浴て、赭色の山肌を露はにして思ふ裸體の富士の、ひろ／＼と擴げた裳裾の上には、箱庭のやうな森や人家が點々と連なつて、見て居る中に後の方へ迂つて行く。足柄箱根の山の肩が、次第々々に近く高く右の方から突き出て来る。時々四角な田や畑が、前の方から線路の傍へ跳び込んで来て、忽ちいびつな菱形に歪みながら、遙に遠く押し流される。左に見えた愛鷹山の青い背中が、だん／＼と富士の裏側へ駆込むやうに隠れて了ふ。

何と云ふ愉快な景色であらう。……何と云ふ愉快な日であらう。……彼は今日程此の邊の風

光を美しく、面白く眺めたことはなかつた。瞳に映る山川草木が、悉く自分の仕合せな身の上を祝福して、媚び諂つて居るかのやうに感ぜられた。戀と健康との喜びが、心の髓まで浸み徹して、凡ての物を彼の眼前に輝かせてくれるのであつた。彼は戀人の容貌を見、戀人の聲を聞くのと同じやうな楽しい心地で山々の姿に見惚れ、裾野の風に耳を傾けた。

早く、一刻も早く國府津まで飛んで行きたかつた。もう何時間……もう何分……かう思つて彼は待ち遠しさうにポツケツトから時計を抜き出したり、焦れツたさうに足踏みをしつゝ口笛を鳴らしたりした。其の間も、急速力の汽車は絶ゆる隙なく距離を縮めて、國境の山の峽を傳はつて居た。兩側から地勢の迫るに隨ひ、曠漠たる裾野の末は小さく挟まれて、丘や林が眼近く立ち列ぶやうになつた。遠くに聳えて居た一つの峰が二つに割れて、幽遠な谷を開いて迎へたり、雜草の底に囁いて居た溪流が、やがて白泡の巖を噛む河床を現したり、斷崖の角を曲る度毎に、一つ一つ新しい山懷が右に左に展けて居つた。どうかすると青空が高く隠れて、牢獄のやうな絶壁の石垣ばかりが、つい窓際に長く長く續いた。其れが盡きると、ぼつと眼界が明るくなつて、山勢が遠く遠く退き、尾上の木々の繁みの中から、細い瀧がちらちらと落ちたりした。

一等室のドアを開けて、十三四のボーイが急ぎ足で入つて來た。さうして、スヰツチ

馬鹿
H.N.
生

を拵つて室内の電燈をつけると、今度はばかり、ばかりと片ツ端から窓硝子を締め始めた。

「ホーイさん、トンネルなの？」

後向きに俯むいて居た若い藝者が、重さうな額を擡げて訊いた。

「え、もう直きでございます。」

「さう、トンネルは幾つあつて？」

「八つございます。」

行儀よく直立して、かう答へた後、ホーイはつか／＼と次の車室へ歩み去つた。

「あゝ。」

と、軽い溜息をして、藝者はハンケチを蟬谷へあてながら、倒れるやうに臥轉ぶと等しく、眞白な空氣枕へ銀杏返しの頭を載せた。

間もなく、ガラガラガラと凄じい響の底へ引き入れられると、欄間から白い烟が濛々と舞ひ込んで、黄色い鈍い燈の光が、蒸し暑い部屋の中に濁り深つた。汽車は暫らく八つのトンネルを出つ入りつした。

「此のトンネルさへ越して丁へば、國府津は直だ。」
と彼は思つた。覚えのある派手な琥珀の日傘をさしてブラットホームにイんで居る美代子の

傍が、彼にはもう見えるやうな氣持がした。

小山を過ぎてから、野と海とが再び近づき始めた。戀人の生れ故郷の相摸の國、なつかしい相摸の國の、はる／＼と續いた平原の果には、水蒸氣の濃い霧が、金色の光に燃えて打ち煙つて居た。ところ／＼に波うつ丘陵の青葉の匂や、大空の雲の勢や、紫が／＼つた遠山の風情まで、悉く親しみ深い相摸野の景色であつた。酒匂川の鐵橋を渡る時、足の下にはさも涼しさうな水が笑つて、橋杭のぐるりに渦を巻きながら流れて行つた。其の水の注ぎ落ちる川下の溜の方には、ざぶん、ざぶん、と相摸灘の怒濤の崩れる音が聞えて、飛沫の末が灰のやうに舞ひ上つた。汽車は次第に速力を弛めて、徐かに停車場の構内へ馳せ入つた。

「國府津。……國府津。」

二三人の驢夫がこつこつと靴を鳴らして通つた後から、乗り下りの客が忙しげにブラットホームへ下駄を引擦つて歩いて居た。箱根歸りの一隊らしい五六人の男女の群が、どや／＼と景氣よく二等室へ跳び込んじや否や、大聲で暑い暑いとこぼしながら、傍若無人に扇を使つたり、ハンケチを振つたり、冗談を云ひ合つたり、忽ち車内は賑やかになつた。例の藝者も此の騒ぎにうたゝ寢の眼を覺まされて、後れ毛を掻きつゝ起き上つた。

待てども、待てども、美代子の妻は容易にアリツチを下りて來なかつた。内の首尾が悪くて

抜け出す折がなかったのか、それとも約束した時間を思ひ違へたのであらうか。今日は此の儘會へないで、東京へ歸らなければならぬのか。そんな悲しい、口惜しい成行になつたらどうであらう。此の上彼は半時たりとも、戀人の顔を見ずには暮らせさうもなかつた。汽車はもう直き動き出すのに、子供のやうに泣き喚いても美代子は遂に來てくれないのか、さう考へると、彼は胸が塞がつて、不愉快な憂ひの雲に頭を抑へられるやうな心地がした。

構内には最早や一人の客もなかつた。漸く西に傾いた日が、たゞきの上をちりちりと氣長に焼き付けて居るばかり、折々停車場の事務室の受信器がキチキチ鳴つて、海の方から潮の香の高いそよ風が、人の心も知らず顔に、首さし伸べた彼の頬を颯つて通つた。

がらん、がらん、と五分鈴が響き渡つた時、橋は戸外のきらきらした往來に、クリーム色のパラソルが胡蝶のやうにひらめいて、惶しく構内へ躍り込むのをちらりと見た。突然彼は動悸が激しく血管を衝いて、肋骨のあたりがひやりとするやうな shock を覺えた。手も足も唇も、不思議にわなわな戦いて、五體が瘧を煩つたやうにふるへた。

「お早く願ひます、お早く？」
けたゞましい催促の聲を浴びせかけられながら、美代子は千代田草履をばくく云はせて、橋の車室の前迄駈けて來たが、ふと氣が付いたやうに、

「あつ此處は二等なの？ 買ひ直して來ようか知ら。」

かう云つて、赤い切符を帶の間から出した。

「もう時間がございせんから、其のまゝお乗りになつて宜しうございます。」

と、驛夫は後から彼の女を押し上げるやうにして扉を締ると、呼子を口に咬へてヒューと吹いた。

「あゝ忙しなかつた。あたし、わざ／＼三等の切符を買つて來たのよ。」

かう囁いた時、美代子は乗客の視線が自分に集まつて居るのを悟つて、上氣した襟のあたりを恥かしさうにボウツとさせた。うすいお納戸の組織の單衣に、白っぽい紋紗の丸帯を締め、細い金の提灯鎖を頭にかけて十七八の令嬢姿に、男も女もぢろ／＼と眇を與へて、一舉一動にも眼を放さないやうであつた。

「もう少ウして乗り遅れるところだつたね。」

かう云つた橋の聲は非常にふるへて唇のわななきが未だ止まらないらしかつた。待たされて、待たされて、待たされ抜いて、散々思ひ焦れて居た氣苦勞の半分だけでも、具に懇へて見たかつたのに、咽喉がつかへて自由が舌が廻らなかつた。今日が日まで戀ひ慕つて居た女の容貌も、面と對つては白粉の香や髪の匂に妨げられて、却つて想像の方がハッキリするやうに感ぜられ

た。楽しいのか、恐ろしいのか判らないくらい、彼の神経は興奮して居た。美代子に對する自分の戀が、此れほど命の底深く根ざして居る事を、彼は始めて知つたのであつた。我ながら訝しいやうな、狼狽へた態度を、女に窺はれるのが嬉しくも恥かしくもあつた。かう云 場合、女は案外男よりも落ち着いて口を利くことが出来た。

「宗ちゃん、もう體はずつかり長くなつたの？また勉強を始めたなら、悪くなりほしくなつて？」二人は、乗客の視線を免れるやうに、二つの窓から頭を出して、顔を列べて居た。美代子の言葉は耳元を掠めて走る風速に浚はれて、かすかに後方へ消えて行つた。

「もう大丈夫だらう。」
快活に淡泊に、橋のかう答へた時、眼の前に塞がつて居た綠樹が盡きて、陸地がだらだらと砂濱へ下り、太い高磯い馴松の疎らな隙から海が光つた。そんな物にも、橋の心に刺戟された。

「内の工合はどうだつたい。」
と云ひながら、彼は思ひ切つて、風上の女の方へ頭を向けた。そして、煤煙に吹き付けられるのを躊躇ふかのやうに、わざと眼瞼を伏せて、睫毛を長くした。

「別にどうもしなくつてよ。ちよいと大磯のお友達に所まで行くつもりで出て来たの。……おッ母さんが汽車はいつでもあるから髪を直してお出でなさいつて云ふもんだから、斷る譯にも

行かなくつて、あたし氣が氣ぢやなかつたわ。でも間に合つて好かつたわね。」

汽車の震動に妨げられまいと、美代子は心持ち調子を張つて、りんとした聲で云つた。結び立ての髪が風に煽られて、橋の顔の方へ柔かさうにふわふわと揺れて膨らんだ。いつしか血色が眞白に覺えて、唇の紅いのが殊に目立つて見える。

「それぢや東京へ行つても、今日はゆつくり出来ななんだね。」

「え、新橋へ着いたら直ぐ歸るわ。かうやつて話をするのは、汽車の中だけよ。」

かうは云つたものゝ、男も女も、どんな話をしたいか解らなかつた。二人共一緒に坐つて居るだけで充分であつた。話をする際に、自分達の現在の幸福をつくづく考へて、喜んで置きたかつた。

橋にせよ美代子にせよ、これまで未だお互に「愛」とか「戀」とか云ふ大膽な詞を口にも文にも出した事はなかつた。「是非一度會ひたい」とか、「くれぐれも體を丈夫にしてくれろ。」とか、そんな言葉に戀慕の情の萬分の一を籠めて、想思の意味が通じ合ふものゝやうに満足して居た。さすが女は角張りぬ言ひ廻しのうちに、心の底はばツキリと行き肩かせる優しきみを持つて居たが、男には到底そんな婉曲な眞似は出来なかつた。兎に角二人共、明かな事實を立派に意識して居て、尋常でない素振や行動を取りながら、今更其を語り合ふ程の勇氣がなかつた。

「ほんとに宗ちゃんは大つてね。もう量だつて十二貫ぢやないでせう。」
美代子は沙風に染まつた男の手頸を眺めて、低く囁いた。
「十四貫八百目ある。」

「さう、そんなに殖えて？」

かう云つた女の眼つきには、喜びの色が、溢れて見えた。

橋は、美代子の平生と打つて變つた活氣ある態度の原因を、滿更窮乏な家庭を逃げて来て、自由な戶外へ放り出された理由にばかり歸する譯には行かなかつた。女の身として、両親を偽つてまでも一二時間の對面を樂しみに、一緒に道中をすると云ふ事が、自分に心を許して居る證據でもあり、機嫌の良い所以でもあらうと推した。

彼は小田原の美代子の家の事情を詳しく知つて居た。……美代子の父、清助と云ふのは、商賣にかけてはなかく、抜け目のない代り、若い時分から放蕩の限りを盡して、二三人の妾もある上に多勢の子を孕ませ、其れがみんな一軒の内に同居して居た。さうして、正妻のお綱が、老い先の樂しみとするのは、正腹の娘の美代子一人であつた。
美代子が町の小學校を卒業した時、お綱はどうしても手許から娘を放すのを拒んだが、清助

は東京の女學校へ入れると云つて聽かなかつた。

「だから女親つて者は仕構がない。お前のやうに下手ツ可愛がりほしなけれど、已だつて娘は可愛いんだぜ。小田原と東京なら目と鼻の間だ。いつだつて歸つて來られるぢやないか。」

こんな理窟を云つて、遠縁の親類にあたる濱町の橋の家へ、とうとう美代子を預けてしまつた。其處から彼の女は虎の門へ毎日通つた。其處から彼等の戀は始まつた。

相應に財産もある清助の家督を、誰に譲らせる積りであらうかと、お綱は始終夫の意中に感ひ煩つた。たとへ男子にせよ、妾腹の者には決して家督を取らせたくなかつた。そんな事があつたら、自分は娘を連れて分家でもするより外はない。かう云ふ意地張から、母は一層厳しく美代子の監督に氣を配つて、東京へ出しても都會の惡風に泥まぬやう、土曜日毎に歸省を命じた。それから今年の卒業と同時に、早速國許へ引き取つて了つた。

温厚な美代子は、東京に居ても國へ歸つても、母の身の上と自分の將來とが案じられて、年中心が鬱いで居た。お轉婆ぞろひ、腕白ぞろひの妾腹の兄弟達の中に交つて、世間の人に後指をさされまい、便りに思ふ母の期待に背くまい。さう云ふ苦勞が積り積つて、いつとなく橋などに尋ねられると、愚痴をこぼすやうになつた。

「あたしおッ母さんを此處の内へ伴れて來て了ひたいわ。」

など、濱町の家の二階で、橋に訴へることがあつた。彼の女は橋に對して、戀ひ慕つて居ると云ふよりも、もう少し眞面目な實際的な考へを抱いて居た。

橋の顔を眺めて居る時だけ、美代子は自分を仕合せだと思ひ、自分の運命を必ずしも悲觀しなかつた。せめて此のひとの會談だけは、氣を惹き立て、世間の若い女に負けず、晴れやかな眉をも開き、朗かな調子で應答をしようと思つた。けれども今日のやうな人ごみの中に長い間隙を擦り寄せ、ろく／＼言葉も交さずに頂垂れて居れば、果ては矢張りいろ／＼の心配事が胸にもつれて、自然と頭が暈くなつた。國府津で乗り合はせた瞬間の感情の高潮が、彼等を掃する爲めに、何か話題を捉へて見たかつたが、どんな小聲で喋舌つても隣の客に聞き取られるので、お互に一向はづまなかつた。殊に女は停車場へ停る度毎に、乗り下りの人の様子をそつと窺み視て、知人に遇ふのを恐れて居た。

新橋へ着くと、美代子はホツとして、病人のやうな消息をついた。橋は赤帽に行李を託して、女と列んで改札口を出ながら、

「美代ちゃん、どうしよう。……ちよいと何處か、靜かな處へでも行かうか。」と云つた。

「さうね。」と、美代子は小型の金時計の蓋をパチンと撥けて、——「もう五時半ね。」

「それとも内證で、濱町まで來たらどうだい。」

橋はわざと女の躊躇ふ氣色を認めないやうに、重ねて訊いた。

「いけない、いけない。」

女は下を向いて、首を振つて、

「……濱町へ知れても、内へ知れても悪いから、あたし此れから直ぐに歸るわ。ほんとに初めッからその積りなのよ。七時から八時までに必ず歸れッて云はれたのに、今直ぐ歸つたッて九時になるわ。」

男には女の決斷力の良いのが恨めしかつた。自分と美代子と地を換たら、彼にはとてもそんな思ひ切りのいゝ仕打ちは、出來さうもなかつた。自分の思つて居る半分も、女は自分を思つて居てくれないのか、さう云ふ不平も挿まされた。けれども此の場合、別れるなら別れるで、男は成るべく二人の幸福を傷つけるやうな言動を慎み、能う限り楽しい、快い感情の胸に盛上げて別れたかつた。どうしても自分達は、天に感謝し、人に羨まれなければならぬやうな、境遇に置かれたものと信じたかつた。

「汽車の中ちや、なんにも話が出来なかつたわね。こんな事になるくらゐなら、一層來ない方が宜かつたわ。」

と、美代子は瞳を潤ませて、苦しうに口元でにっこり笑つた。男は其れでもう満足した。

「東海道神戸行、……東海道神戸行。」

驛夫が鈴を鳴らしながら、叫んで通るのを聞くと、女は直ぐと氣を取り直して、
「それぢや此れへ乗つて行くわ。」

と、軽く頭を下げた。さうして、入場券を買ひに行かうとする橋を無理に制した。

「もうほんとに見送つて頂かなくつても澤山よ。誰かに見付かると大變だから、此處で失禮するわ。」

かう云つて、惶しく立ち去らうとしたが、再び橋の前へ足を止めて、

「宗ちゃん、ほんとに妾を忘れないでね。」

と、改札口の雑踏に揉まれながら耳打ちをした。

やがて女の姿が、長い長いブラットフォームを駈けて行つて、列車の踏み臺をひらりと跨いで、室内へ消えて了ふまで、男は其處にぼんやりとゐんで居た。折角の手の裡の玉を奪られたやうな残り惜しさが、ひしひしと胸に應へて、どうしたら此の戀ひしさを抑へる事が出来ようかと、彼は暫く途方に暮れた。あゝまた會へるのは何時であらう。一週間立つたら會へるか、一と月立つたら會へるか、それとも半年か一年か、再び其の日の廻つて来るのは、遠い、覺束

ない、このやうに感ぜられる。賑やかな東京の街の中央に住みながら、朝夕一念を小田原に馳せて、取り着く島もない淋しさ辛さを、幾日繰返さなければならぬのであらう……

彼は不承不精に赤帽から行李を受け取つて、濱町へ俵を走らせた。

「ほんとに妾を忘れないでね。」

かう云つた別れの言葉は、まだ彼の耳に響いて居た。其の時の美代子の輝いた眼つき。かすかな唇の戦き、其れを想ひ渡ると、悲しいながらも甘い慰藉を味はされた。「ほんとに妾を忘れないでね。」——彼は此の文句を幾度も心に繰返して、鬼の首でも取つたやうに喜んだ。

「女が本當に自分を慕つてさへ居れば、近いうちに又會ふ機會も作れるであらう。日曜あたり、此方から小田原へ出掛けて行つても、そんなに世間で怪しみはすまい。別段がっかりするに及ばぬ事だ。」

と彼は俵の上で考へ直した。さうして、息を深く吸つて、さも得意さうに木挽町の往來を彼方此方眺め廻した。可笑しなことには、俵がだん／＼濱町へ近づくに隨ひ、幽鬱な先の氣分とは全く異つた得意の情がいよ／＼増して、何も知らずに自分の歸りを待つて居る兩親に對して、さへ、一種の誇を抱くやうになつた。

橋の家は濱町三丁目の至極閑静な新道にあつて、小さつぱりした格子造りの二階建ての後に、黒い艶のいゝ土蔵の壁が、漆塗のやうに光つて見えた。元は或る舊派俳優の住居であつたのを、五六年前父の宗兵衛が相場で中てた頃、兜町の方をうるさがつて、又一つには伴の勉の爲めを思つて此處を譲り受け、毎朝運動に店まで徒歩で通つて居た。父と母と一人息子の宗一と、三人の家族は小間使に飯炊の女を置いて、不自由もない代り、格別花やかな目にも過はすに、地味な暮しを立てゝ居た。

「ほんとに内あたりぢや、小間使一人あれば御飯炊なんぞ要らないんだけど、勿體ないことだ。」

母のお品はしよさいなさに困つて、折々かう云つたが、相當な仲買店の主の本宅であつて見れば、まさかさうする譯にも行かなかつた。美代子が厄介になつて居る時分でも、お品は用事が一つ殖えて有難いと云ふ風に、先へ立つて何くれと面倒を見た。

「美代ちゃん、こんな事も覚えて置くもんだよ。」

かう云つて、たまには臺所の用を云ひ附けたり、來客の接待をさせたり、針仕事などを頼ん

だりした。美代子もお品にはよく懐いて、「叔母さん、叔母さん」と大事にして、云ふ事を聞いた。

「あの娘はなか／＼感心なところがある。」

と、お品は始終褒めて居た。

美代子が國へ引き取られてからのお品は、全く手持無沙汰であつた。夫と伴の着物の世話は人手を借りない上、日に三度も拭き掃除に念を入れて、其れでまだ暇があると、女中の髪を結つてやつたりする。昔は芝居道楽であつたが、此の頃はどうも頭が痛むと云つて、兜町連の切符を買つても、大概店の者が女中を遣つて了ふ。

「半四郎や高助が居た時から見ると、此の節の芝居はほんとにつまらない。」

と、口癖のやうに云つた。いつであつたか、久し振に成田屋の追善劇へ誘はれて、歸つて來るゝ高野藏の勸進帳を散々罵倒し、いろ／＼と古い役者の評判をした揚句、

「さう云へば、先に染五郎と云ふ役者があつたが、彼なんぞは屹度長くなつたらうに、今ぢやどうして居るだらうれえ。」

かう云つて、大變女中に笑はれて居た。

夫の宗兵衛も、稼業柄に似合はず品行方正で、實直な、義理堅い男であつた。一時芳町邊に、

妾を圍つて居るらしいと云ふ噂を立てられて、店の番頭だの小僧だが、内々物好きに探案の歩を進めたが、全くそんな形跡はなかつた。若い者が大好きで、

「どうだい、内へ来て一杯やらないかい。」

など、時々店員を本宅へ招いては、一緒に酒を飲んで、別隔てなく冗談を云ひ合つたり、若くは聞はせたりする。附き合ひの外はめつたに茶屋入りさせず、いつも八時か九時頃迄には歸つて来て、晩飯に一本潰けさせながら、お品や宗一や女中を相手に、世間話をするのが例であつた。性來旅行を楽しみにして、たま／＼日曜に祭日が續くと、土曜日の夜からかけて大阪、仙臺あたりへ遠走りをしたが、其れも忙しい體では、年に一度あるか無しであつた。

「己が今に歳を取つて隠居でもしたら、日本國中を旅行して歩く。」

ト、宗兵衛は云つて居た。

「お父さんは、アレで若い時分にはなか／＼道樂をしたものさ。」

と、お品は散々苦勞をさせられた昔の事を想ひ出して、宗一に話す折もあつた。今では宗兵衛は赤ら顔にでツぶり太つて、無骨な體格をして居るものゝ、二十前後には瘦きすの色の白い、役者のやうな美男で、隨分女に惚れられた方だと云ふ。

「宗ちゃんも親父さん似で、好い顔だったが、お父さんはどうして彼れどころぢやなかつた

よ。」

と、小田原の美代子の母などが、よく取沙汰をした。

宗兵衛の放蕩と來たら、一時は可なり激しかつたものと見えて、いまだに一つ話が澤山残つて居る。宗一の祖父にあたる人の葬式の歸りに、施主の宗兵衛が雲隠れをして家内中の大騒ぎとなり、だん／＼調べると當日會葬の列に連つた蟲鼠の幫間を唆して、押し上の寺から眞直ぐに柳橋へ繰込み、茶屋の大廣間に陣取つて藝者を十何人も揚げて、ぐでん／＼に酔拂ひながら、

「すてゝ、こを踊つて居たなどは、最も奇抜な例である、

其の時、照降町の親戚の叔父が腹を立て、

「貴様のやうな罰あたりは、歸つて來ないでも差支ないから、勝手に何處へでも出て失せろ。」

かう云つて、怒鳴り付けると、宗兵衛は青くなつて恐れ入り、女房の前へ頭を下げて、漸く

叔父に詫を入れて貰つたさうである。

又或る時は向島の水神に三四日流連した末、我が家ながらも閩が高く内へ歸れず、據所なしに「メンボクナイ、シメ」と云ふ電報を打つたので、お品が驚いて駆け着けると、相變らず前後不覺に酔ひ倒れて正體なく、「いやあ、いよ／＼女房の御入來か。」など、照れ隠しに布圍の中から手ばかり出して、臥ながら踊つて居たさうである。

そんな鹽梅で、親譲りの財産を途には蕩盡して了つたが、お品が連れ添うてから十年日——丁度宗兵衛の三十五の歳に始めて宗一を生んで以來、すつかり人間が改まつて、商賣を勵むやうになつた。さうして、先祖代々の質屋の店を疊んで、兜町の仲買へ番頭に住み込んでから、兎に角十五年程の間に今日の地歩を占めるやうになつた。其れには勿論、お品の内助の功も與つて方があつた。

波瀾に富んだ半生の歴史を持つ宗兵衛の夫婦は、目下のところ、唯一人息子の將來に樂しみを屬して、平穩無事な日を送つて居た。若しも宗一が生れなかつたら彼等は今頃どうなつて居るか解らなかつた。

「是非とも此の子を、立派な者にしなければならぬ。」

かう思つて、宗兵衛はまだ通ひ番頭をして居る時分から、どんな工面をしても、倅を大學までやらせる決心であつた。幸に倅は去年の春、中學を優等で卒業して、夏には首尾よく一高の一部へ入學したが、あんまり勉強の度が過ぎたのか、十一月の始めにとうとう肋膜炎を病んで、茅が崎へ入院して了つた。成績が好ければ好いで、矢張り心配は絶えないものと、夫婦は其の當座氣が氣でなかつた。それでも宗一は運よく今年の四月に退院が出来て、人の止めるのも聽かずに六月の試験を受け、一學期の大牛と二學期を休んで居るにも拘らず、辛うじて二年へ進

級させて貰つたのである。

一人息子と云へば、大抵人困らせの我が儘者が多いのに、宗一は物心の付いた頃から、未だ嘗て両親の仕打ちに不満を抱いたことなほかつた。さすが苦勞をしただけあつて、彼のくらゐ道義の解つた、行き届いた人達はない。とか、よくもあんな似合の夫婦が揃つたものだ。とか、世間噂をされる通り、父も母も珍しく感心な、氣だての好い人々であると思つて居た。こんな結構な二た親に對して、倅は不孝をしたくも出来なかつた。

宗一が中學の五年生になつた時分から、父は今然放任主義を取つて、

「美代ちゃんに人の預り物だから仕方がないが、お前はもう萬事自分勝手にやつて見るが、己の若い時と違つて今の人間は立派な教育を受けて居るのだから、馬鹿でさへなけりや、何をしたつて大丈夫だ。」

かう云つて、毫末も干渉がましい眞似はしなかつた。本道樂の結果比較的多額の小遣ひを費消しようが、父と緒に夜遊びをして遅くならうが、父は倅を充分に信じて疑はなかつた。此の信だけども、宗一は眞に感謝すべきで、後暗い行爲があつては濟まない筈であつた。

美代子と宗一とが戀をするやうになつたのも、もと／＼此の放任主義のお蔭であつた。若い男女を一軒の内に置きながら、宗兵衛は一向無頓着で、何の心づかひもしないのみか、嘗て女

を一人で出すのは悪い。」と云つて、水天宮の縁日などへ美代子の外出する折には、必ず宗一を附けてやつた。内氣な美代子は、學校朋輩の少いところから、自然宗一を頼みにして、最初は極めて罪のない交際を續けて居た。彼等が知らず識らず、自分達の周圍へ愛情の垣根を結び繞らして了つた事を自覺したのは、茅が崎と東京と、別れ別れに日を送るやうになつてからであつた。

「己は美代子を戀して居るのであるまいか。若しやかう云ふ状態が、『戀』と云ふものではあるまいか。」

と、宗一は南湖院の病室の寢臺に据ゑられながら、始めて容易ならぬ關係を悟つた。美代子も宗一が茅が崎へ行つてから、急に濱町の家が淋しく感ぜられて、動もすれば學校の仕事が手に就かず、ぼんやりと考へ込むやうになつた。

「美代ちゃん、此の頃はさつぱり元氣がないぢやないか。」

かう云つて心配してくれるお品の素振さへ、何となくあいそがなくて、あれほど懐しかった「叔母さん」が、今更赤の他人のやうに恨めしくなつた。小田原へ歸省するついでに茅が崎を訪れようとしても、土曜日曜には大概送る送る見舞に行く宗兵衛夫婦の思はくを兼ねて、さう足繁くも立ち寄れなかつた。

いよく宗一が退院して、試験勉強に取りかゝる爲めに東京へ戻つて來ると、美代子は既に女學校を卒業して、國許へ歸つて居た。それから六月の末、沼津へ行きがけに、殆んど半年ぶりて宗一が小田原を音づれた時には、二人共もう昔のやうに無邪氣ではなかつた。宗一と言交す度毎に深い溜息をして、戀の炎が瞳の色に溢し輝いて居た。

親父の寛大を好い事にして、密かに女と手を握る。——世間の口に云はせたら、如何にも不都合な行爲であらう。しかし宗一としては、良心の苛責に對して、一應辯解の辭を持つて居た。萬一父に知れた時分に、彼は些かの躊躇なく、「私は美代子を戀して居ります。」と立派に答へ得るだけの、覺悟はついて居た。自分と美代子との間に、節操の純潔が保たれて居る以上、天地に恥づる所はない。唯つまらない誤解や心配を避ける爲めに、自ら進んで發表する必要がないだけである。と、さう云ふ風に考へたかつた。

新橋で美代子と別れて、二月ぶりに内へ歸つた晩のこと、宗一は平生の無口に似ず、得々として肉の附いた兩腕を捲くりながら、兩親と一緒に夕飯の膳を圍んで、いろ／＼の物語をした。「どうです、大分太つたでせう。一と夏の間二貫目も體量が殖えたんだから、此れで少しは人間らしくなつたでせう。」

かう云つて、彼はわざ／＼喰ひかけの茶碗と箸を置いて、びた／＼と胸板を叩いて見せた。

「ほんとに私も、先見た時にさう思つたよ。もう肋骨が隠れて了つたやうぢやないか。……何
 知ろしかし眞黒になつたもんだねえ。」

と、母は團扇で自分と宗兵衛とを等分に扇きながら、感心したやうに云つた。

「これで一時はもつと黒かつたんですよ。昔中の皮なんざ、きれいに剥けて了ひましたからね。」

「海水浴へ行くと、みんな、程らしく背中が剥けるものなんだね。アレで體が丈夫になる
 んだと云ふが、お前なんざ、全く海が利いなんだよ。——此れからあんまり馬鹿な勉強をして、
 體を壊さないやうにおしなさいよ。」

母はまだ安心が出来ないと見えて、こんな事を云つた。

「宗一に比べると、己の方が餘程太つてるな。大概の人は夏瘦せをすると云ふが、己は夏にな
 るとますます太る。」

と、宗兵衛は縁側の柱に凭れて兩肌を脱ぎ、むく／＼と膨れた腹の上の、臍のあたりを俯向
 いて眺めた。さうして、冷やつ／＼を肴にちびり／＼杯を乾して、涼しい風の吹き入れる庭先の、
 松葉牡丹の鉢をいぢくりながら、大好きな旅行の話が始めた。

「沼津と云ふところは鰻のうまい所だな。己が五六年前に行つた時に、何でも川ッ線の角にあ
 る鰻屋へ上つたが、田舎にしてはなかく旨いと思つたわけ。」

「あゝ、彼處に鰻屋がありますね。あの川の橋のところは景色がいゝんで、私も度々行きまし
 た。」

「沼津は海岸よりも却つてあの邊の街の方が面白いぢやないか。空が如何にも青々として居て、
 まるで廣重の五十三次の繪を見るやうだ。先づ東海道では彼處邊が一番だな。」

「へえ、そんなに好い景色なの。」と、お品は夫と倅の顔を見廻して、合槌を打つたが、宗兵衛
 はそんな事に頓着なく、夢中になつて話を續けた。

「あの千本松原で、六代御前が賴朝の使に首を切られさうになつたのを、文覺上人が命乞ひに
 駆け着けたといふんだが、あんな所で殺されたら、死ぬにしても好い氣持だらう。たしか高山
 樗牛といふ文學博士の墓も、江尻か何處かにあつたぢやないか。」

「えゝ」と云つて、宗一はちよいと意外の感に打たれた。六代は兎に角として、父が高山樗牛
 を知つて居るのは可笑しいと思つた。

「六代御前と云ふのは誰のこと？」

と、お品は團扇の手を止めて、宗兵衛の方を向いた。

「六代と云ふのは、平維盛卿の子供よ。義太夫の『鮭屋』の文句にあるだらう、『内侍は高野の
 文覺に、六代が事頼まれよ。』ツてえの彼れのことだ。淨瑠璃と云ふものも、満更嘘は書かなか

つたんだな。」

「『伊賀越』の『沼津』と云ふのも、彼處の事なんでせう。」

汽車が嫌ひで、生れてから一寸も東京の地を離れないお品は、旅行談になるといつも手持無沙汰で困る代りに、芝居の事なら一番の物識であつた。

「『伊賀越』なんぞは、ありやお前、みんな作り事に決まつて居るさ。」

かう云つて、宗兵衛は二本目の銚子を倒に捲つて、

「一膳軽くつけて貰はうか。」

と、右の手の太い指で、伏せてある茶碗の縁底をつまんだ。母はお櫃を引き寄せて飯を盛りながら、

「さう云へばお前、歸りに小田原へ寄つたのかい。」

と宗一に訊いた。

「いええ。」

と、云つて、宗一は恐い物にでも追ひかけられるやうに身を起して、二階の書齋へ上つて行つた。

其の晩から、宗一は成る可く両親の傍へ寄つて長話をしないやうにした。何か尋ねられると、

強て機嫌の好い聲を出して快活な返答をしながら、其の辭間に一枚物が挟まつて居るやうで、心から親しみ深い、馳れくしい態度にはなれなかつた。さうして、晝間は書齋で本を讀んだり、うたゝ寢をしたりして、夜になればぶらりと人形町へ散歩に出掛けた。

彼は今年ぐらゐ、住み馴れた東京の夏の夜の、美しさ懐しさをしみく味はつた事はなかつた。自分の生れた長谷川町堀越町界隈の灯の街——殊に緑日の宵の面白さ。兩側に列ぶ商賣の家々の電燈や瓦斯のあかりと、溝に沿うて露店を廣げた縁日商人のかんてらの光とが、右左から歩道の地面を照して其の間を通る人々の頬は、みんなつやつやと反射して輝いて居た。派手な中形の浴衣を着て、湯上りに薄化粧をした襟足をそよ風に吹かせ、手を取りながら歩いて歩く女の群の姿に、夜は一入鮮かな、水際立つた色彩を與へて見せた。彼等ばかり云ふ晩に生きる爲めに、生れて来た人間の如くあでやかであつた。宗一は其の群の中に揉まれて、一緒になつて呉服屋の硝子窓の前に立ち止まつたり、繪端書屋の役者の寫眞を眺めたりした。

ステッキを片手にバナマ帽を被つて、白地の單衣の上へ縮緬の兵兒帯を巻き着け、古道具屋や植木屋の店先を、氣輕に冷かして廻る旦那らしい人達もあつた。年頃の娘と連れ立つて、螢賣りの籠のほとりにゐんで居る老母もあつた。若い夫婦が唐物屋の帳場の椅子に腰を掛けて、香水の壺を買ひ求めて居ると、外に五六人の野次馬がたかつて、丸髻の恰好の好い妻君の後つ

きを見惚れて居ることあつた。到るところ扇風器と蓄音機を備へ付けた洋食屋の、煌々とした室内には、アイスクリームを食する客が一杯で、四つ角の廣告のイルミネーションが、青く赤く光つたり消えたりすると、其の下に澤山の子供が集まつて珍らしさうに仰いで居た。賑やかな大通を一つ曲つた。芳町住吉町の物静かな新道には、料理屋待合が數多く續いて、縁臺に涼んで居る藝者の傍を、新内語りが流して歩いたり、聲色遣ひが木を鳴らして過ぎたりした。さう云ふ有りふれた光景が、宗一には凡て新しく興味深く感ぜられた。

人形町を中心として、時には矢の倉の絹行燈を見に出かけるし、西河岸、茅場町、箱崎町あたりの縁日へ遊びに行くし、毎晩必ず十二時頃まで家を明けて居た。さうして、花やかな都會の刺戟に興奮された心を抱いて、夜遅く、濱町の暗い小路を歸つて来る途中、彼はいつでも美代子の事を考へて居た。彼の頭のうちには、往來で眼に觸れた幾組の夫婦の様子がまざまざと残つて居た。同じ散歩をするにしても、美代子と二人で世帯を持った後ならば、どれ程愉快を覚えるであらう。自分は是非學校に精を出して、素晴らしい成績で、早く大學を卒業しなければならぬと、遠い未來を胸に描いて、彼は頻りに自ら勵ました。

美代子からは、其の後二三度便りがあつた。世間の疑ひ 買はないやうに、わざと端書へ「岡田美代子」と禮々しく書き記し、「暫く御無沙汰仕り候ところ、皆様には御變りもなく候哉

とか、「宗ちゃんにもお暇の節小田原へ御出で下され度候。」とか、差し障りのない文句が簡単に連れてあつた。やがて其のうちに八月も暮れて、丁度小田原から四本目の端書のとどいた時は明日から二學期の始まると云ふ九月十日の夕ぐれであつた。

三

七十日の休暇の間、長らく人影を絶つて居た一高のグラウンドの土には、ところどころ草が沓々と打ち爛り、分館の廊下に挟まれた十坪ばかりの中庭は藤園の様になつて、百日紅の幹の蔭に、花の汚れた紫陽花が、憐ましげな頂を垂れて居た。新察の後の叢の中や、本館の煉瓦の隙門などには、書でも蟋蟀がちい／＼と鳴いて、遠い田舎から出て來た學生連の胸に、

「草の生ひ茂りたる愁しみ。」を覺えさせた。

熱い熱い夏の光、開つて來た經驗は、人々の丈夫さうな赤銅色の面に溢れ、見えた。主任の教授が出席簿を擡げて名前を呼ぶ時、順々に「はい」「はい」と答へて行く學生の元氣の好い聲は、教場の四壁に力強く響いた。久し振で一室に再會した同窓の連中は、互ひになつかしい眼を見張つて、返辭をした聲の方をふり向いた。別けても、去年の十一月以來缺席がちであつた

宗一の、せき復つたやうな雄々しい姿は、誰も彼も珍らしがった。

「どうしたい君、ひどく太つたぢやないか。何處かへ旅行でもしたのかい。」

「うん、沼津へ二月ばかり行つて居た。」

「それぢや、もう體は良くなつたらう。」

こんな應答を、宗一は幾度もした。

いろいろの學科の受持の教師が、入れ代り立ち代り教室へ現れて、新學期に用ふる教科書の名が、五つ六つ黒板へ掲示された。其の中にはマイヤーの萬國史だの、ゲーテのエーテルだの、古今集だのが書いてあつた。最後に井上と云ふ英語の教師が入つて来て、

「私の方は、ゴールドスミスのかう云ふ本を買つて来て下さい。」

かう云つて、黒板へする／＼と白墨を走らせながら、*She stoops to conquer.* と、直立體の文字で記した。

「タイトルは *She stoops to conquer* ですよ。ゴールドスミスの有名な喜劇で、標題を直譯すると、『彼の女は身を屈して成功を遂ぐ。』とでも云ひますかな。もう少し芝居の下題らしく譯せるでせうが、何かうまい言葉はありませんか。」

教授は早口にべらべらと喋舌つて、

「私の友人に、『滑稽戀の尺蠖蟲』と譯した人がありますが、此れなんぞは悪くないです。『尺蠖の屈するは云々』と云ふ諺から、蟲の尺蠖と女の酌取りとを掛けたんですな。全體喜劇の筋が、合嬢が酌婦に化けて、思ふ男と添ひ逢げる話なんですから、『戀の尺蠖蟲』は非常に面白いです。」

「先生、*to stoop* は『屈む』と云ふ意味なんですか。」

と、突然隅の方から質問を發した者があつた。

「え、*She stoops* で『彼の女は屈む』*to conquer* ——『征服する』即ち『征服す可く、彼の女はかゞむ。』ですよ。」

「そんなら、標題を『姫かがみ』としたら好いでせう。」

かういつたので、教授も生徒もどツと笑つた。さうして、みんな愉快きうに立ち上つて、ぞろ／＼と外の廊下へ出た。

久しく書籍に親しまなかつた宗一は、學校のかへりに神田の中西屋から丸善へ廻つて、早速語學の教科書だけを取り揃へ、ついでにホーソンのツワイズ、トールド、テールズや、獨逸譯と英譯のダンテの神曲などを買ひ求めた。さうして、途々電車の中や往來か歩きながら、丁寧に包んでくれた覆ひの紙を解いて、レクラム本のアンカットの頁を指で切り開いて、物珍しさ

うに一枚一枚眼を通した。少しの手垢も着かない、純白な紙の面には、獨逸の活字がこまかく鮮やかに印刷されて、遠い洋の向ふの、樸爛たる文華の國を想はせるやうな、甘い匂が爽やかに鼻をそよつた。名ばかり聞いて居て、まだ手に觸れた事のない一巻のエルテルを、此れから日一二三節づゝ習ひ覚えて、遅くも來年の春頃までに讀破することが出来ると思ふと、新學期の希望も快樂も幸福も、其のうちに溜んだ居るやうな心地がした。

町の内へ入つて、彼は暫く二階の書齋の本箱にいろ／＼の本を出し入れした後、レクラムはレクラム、キャツセルはキャツセルと云ふ工合に列べながら、遠くの方から眺めて見たり、また抽き抜いて拾ひ讀みをしたたり、そんな風に午後の半日を潰して了つた。早く獨逸のクラシツクがすらくと理解されるやうになりたい。少くとも今の自分の英語の程度ぐらゐに、喋舌つたり書いたりするやうになりたい。再來年の夏、法科大學へ入るまでには、是非とも獨逸語策勵を甘受しつゝ、自分の光輝ある將來に就いて、彼はさまざまの空想を描いた。

しかし、其の光輝ある將來も、美代子と云ふ者が居なかつたら、何等の價値も興味もないのであつた。美代子が始終宗一を忘れずに居てくれると云ふ事が、彼の精力の源泉でもあり、努力の基礎でもあつた。彼が倦まず撓まず勉強を續けて行くには、どうしても時々戀人のやさし

い言葉で、鞭撻の恵みを授かる必要があつた。彼は其の爲めに、一層通學を止めて向が岡の寄宿寮に當分居を定める方が便利だと思つた。刺戟のない、物淋しい兩親の膝下を放れて、野にうたふ小鳥のやうに開け擴げた、恣な友達同士の中に交はり、思ふがまゝに美代子と交通し、圖書館の藏書に親しんだ方が好いと考へた。父母には濟まない譯であるが、自分の生活に意義を與へるには、己むを得ない事であつた。

「僕は今度から寄宿舎へ入らうかと思ひます。其の方が時間も經濟だし、勉強も自由に出来ますから。」

と、其の晩宗一は父に頼んだ。

「そんなら、さうするがいら。」

と、宗兵衛は造作もなく承知して、

「下町に居るより運動も出来て、體が丈夫になるだらうし、今頃からちつと人中へ出て置くのも宜からう。」

と云つた

「それにしてもお前、明日から直ぐと行かなくてもいいだらう。着物は二三枚洗濯してあるけれど、夜具があればやあんまり汚いから。」

母はかう云つて、其の晩から、急に布團の縫ひ直しにかゝつた。

それから三日ばかり立つた宵に、宗一は荷物を俵に積んで、いよいよ濱町の家から本郷へ引き移る事になった。其の夜は丁度父が不在で、お品は女中と一纏に格子先まで送つて出ながら、「まあ好い月だこと。」

と、二た足三足からりころりと滑えた日和下駄の音をさせて、往來の中央へ進んで空を仰いだ。晝間のやうな月光を浴びた新道の地面は、お品の影がくつきりと印せられて、宗一の久留米緋の單衣の上に、秋らしい風がひやくと泌み通つた。彼は兩股の間に行李を挟んで、黙つて大空の月を見上げたが、今更兩親に氣の毒な、可哀さうなと云ふ感慨の胸に迫るのを覺えた。

「では行つて参ります。」

帽子を取つて、軽く頭を下げると、俵屋は梶棒を上げた。

「あ、ちよいとお待ち。——若い衆さん、もう一づ包みが何處かへ入らないかね。」

と、母は女中の手から、メリンスの風呂敷に包んだ大きな菓子袋を受け取つて、「此れをお友達にお土産に持つて行くといふ。書生さん達だから、とても嵩がなくつちや足りないだらうと思つて、烏賊煎餅をどつきり買はしたんだよ。」

かう云つて、宗一の膝の上へ載せてやつた。

「それちやお前、着物が汚れたら放つて置かないで、時々持つておいで。内で洗濯して上げるから。」

「え、では行つて参ります。」

と、宗一はもう一度頭を下げた。俵屋は、夢のやうに物靜かな下町の夜路を拾つて久松橋を渡り、堀留から伊勢町河岸の藏造りの家列の前を、ばたばたと走つて行つた。

大學前の大通りへ来た頃には、空はますます清えて、澄んだ空氣が水のやうに往來へ流れて居た。道路の左側には、人形町と同じに露店が並んで、其れを冷かして廻る人々の姿は、フット、ライトに照される役者の如く、あか／＼と浮き出て見えた。その中には夜目にも白い二本筋の制帽を冠り、小倉の袴を穿いて、参々伍々連れ立つて歩きつゝ、古本を流つたり、おでん屋の暖簾を潜つたりして居る一高の學生もあつた。自分も今夜から、彼等のやうに勝手な行動を取つて、若い人々に許されたい／＼の享樂を恣にする事が出来ると思へば、彼は何物にも換へ難い、貴い境遇に置かれたやうな心地がした。さうして、孤獨な、物淋しい地位に棄て置かれた兩親の状態を、成る可く想ひ起さないやうに努めた。

やがて俵屋は賑かな道分の通りから、一高の正門の内へ入つて行つた。彼は毎日通ふ學校の夜

景を眼にするのは今が始めてであつた。月光の漲る庭にこんもりと草木が生え茂つて、雨の降りそぐやうに絶え間なく聞える一面の蟲の音、黒く森閑と眠つて居る本館の建物、うす暗い闇に底光のする分館の硝子窓、——凡てが宗一には珍らしかつた。彼は蒸すやうな青葉の匂に鼻を衝かれながら、遠くに響く察歌の聲に耳を傾けた。

晝間の騒ぎに引き換て、死んだやうにひっそりと人氣の絶えた校舎の壁に沿ひながら、若樹の櫻を植込んだる構内の道を牛町足らすも奥へ進むと、忽ち其處に廣い／＼向ふが岡の高臺が展げた。遙に上野谷中の森を、朦朧とした秋霧の這ふ中に瞰下して、東寮、西寮、柔寮、北寮、南寮——の五つの棟が、ゴシツクの寺院のやうに、雲の角を尖らして聳えて居る。この頃の夜長を、全寮の學生が息を凝らして勉強して居るのであらう。一階、二階、三階のところ／＼に、なつかしい燈びの明りが洩れて瞬いて居る。宗一は何となく「燈火可親」と云ふ古い言葉に、新しい憧れの心を寄せた。

自分の部屋と定められた柔寮一番の石階のほとりに俥を捨て、そつと自修室の戸を開けると、二三人の同室生が専念に讀書して居る最中であつた。

「やあ来たな。」

かう云つて、机の上の本箱の蔭から頭を擡げたのは、クラスのうちでも頭腦が好くて人が好

て、いつ見ても快潤な親切な野村と云ふ男であつた。

「机は彼處に二つ空いとるぞ。執方でも君の好い方にし給へ。」

と、廊下に近いデスクの方を、野村は頷でしやくツてさせた。外の二人——清水と中島は、ちよいと近眼の顔を上げて、鐵縁の眼鏡を電燈にばかりとさせながら、黙つてお辭儀をしたかと思ふと、再びおもむろに本を読み續けた。

「誰、濟まないが、荷物を寢室まで手傳つてくれないか。」

「お、さうか。」

と、野村は氣輕に立ち上つて、宗一と一緒に行李や蒲團を二階の寢室へ運びながら、

「僕は君の來るのを待つとつたんだぞ。——君はたしか江戸ッ兒だらう。」

と、突然つかぬ事を訊いた。

「江戸ッ兒には違ひないが、あんまり江戸ッ兒らしい人間ぢやないよ。——何故。」

「僕は此れから君に就いて、大いに江戸趣味を研究するんぢや。リフアインされた都會の生活と云ふものを、覺えたいんぢや。ほんとに頼むぞ。」

かう云つて野村はいそ／＼と自修室へ下りて行つた。

二階の寢室と云ふのは、琉球堂を敷いた十畳あまりの日本間で、每晚就眠時間の午後十時か

ら十一時の間でなければ、電燈をともしなかつた。暗い室内には男臭い微臭い匂が籠つて、月が硝子越しに青白く射し込んで居た。既に布団へもぐつてぐつすり眠つた者もあれば、片隅に西洋蠟燭を立て、獨でこつ／＼勉強して居る者もあつた。

宗一は、一と通り自分の机へ書物を飾り付けた後、エルテルの下習ひに取りかゝつたが、場所馴れぬせぬか、どうも落ち着いて居られなかつた。暫くすると、彼はロセツチの詩集を懐ろにして、ぶらりと後庭の廣つ場へ歩いて行つた。

何と云ふ美しい晩であらう。……細い草葉の数が、一枚一枚讀めるやうに鮮かで、しつとりとした夜露の玉が麻裏草履にこぼれかゝり、二三歩の間に宗一の素足はつや／＼と濡れて光つて來た。俯向いて月を踏んで居る彼の胸のあたりには、自分の形が黒い影を落して、明瞭に染出された。

練兵場のやうに遠く續いた垣々たるグラウンドは、さながら大きな湖水の如く透徹つた夜色の底へ沈んで、遮る物もない遙な地上四五尺のところには、一抹の雲が白く淡く棚引いて居る。更け行く空は、冷き光が皎々と冴え返つて、宗一の身の周囲には一點の人影さへも見當らない。

此の清浄な莊嚴な自然に包まれてゐて居る時、彼は人形町の灯びも、廣小路の絹行燈も、懐しいとは思はなかつた。

恍惚とした酔ひ心地を胸に湛へながら、彼は運動場の東北隅にある『小便の森』——寮生が常に放尿をするので、かう云ふ稱呼を附けられて居た。——の木陰に凭れた。寂寥たる四邊の沈黙の裏に、何者か自分の耳元へ來つて、ロマンチックな、センチメンタルな、哀韻の叫びを傳へるやうな氣持がした。

「あゝ、かう云ふ晩に美代子はどうして居るだらう。」

自分に朗かな聲があるならば、豊かな連想があるならば、咽喉を搾つて、息の續く限り憧憬の歌を唄つて見ようものを。成らう事なら、今夜の中に小田原迄跳んで行つて、月輪の銀と碎ける波打際の砂濱に、唯二人膝を擦り寄せ、熱い涙をさめ／＼と瞳に潤ませて、泣き明して見やうものを……。

セロソチの詩集を膝の上に開くと、二三枚の頁の縁をそよがせながら、何處からともなく秋風が吹き渡つて居る。現とも幻ともつかない、謎のやうな光がしら／＼と滲み入る紙幅の面に“Sudden Light”と、はつきり浮き出て見える太い活字は、大方詩の題であらう、字體の小さい本文の方は、拾ひ讀みをするさへ覺束なげに、月あかりの中へ溶け込んで、うすく消えて了つて居る。

“Sudden Light”——彼は其詩の本文を、嘗て讀んだ事があるやうに思つた。

何でも其れは戀の詩であつた。此の世に生を真ける前から、宿命の力に結び付けられた男と女の、因縁の深さを歌つた戀の詩であつた。雲の切れ目からさつと青空が閃いて、忽ち又失せるやうに、其の男の眼の前に、前の世の有りし姿がぼつと現れる。過去の世界に於いても、今と變らず愛し合ひ契り合つて居る二人の様子が、幻燈の如くありくと男の心に映る——そんな意味を歌つた戀の詩であつた。月光の羅衣に蔽はれて、おぼろに霞んで居る文章の字句は別らないでも、彼は其の詩のやさしい思想と、暖かい調子とを思ひ起す事が出来た。自分もロセツチのやうな感情を、美代子に對して抱いて居たい。過去未來の世界はもとより、國を南北に隔つとも二人の身體には同じ血潮が脈を打つて流れて居る。小田原と東京と、二十里の西と東に月を仰いで、互に魂を通はせて居る。……

「橋君ちやありませんか。」

かう云つて、不意に後から呼びかけた者がある。中學時代から、宗一より一級下の後輩、——文科志望の佐々木と云ふ男で、クリ／＼と五分刻にした、人並より大きく圓い頭の鉢を聲やかしながら、二三間先の原のまん中に衝立つた儘、

「どうも君に似てゐると思ひましたが、矢つぱりさうでしたね。いつから察に入つたんです。」と、田舎者らしい、純朴な律義な句調で訊いた。

「今夜。」

「あゝさうですか。……花やかな下町の生活に比べると、察の生活は又色彩が違つて面白いでせう。察でも今夜のやうなしんみりした晩は、めつたにありませんよ。あゝ好い月ぢやありませんか。」

かう云つた佐々木の聲は、柄にもなく女のやうに細く生めいて、如何にも興奮した神經を抑へ難いと云ふ風であつた。彼は無骨な容貌に似合はぬ美音家で、平生から詩を吟するのを得意として居た。

「日本橋なんぞに居ると、あゝ云ふ蟲の音は聞かれないね。」

「さうでせう。……けれどもかう云ふ晩に、下町の新道なんかを通過つて、新内の流しを聞くと何ともかとも云ひやうのない、うら悲しい氣持がしますね。僕は下町趣味のうちで、新内流しが一番好きです。徳富蘆花が『自然と人生』の中に書いて居ますが、ほんとに彼れは *It is sad music of humanity.* ですね。」

感激の深い言葉に抑揚頓挫を付けながら、熱心な、淀みのない辯舌で、佐々木は説教でもするやうに滾々と語つた。

「君はヨーヅヨースが大好きだつたが、此の頃でも相變らずかい。新内流しと、ヨーヅヨース

と執方がいゝ。」

「僕は執方も好きですよ。僕のやうな田舎者は、ヨーロッパの自然に對する冥想や咏嘆の詩に、いくら啓發されてるか知れませんが。それあれ、僕だつて、浦里時次郎のやうな悲劇に憧れることもありませうけれども、中學時から感化を受けたヨーロッパの恩を忘れることは出来ませんよ。戀と自然とは、執方が執方とも云へないだらうと思ふんです。」

彼は自分が眞面目に考へて居る事ならば、どんな場合でも、誰の前でも遠慮會釋なく酒々と繰返るのが常で、臆病な小心な氣質の一面に、「野人禮に媚はざる」、正直な田舎者の特長を備へて居た。

「それはさうと、君、いつかのHの話はどうなつたかい。」

黙つて相手の物語を聽いて居た宗一は、ふと何かを想ひ出したやうに、頂を上げてかう尋ねた。

「あれですか、あれは大分話が進んで來ました。親父も承知してくれましたから、次第に依つたら結婚の約束をするかも知れません」

「それは好い鹽梅だね。」

と、宗一は心から友人の幸福を祈るやうな眼つきをして、佐々木を見上げた。色の黒い、頑

丈な佐々木の顔も、今夜ばかりは美しいつやを帯びて、輪廓までが優しい、きやしやな曲線に包まれて見えた。

「それに僕のやうな男は、結婚した方が却つて落ち着いて勉強も出来ると思ふんですよ。實は先達春子の兄の方から、ちよいとそんな話があつたもんですから、親父が内々先方の國許の方へ、家の様子を探りに出かけたんです、今のところ、はつきり明言は出来ませんが、まあ、多分結婚は一二年の後として、約束だけでも取り交はす事になるでせう。」

「さうし給へ。君と春子さんに限らず、互に戀し合つて居ながら、結婚もせずにグツ／＼して居る位、不爲めの事はないよ。親の目を忍んで怪しからぬとか、學生の癖に不都合だとか、無意味な理窟を云つて、無闇に中を裂かうとするのは、結局男女を墮落させる元なんだ。學生時代に戀に陥つたら、間違ひの起らない間に、どん／＼結婚の手續を踏んで、安心して了はなけりや駄目だ。」

珍らしく宗一は元氣づいて、こんな意見を吐いた。さうして、ロセツチを懐に收めて立ち上つた。

「僕もさう思つたから、一層の事正々堂々と親父に打明けて了つたんです……。」

佐々木は一緒に列んで、東寮の方へ歩を移し乍ら、相手の議論など耳へ入らないやうに、猶

も自分の事許り話し續けた。

「親父はなかく如才ない方で、僕の性分をすツかり呑み込んで居るものですから、成るべく逆らはない方針を取る積りなんでせう。それに妹もね、春子さんなら學校友達で、氣心の解つた人だから、大變いゝつて喜んで居ます。」

「そりや本當に結構だ。いづれお披露めの時にはウンと御馳走して貰はう。」

「え、是非ね、屹度儀式は田舎の家でやる事になるでせうが、僕の國の方では一人でも東京のお客の多いのを見えにする風習があつてね、父にしろ母にしろ、君達が多勢来て下されば、嬉しがるに極まつて居ますから、ほんとにお呼びしますよ……」

「そ ぢや失敬。」

宗一は少しうるさくなつて、

「僕の部屋は彼處だから、ちツと遊びに来給へ。」

と、桑寮の廊下へ上つて行つた。

もう十時過ぎであつた。自修室へ入ると、みんな賑かに喋舌りながら、烏賊煎餅をばりばりやつて居た。

「おい橋、ちよいと君の留守に失敬して風呂敷を開けたぞ。大方お土産だらうと思つて、無斷

で頂戴してるところだ。」

かう云つたのは、杉浦と云ふ、色の白い才子肌の男であつた。

「僕は今しがた戸外から歸つて来て、野村に君の入寮した話を聞いたんだ。何しろ野村は君に依つて、盛んに江戸趣味を鼓吹されたいんださうだから、何卒一つシツカリ教へてやつてくれ給へ。——先生此の頃は豆絞りの手拭をぶら下げて朝湯に出かけたり、毎朝笹の雪まで豆腐を喰ひに行つたり、大に牛可通を振り廻して手に負へないで困つてるんだから。」

「あはゝゝゝ」と、野村は子供のやうに顔を赤くして面喰ひながら、

「だつて橋君、笹の雪の豆腐は全くうまいだらう。——さうケチを附けるには及ばんぞ杉浦。」

「然らば豆腐の方は、うまいから喰ひに行くとして、熱い湯へ瘦我慢をして漬つてるのは、どうしてもスコ變だ。密に秀才野村君の爲めに惜むれ。」

「杉浦だつて、あんまり人の悪口は云はれんよ。……君は今夜も昇之助へ行つたんだらう。」

容貌魁偉な運動家の中島が、嘴を入れる。

「ふん、僕の昇之助は一向可笑しくないさ。義太夫と云ふ物は健全なる娯樂だから、未だ文藝の名を冠する譯には行かないさ。」

「君は口が達者だなあ。」中島は高い鼻を蠢かして、無邪氣に感嘆した。

「所で橋君を紹介するがね。」と、杉浦はいよいよ圖に乗つて辯舌爽かに、

「此の部屋の住人で、一番えらくツて、且正直な人間は中島さんだよ。見給へ。あの面魂からして實に非凡だらう。僕は中島の横顔を見ると、いつでも中學の世界歴史の教科書にあつたザユリアス、シーザーの肖像を想ひ出すよ。色こそ黒けれ、鼻高く、唇締め、顴骨秀で、英邁の氣、自ら眉宇の間に溢れてるだらう。どうしても豪傑の相があるよ……。」

「あは、は、は、いやにわしの事を褒めるぢやないか。」

「……それ、それ、あの笑つたところなんか洒々落々たる英雄の襟懷が窺はれるだらう。かんら、かんらと打ち笑ひと云ふのは、蓋し此處を云ふのだけ。」

「もう好い加減にせんか。」

「まあ、黙つて聞け。……智勇兼備の良將と云ふのは中島の事だよ。野球の選手で、柔道が初段で、而も頭腦の明敏なること、秀才野村君と伯仲の間にある。それから僕の敬服するのは、胸中常に光風霽月の如く、一點の邪氣を留めない事だね。あの通り、僕に賞讃の辭を浴びせかけられて、周章狼狽、爲す所を知らざるのを見て、いかに無邪氣だか解るだらう、中島にして始めて、小兒の如き英雄たり得るんだね。」

「わしも君の才氣煥發には、感心しとるよ。」

と、中島は手持ち無汰沙の照れ隠しを云つた。

「僕の才氣煥發は、君を俟たずして明かだよ。——それから、橋君、此の清水だがね、此の男は、朶察一番唯一のクリスチャンにして、ピエリタンであります。」と、杉浦は肩を聳やかして、瘦ぎすの、色の青褪めた、清水の方を睨一睨した。

「出鱈目ばかり云ふ男だなあ。」

「出鱈目ぢやないさ。それとも君はクリスチャンぢやないのかい。満座の中で、僕はクリスチャンでありますと宣言する勇氣のないやうな信仰なら、止しにするさ。」

「僕はいつでも立派に、クリスチャンだと云つてるぢやないか。」

神經質の清水は、少し氣色ばんで憤然とした。

「だから僕の云ふ事は出鱈目ぢやないよ。當世のクリスチャンは、因循な、女性的の人間が多いのに反して清水はテニスが得意で、此の上もなく活潑なのは偉とするに足ります。もう一つ得意なのは英語であります。ふだん日本語を使ふ時でも、度々 *alasi wā ohi wā, bravo!* とか、英語の間投詞が出て困るくらゐです。」

みんな手を叩いて、哄笑した。

「従つて外國人にも交際が廣く、西洋のエチケットに通曉すること、清水君の如きはめつたにあ

りません。いつもきちんと折目の正しい制服を着、汚れ目のないカラーを附けた優雅なスタイルは、常に我々の欽仰するところでありませう。お洒落と基督教とは必ずしも矛盾するものではありません。カーライルのやうな無作法な、禮讓を辨へざる人間は、清水君は大嫌ひださうです。江戸趣味の鼓吹は野村秀才之に任じ、ハイカラの鼓吹は、専ら清水クリスチャンが之に任じます。」

清水は堅く閉ぢた唇の周圍に、にや／＼と煮え切らない笑ひを洩らした。

「以上の三人は、我々のうちで最も特徴のある人間であります。勿論。其の他の諸君と雖も決して碌々たる連中ではありません。みんな何處へ出しても恥かしからぬ、立派な息子さん達ばかりであります。——うむ、さう、さう、それから橋君、君はさつき寢室へ行つたらう。」

「うむ」

「大山が蒲團を被つて寢て居やしなかつたか。」

「大山だか誰だか、一人寢て居たよ。」

「あの男は全くXだれ。僕の爛眼を以てしても、大山ばかりは馬鹿だが、えらいんだか、判らんね。恐らく自分でも好く判らないんだらうと思ふ。ズバ抜けた大人物のやうな、さうかと思ふと、感じの鈍い愚物のやうな、とんと要領を得ない男だ。唯人が勉強してゐる間は、寢たり遊んだ

りして居て、草木も眠る丑滿時分にこっそりと勉強する事だけは確なんだ。」

「けれども、彼の男は不思議に成績が好いよ。」

かう云つたのは中島である。

「さうだよ。だから僕は結局えらいんじゃないかと思ふ。大石英雄だの、西郷隆盛なんて云ふのは、あんな男が氣紛れにえらくなつたんだぜ。恨むらくは、僕に伊藤仁齋の明なきことをだ。」

「伊藤仁齋は君のやうな饒舌家ぢやなかつたらう。」

と、清水が云つた。

「生意氣な事を云ふなよ。クリスチャンに伊藤仁齋は解らないから。」

杉浦は喰しい眼つきをして清水を睨んだ。清水は又になや／＼と薄笑ひをして、それきり黙つて了つた。

「橋君、柔寮一番のドライ、ナーセンと云ふものを知つてるかい。」

杉浦の一と息ついた隙を狙つて、野村が口を挟んだ。

「中島のローマン、ノーズと大山の團子ツ鼻と僕の市村羽左衛門式の鼻を稱して、ドライ、ナーセンと云ふんだ。」

と、杉浦は直に引き取つて、説明した。

いつの間にか烏賊煎餅をすつかり喰ひ盡して、冷めなくなつた番茶をがぶく呑みながら、みんな十一時近くまで喋舌り續けて居た。さうして、二階へ上つて行つたのは、電燈の消えた後であつた。

「おい君、野村の寢間着を見てやつてくれ給へ。——此れが江戸趣味なんださうだから。」

寢る時、杉浦は宗一にかう云ひながら、茶格子の單衣に絲織のどてらを襲れてゐる野村の立姿を、蠟燭で照して見せた。

「橘君、君の蒲團は、そりや秩父銘仙かい。」

野村は寧ろ得意で、蠟燭のあかりを受けながら訊いた。

「何だか僕はよく知らない。」

と、宗一は夜具の中へもぐつた。

暗闇に馴れないせいも、境迄の變つた爲めか、其の晩宗一は容易に眠られないで、彼方此方寢返りを打つた。凡そ一時間ばかり過ぎた頃、

「おい、君はまだ寢られないのかい。」

と、闇中の何處かで杉浦の聲がした。

「うん、君もまだかい。」

「僕は子供の時から、寢つきが悪くツて困る。」

かう云つた杉浦の調子は、いつになく沈鬱であつた。

それから暫くとりとりとして、再び宗一は眼を覺ました。見ると、大山は枕の上へ頬杖を衝いて、蠟燭の火影を机の抽き出しで包み、眞言の行者のやうに輝く瞳を一心不亂に書物へ曝して居た。

四

寢室の窓から望む上野の木々の梢が、一日一日と黄ばむで來た。朝は硝子障子に青々と澄えた空が映つて、力の弱い光線が疊の目の上へハッキリと落ちて居る。ほんと夜具を撥れ除けて起き上ると、寢間着の肩へそよ／＼とつめたい風があたつて、何となく氣が引き締るやうである。宗一は顔を洗ふついでに毎日必ず浴室へ行つて、水風呂の中へ飛び込んだ。

頻りに快晴の天氣が打ち續いて、教場に授業を受けて居ながらも、學生達は爽やかな外氣を戀ひ慕ひ、心は常に野を夢みた。勉強の爲め圖書館へ隠れても、寢室へ逃げ込んでも、秋の囁きが耳に聞え、眼に映り、魂をそそのかして、日の暮れるまでは落ちていて讀書も出来なかつた。午後の三時頃、學校が済んで寮へ戻ると、みんなカラ／＼と朴齒の下駄を鳴らしながら、ステッキを衝いて何處かへ消え失せて了ふ。主なき自修室の机の上へ放り出された教科書に、一日

日がかんかん照つて真がひとりでにびらり、びらりと蹴つて居るが、誰も夜になるまで歸つて來ない。中島はグラウンドへ行つて、野球の練習をして居る。清水はテニスコートへ出て汗を掻いて居る。野村は「交際術の一種」と稱して、池の端の基會所へ通つて居る。此の頃は大分上達して初段に六目まで漕ぎ付けたと云ふ。

「ふと歸つて、ふと出で、行く日和かな。——どうだい、名吟だらう。」

と云ひながら、杉浦も出かけて行く。或る時は清水と一緒にテニスをやつたり、野村に同伴して基の研究をしたり、連中を狩り催して艇庫から船を出したり、野球の試合に馳せ参じたり、杉浦は多技多能を以て誇りとして居るだけに、殆ど遊ぶ方で寧日がない。夜になつても、ぶいと姿が見えなくなつて、歸るのは通例十時過ぎである。いつても試験の四日ぐらゐ前から愴惶として準備に着手し、大概五番以上の成績を占めて居る。

大山も何處へ行くのだから、屹度散歩に出かけて了ふ。超然として他の連中とは關係なく、勝手に歸つて來て、飯を食つて、勝手に寝て、勝手に勉強して居る。

宗一も半分は大山の眞似をして、晝間自修室の空明きの時分に、セッセと讀書したり、小田原へ送る手紙を認めたりした。

「戀は人をして孤獨ならしむ。」

さう云ふ考へが彼には嬉しかった。強て淋しい所へ身を置いて、美代子の事を考へながら、勉強をする。戀の手紙を書く。乃至甘い冥想に耽る。……其れが無上の楽しみであつた。

一と月程の間に、沙風に染まつた皮膚の色はすっかり剥けて、顔も手足もつやくと白くなつた。日増しに肥えて行く肉附きを、時々湯上りの鏡にうつしてびた／＼と腕を叩きながら、彼は暫く自分の裸體に見惚れてゐる事もあつた。或る晩、宗一は運動のついでに、本郷の唐物屋から小型の鏡を買つて來て、それを机の上に立てた。

「やあ、君い、物を買つて來たれ。」

杉浦は早速目をつけて、自分の顔をうつして見ながら、

「大分髯が生えたなあ。」

と、頷を撫で、浩嘆するやうに云つた。

土曜日曜に宗一が歸宅する時は、屹度途中まで野村が附いて來て、

「君、日本橋で縮のうまいのは何處だらう。」

など、晝飯の案内を頼む。花村、中鐵から追々進んで大國屋などへも上り込む。いつも勘定となると、

「そりやいかん、僕に拂はしてくれ給へ。」

と、野村は懐から帛紗に包んだ古い織れの紙入れを出す。面倒臭いと思ひながらも、始めの四五度は付き合つた宗一も、しまひには氣の毒になつて、

「今日は少し都合が悪いから、失敬する。——板新道にうまい天ぶら屋があるさうだから、君行つて見たまへ。」

こんな事を云つて、斷つて了ふ。すると野村は路を尋ねて一人で出掛け、歸りに歌舞伎座、明治座あたりを覗いて、番附や筋書を大切に抱へて、夜遅く寮へ戻つて來ると、なんにも知らない運動家の中島を捉へて得意の觀劇談を試みる。

「梅幸か、梅幸はわしも知つとるよ。暑中休暇に國の方へ來て芝居をやつたことがある。——なかく、好い女子になるのう。あれは君、上手なのかい。」

と、中島が尋ねる。

「うむ、芝翫よりは僕は好きだぞ。」

「さうかな、芝翫よりはいいかな。——わしの親父は權十郎と云ふ役者を大邊褒めて居つたがそんなにいゝのかい。」

「權十郎、云ふのは、今居らんよ、そりやきつと昔の役者だらう。」

二人が眞面目で問答して居るところへ、清水がスツキリした、ひよる長い制服姿で、尖つた

靴の爪先を立てながら、西洋流に足音を忍ばせて入つて來る。

「清水君、今日は何處へ行つたんだい。」

と、野村は氣輕に聲をかける。

「僕か、僕は代々木のミス、リ、ーと云ふ女の所まで行つて來た。」

「リ、ーと云ふのは、オールド、ミスかい。」

「うん、三十前後のレデーだよ。僕は事に依ると、今夜英語の寢言を云ふかも知れんぞ。何でも二三時間英語ばかりで話し續けて居たんだから。」

「大したもんだなあ。」

と、中島は冷かすやうな口調を弄したが、生憎杉浦が居ないので、辛辣な警句も出ない。

さう云ふ晩に、杉浦は大概娛樂園か、江知勝あたりへ二三人で飲みに行つて居た。さうして、門限の過ぎた時分にこつそり生垣を乗り越え、高い調子で笑つたり、歌つたり、喚いたりしながら、眞晝に酔拂つて歸つて來ると、ガタンと突慥食に寢室のドアを開けて、開け放したまふ赤裸で布團の中へもぐり込んで了ふ。

小田原からは、五日に一遍ぐらゐ、鴉色の洋紙に長々と書き列れて、宗一の許へ送つて來た。

「あたし東京へ行きたくつて、行きたくつて仕様がないのよ。宗ちゃんにも御目にかゝりたいし、叔母さんにも随分御無沙汰して濟まないけれど、どうしても當分は出られないの。此れはごく／＼祕密なのよ。母も相談に與らないらしいのよ。實は此の間、母がそつとあたしを呼んで、お父さんから結婚の話が出たら、お前は承知するつもりかッて尋ねられたの。何と云つて好いか解らないから、おッ母さんさへ承知ならッて、云つて置いたの。勿論まだハッキリと決まつた譯ぢやないけれど、此の頃は氣が落ち着かないで、仕様がありません……。」

それから、又二三日過ぎて、
「……先日の手紙、宗ちゃん御覽になつて。寄宿舎なんぞへ度々手紙を上げて悪かないの。うるさいと思召すか知れないけれど、此の頃は淋しくつて、傾りがなくつて、手紙でも書くより外、氣が紛れないの。ほんとに濱町に居た時分は、賑かて面白かつたわね。あたし彼の時分がなつかしくつてならないのよ……。」

手紙の文句は、だんだん細やかな、切ない情を訴へて、しみ／＼と書き綴られてあつた。森閑とした晝の寢室で、胸をときめかせながら讀んでゐるうちに、宗一は譯もなくほろ／＼と涙を流した。女は婉曲に自分へ結婚を迫つて居るのだ。他から結婚問題の持ち上らぬ先に、早く自分と話をつけて了ひたいのだ。さうだとすれば、宗一の取るべき方法は自ら明かであつた。

其の運動に着手する順序として、兎に角一應美代子に會つた上シツカリと當人の意向を突き止めて置きたい。

「御手紙拜見仕り候。就いては近日中に拜顔、篤と御相談致したき事有之、小生の方より參上致す可きか、それとも單身御上京あるか、いづれにても差支無之候間、其邊の御都合伺ひ度く至急御一報下され度候。」

好ましい事ではないが、己むを得ず女名前にして、宗一は直ぐに返書に認めた。

其の後、二日立つても三日立つても美代子からは何とも云つて來なかつた。彼は今更早まり過ぎたやうに感ぜられて、いざと云ふ瀬戸際に、女が躊躇して居るのかとも想像した。自分のした事は、あまり輕擧の嫌ひがなかつたらうか。自分は結局、あの輕擧を輕擧として、後悔しなければならぬのであらうか、女は自分の心を見抜いたまゝ、自分を放り出して、棄て去つて了ふのであらうか……。

「君は昨今意氣消沈してゐるね。」

と、杉浦は或る時、晝飯の休み時間にうら／＼かなあたりをいゝ石段へ腰をかけて、ぼんやりとテニスを見てゐる宗一の肩を叩いた。

「さうかい、そんな譯はないんだが。」

「譯がないとは云はせないぞ。逐一僕に白状し給へ。」

かう云つて、杉浦はにや／＼と底氣味悪く笑つた。

「何を白状するんだい。」

「江戸兒と云ふものは、もう少し虚心坦懐でなくちやいかんぞ。相州小田原の消印のある手紙は、ありや一體何だい。」

ところへ、清水が洋服の上着を脱いだ軽快ないでたちで、ラケットを持つたまゝ、コートから駈けて來た。

「橘君、あの手紙では大分杉浦が心配してるぞ。もう疾うからみんなで疑問にして居たんだ。君はどうもいかなあ。」

と、ツボンのポケットから、眞白な、なまめかしいハンケチを出して、の汗を拭き／＼、息をせい／＼はすませ乍ら、

「……僕だつて、そんな解らずぢやないから、隠さなくたツてい／＼ぞ。そりや何だよ。本當に、眞面目なラブならば、僕等の信託と少しも矛盾しないばかりか、寧ろ同情を持つてるよ。」かう云つて、清水は宗一の傍へ腰を下した。シャツがべつ／＼と濡れてくツ着いて、胸隔の狭い、細長い胸が呼吸の度毎に激しく波打つて居る。

コートの方では絶え間なくぼん、ぼん、と球の音がした。其れが小春日和の朗かな空に響いて、ネットを掠めて走つて行く球が、白線を描きつゝ、流星のやうに飛び違ひ、入り亂れる。

「原田ア、スマイルが好いぞウ。」

清水は瘦せた體から、大聲を出して怒鳴つた、原田と呼ばれた男は、半顔にて、かかと緒色の日光を浴びて、眉を蹙めて球を打ちながら、ちよいと此方に向いてニツコリした。

「……一體あの手紙の主は何者だい。娘か、藝者か。」

杉浦は眞顔を作つて、詰るやうに、

「……兎に角堂々と狀袋へ名前を書いて寄越すんだから、人目を欲てるれ。え、おい、一體あれは娘か藝者か。」

「まあ、執方でもい／＼さ、何れ話すから。」

「いや、執方でもよくないよ。娘か藝者か、其處が判明するに従つて、我々の肩の入れ方に大差を生ずるからな。君にしても、僕等の臂押しがあれば、意を強うするに足るぞ、非常に重大な利害問題だぜ。」

「野村は、何でも君の事だから、相手はいなせな藝者に違ひないツて、頻りに想像を逞しくして居るからなあ。」

かう云つたのは、清水である。

「若し美代ちやんなる者が藝者だとすると、野村の江戸趣味先生は喜ぶかも知れないが、清水ビョーリタンは之を排斥するさうだ。成るべく美代ちやんが其家の令嬢で、英語がべら／＼で、洋服が似合つて、理想の高い淑女である事を希ふのださうだ。」

「僕はさう云つたんぢやないよ、藝者だつて眞面目な戀ならばいゝさ。」

「成る程、そんなら猶の事安心だ。君、君、云ひ給へ。」

其の時、からん、からん、と授業の知らせの鐘が鳴つた。

「何れ機会があつたら、キツと話すよ。」

「うん、今夜あたり、飲みながらゆつくり聞かう。——今度の時間は倫理だな、おい、ラケットを倍せ。」

杉浦は清水の手からラケットを奪つて、

「返辭をして置いてくれ給へ。」

かう云ひ捨て、コートの方へ駈けて行つた。彼は學課が氣に入らないと、いつでも教場へ出なかつた。而して、教師が出席簿を讀み上げる時だけ、友人に頼んで、代つて返辭をして貰ふのが常であつた。

「僕は、返辭をするのは困るよ。」

清水は苦々しい調子で云つた。

「そんなら橋に頼んだぞッ。」

かう叫びながら、杉浦はぼんと球を青空へ打つた。

宗一は倫理のノートを取りに自修室へ入つたが、いつの間にか一通の手紙が、自分の机に載せてあつた。考へると丁度一週間目に、小田原から返辭が届いたのである。封書ではあるが、文句は極めて短く、而も巻紙へ鉛筆であわただしげに、

「御返事がおくれてほんとに申譯がありません。あれから急にいろ／＼の事件が降つて湧いて、宗ちやんに手紙を上げるのさへ、内證でなければ出来なくなつたの。今日は父も母も留守なので、やう／＼ひまを見て、此れだけ書いたのよ。まことに濟みませんが、此れから宗ちやんもあんまり手紙をよこさないやうにして下さい。若しよんどころない用事があつたなら、端書へちやんと本名を記してよこして下さい。」

と、ぞんざいな走り書で認めてある。

どうしても宗一には、「自分の事を断念してくれ。」と、云ふやうにしか判じられなかつた。戀しさと、哀れさと、腹立たしさが、胸の内を渦を卷いた。恐ろしい力で、頭をグワンと撲たれ

たやうに、體中が痺れて、心が晦くなつて、意氣も根氣も張合も、彼は一度に取り落した。
 「清水君、僕も休むから君が嫌なら誰かに杉浦と僕の返辭を頼んでくれ給へ。」
 かう云ひ捨て、彼は散歩に飛び出した。

僅か一瞬の間に、自分の境遇が激しい變化を來たしたやうに思はれた。戸外を歩きながら、自分で自分の悲しい顔が、見えるやうに感ぜられた。往來には午後一時の日が黄色く照つて、眼に快い程の明るさが、ぼつと大地へ映つて居る。眞直な本郷通りが、路を行く人の下駄の齒まで數へられさうに、果から果へくつきりと澄んで冴え返つて、追分の角へ立ちながら「おいおい」と呼んだらば、三丁目の電車の終點に聲が響きさうである。遠くの方の家々の一部や、人間の着物などが、時々白く小さく、ピカ／＼と光る。其の細かい、光る物を彼は遙にザット視詰めてぼんやりと歩いて居た。大學の正門から血色のすぐれた四五人の角帽が、ノートを抱へて威勢よく語り合ひつゝ、彼と擦れ違ひに駒込の方へ行つた。

何だかまだ、一縷の望みがあるやうにも考へられた。唯あの手紙の文面を臆測しただけで、がっかりして了ふのは、早計のやうにも信じられた。平生の美代子の性質から推すと、輕々しく自分を棄て、父の云ふなり次第に、心にもない結婚をする筈がない。少くとも、自分と結婚が出來ると云ふ、希望が確であつたならば、擇んで他へ嫁ぐ筈はあるまい。さう解釋するの

至當であつた。さう解釋して、宗一の方からも、堂々と美代子の家へ結婚を申し込んで見るのが、上策であつた。

「おい、獨で何處へ行くんだ。」

丁度青木堂の前へ來た時、宗一は聲をかけられて振り返つた。杉浦と、もう一人の見知らぬ男が連れ立つて、後から追ひ着いて來た。

「何だい、君も休んぢまつたのか。僕の返辭はどうしたんだい。」

「清水に話して置いたから、誰かに頼んでくれたらう。」

「いやにそわ／＼して居るぢやないか。全體何處へ出かけるんだ。例の手紙の一件がね。」

「あんまり天氣がいら／＼から、ぶら／＼歩いて見ようかと思つて。」

宗一はもどかしさうに呑みながら、浮かぬ顔をして、出放題を云つた。

「此れから柴又の川甚へ行くんだが、君も一緒に付き合ひ給へ。それともお邪魔かれ。」
 「うゝん、そんな事はない。」

一層こんな時には、友達と一緒に田舎の景色を眺めて、酒を飲むのも悪くない。と、宗一は思つた。

「君に此の男を紹介する。——此れは佛法の山口といふ人間だ。始終女郎賣ばかりして、向

張合も根氣も張合も、彼は一度に取り落した。
 強待り

陵の健兒の面汚しを一手に引き受けてる男なんだが、感心に少しばかり端唄がうまいんだよ。まあ後で川甚へ行つたら、ゆつくり聞けるがね。」

「何を云ふとるんぢや君、初對面の人に、そんな事を云はんでもいゝがな。」

と、山口は、青黒い、むくんだ顔を迷惑さうに聳めたが、やがて聳だらけの顔を揺るがして、から／＼と如才なく高笑ひをしながら、

「や、橋さん、お名前はかかれてから承知致して居ります。江戸趣味の方では、野村君の先生ださうで。」

と、眼鏡の奥から、ぎよろりとした、一と癖ありげな瞳に愛嬌を含ませて、下服れの頬へ深い皺を作つて、薄氣味悪く、こゝにこゝとして見せる。古ぼけた新銘仙の袴の上へ、紡績の縮入羽織を重ね、裾の綻びた小倉の袴にびたん、こな薩摩下駄を穿いたところは、如何にも胡散臭くて、端唄を呻りさうな柄でもない。宗一は、同じ二本筋の帽子を冠つた學生のうちに、こんな連中のあるのが可笑しく感ぜられた。杉浦は随分變な人間を友達に持つ男だと思つた。

「杉浦さん、川甚などへ行かんと、橋さんに何處か下町の粹なところを、案内して貰うたらどうぢや。」

「いや、つまらん、つまらん、やつぱり柴又へ行かうよ。今から運動に彼處まで出かけると、

時間の都合もいゝよ。お前の端唄を聞く代りに、橋君がいゝ物を聞かせるさうだ。」

杉浦は山口に限つて、特に「お前」と云ふ代名詞を使つた。

「へーえ、そりや賛成ぢや。わしの端唄は、橋さんの前などぢや逆も出やせんよ。」

「まあ、そりやどうでもいゝがな。——橋君、君先刻の約束を履行するんだぜ。」

と、杉浦は面白さうな、根性の悪さうな眼つきをした。

「約束ツて何を。」

「Der Brief von Odawara.」

かう云つて、杉浦は、ふゝんと鼻の先で軽く笑つた。

やがて三人は、上野から海岸線の汽車に乗つて、金町へ向つた。丁度南千住の停車場へ近づいた頃、山口は小塚原の向うを眺めて、

「杉浦さん、あそこが吉原だぜ。」

と、耳打ちをし乍ら日本堤を指した。

「どれ、何處が。」

「彼處に見えとるがな。彼の土手が日本堤ぢや。あの土手がズウツと續いて、彼處に高い家が澤山見えとるだらう。あれぢや、あれが吉原なんぢや。晩になると、燈がついて、綺麗だぜ。」

山口は綺麗でたまらないやうな聲を出した。

「お前の行く家は何處なんだい。」

「そりや此處から見えん。——何處と云つて、一軒にきまつるとる譯ぢやないが、私や此れから當分中米へ行くと極めた。いゝ華魁が居るぜエ。」

「それで一と晩にいくら懸るんだ。」

「三兩!。」

と、山口は右の手の指を三本、びたりと眉間へ押しつけながら、

「之丈あれば大丈夫ぢや。一兩でも二兩でもやつて行けるが、まあ三兩ぢや。」

杉浦は面白半分、冷かし半分に、妓樓の内幕だの、遊興の形式だの、群しい質問を試みて、山口の経験談を聞いた。吉原ばかりか、品川でも、新宿でも、千住でも、洲崎でも、山口の足を踏み入らない所はなかつた。大概一週間に二度ぐゝの遊ばなければ、とても辛抱し切れないと云つた。惚れられて金を貰がれた話や、夜中に振られて相方を追ひかけ廻した話や、恰も深奥な哲理を語るやうに、委曲を盡して説明した。

「そんなに道樂をして、それでお前は、よく頭を壊さないな。學校の成績だつて、あんまり悪くないぢやないか。」

杉浦はしまひに感心して、こんな事を云つた。

「一向壞さんのぢや。却つて辛抱しとる方が、氣がむしやくしゃしていかんのぢや。女郎買に行つて来た朝などは、頭がカラツとして、私やせいせいするがな。」

「けれども萬一梅毒にでも罹つたら、頭だつて悪くなるだらう。」

「いや、梅毒なんて、ありや何でもないんぢや、あれ程容易く直る病氣はないんぢや。鼻が落ちるなんて、昔の事なんぢや。それにあの病氣は免疫性で、一度罹つたら二度と移らんから、植ゑ癒瘡も同じ事ぢや。」

「何も、さう俄にえらい鼻息にならなくつてもいいよ。——お前も梅毒をやつた事があるのかい。」

「うん、事に依つたら、やつとるかかも知れんのう。どうも時々、腰が痛んでならんから。」

山口は急に眼鏡を曇らせ、陰鬱な顔をして、腰の廻りを平手で撫でた。其れから其れへと、二人の問答は、金町の停車場へ着いて、帝釋天へ行く畑道まで續いた。健全な家庭や寄宿寮の生活で、夢にも聞く事の出来ない、耳馴れぬ卑しい話を、猥りがましい言葉を使ひながら、山口は平氣で喋舌つた。彼の口にかゝると、女と云ふ物は、唯もう醜しい慾望の對象のやうにしか取れなかつた。戀とか、憧れとか、——若い人々の感情を湧き立たせて、心を恍惚の境に運

或は神も
あつた
若くは

ぶ清い貴い楽しみは、此の男の胸に微塵も溜んで居ないらしかつた。若し放蕩の結果が、誰に對しても山口と同じやうな、荒んだ人間を作らせるならば、放蕩程忌まばしい物はない、と宗一は思つた。

あゝ美代子、美代子、……それにつけても美代子はどうして居るであらう。宗一は二人の會話を聞きながら、時々追ひつけられるやうな、切ない、忙しい氣持に襲はれて、重い溜息をついた。山口のやうな人間は論外として、世の中に自分程清い心を以て、戀人を慕ふ男はあるまい。自分程熱烈な愛情を戀人に注ぐ人があるまい。美代子が生涯の夫と頼んで、自分程確な、充分な幸福を與へ得る人は、斷じて外にない。萬一、二人が別れ別れに生きて行くやうな事になつたら、自分にも、美代子にも、永久に不仕合せな月日が纏はるであらう。此のくらゐ明白な利害問題に、世間の親が眼をくれないで、敢て其の子を死地に陥れるやうな、不自然な、不合理な結婚を強ひる理由が何處にあらう。親としては迂闊とも、疎忽とも、不親切とも、云ひやうのない話である。自分ほどのやうな障害を排しても、必ず美代子と結婚しなければならぬ。……

「お前はいつ頃から、女を買ひ始めたんだい。」

と、杉浦は、帝釋天の境内を後へ抜けながら、相變らず問答を繼續して居る。

「私や中學を卒業した年からぢや。——杉浦さんは、まだ一度も覺えがないのかな。」

「うむ。……學校の連中で、女を知つてる奴はあんまりないだらう。」

「橋さん、君はどうぢや。下町の女は綺麗だからのう。」

「僕だつてまだビューアだよ。下町とか、江戸趣味とか云ふと、いかにもみだらな風俗のやうに思ふけれど、純粹の東京人の家庭は、そりや嚴格なものだよ。一般に都會の男や女は、田舎よりズツト行儀がいいやうに思ふ。」

と、宗一は眞面な考へを述べた。

「さうかのう。男でも女でも、ビューアな奴と、ビューアでない奴とは、私や一ト眼見れば大概判る。まあ君方は、ビューアだらうよ。——一遍關係すると、女なんて者は何ともなくなるから不思議ぢや。」

「さうだらうなあ。女と云ふ物を知つて見ると、あゝくらゐ馬鹿らしい物はなささうだからなあ。」

と言ひながら、杉浦はステツキをクル／＼と空を廻して、眼の前に現はれた土手の頂きへ活潑に馳せ登つた。幅廣の中川の水が帯のやうに悠々と流れて、薄や葦の生ひ茂つた汀に、「川甚」と記した白地の旗が、ばたばた鳴つて翫つて居る。川向うの、見渡す限り田圃の打ち續いた葛

飾の野を吹き越えて、強い風が一度に堤へぶつかつて、三人の袴の裾を掠ふやうにする、遙に晴れた東の空には、筑波山が青く鮮かに泛んで居る。

「何處か川縁の座敷は空いて居ないか。」

と、杉浦は先へ立つて川甚の支關へ入つて行つた。度々ボートで中川を溯つて、此の家の川添ひの座敷に一盞傾けるところから、女中はみんな杉浦の顔馴染であつた。

「あゝ私や足疲れた。腰が痛うてどうもならん。」

山口は一間へ通ると、早速大の字に反り返つて、

「時に杉浦さん、今来た女中はちよいと好いがな。私やあゝ云ふ、ほちやほちや太つた女が太好きでエ。」

と、横着さうに頼めたを聲へ押しつけた。

一と風呂浴びて、三人が膳の前へ坐つたのは四時近くであつた。短い日脚がもう暮れかゝつて、夕焼けの光が、川波の尖つた面や、帆掛船の肩先を、斜にあか／＼と照した。豪酒家の杉浦は、肴の來ないうちから、ちびり／＼と杯を乾て、頻りに二人へ進めた。

「橋君、君と飲むのは初めてだ。山口は下戸で話にならないんだから、君一つ、大いに飲んでくれ給へ。」

「ありがたう。僕の親父は酒飲みだから僕も今にきツと強くなるだらう。」

かう云つて、宗一はなみ／＼と注がれた杯の縁を唇にあてた。一年に二度か三度、何かの會合の時より外は、めつたに手にしない杯中の酒の色を、かう云ふ席でしんみりと眺めるのは今日が初めてで、濱町の家とは非常に縁の遠い、怪しからぬ境遇に身を置きながら、親の許さぬ罪を作りつつあるやうな氣持もした。一滴を舌に啣んで、グツト飲み下すと、熱い液體が湯上りの腸へ焼けるやうに滲み通つた。何だか、日本橋迄の、始終親父の飲む酒よりも悪いやうに感ぜられたが、其れにも拘らず、杉浦はうまさうに幾杯となく傾けて居る。

蒲焼、鯉こく、すつぽん煮、——そんな料理が順々に三品程、膳の上へ列べられた。「なんと、杉浦さん、此の鯉には鱗が着いとるがな。」

鯉こくの碗をすゝりながら、山口はこんな事を云つて、女中に笑はれて居る。先から漸く一杯か二杯飲んだらしいのに、顔から頭まで眞赤に染まつて、眼ばかりばち／＼光らせて居る。「お前の顔は酔ふと猥褻になるなあ。そんな顔は土手の馬肉屋へでも行かなければ、あんまり轉がつて居ないぜ。」

杉浦がかう云つたので、一座はどつと吹き出した。見た事もない光景を好い加減に想像して、時々圓星を刺すやうな知つたか振りの警句を吐くのが、杉浦の得意とする所であつた。

杉浦がかう云つたので、一座はどつと吹き出した。見た事もない光景を好い加減に想像して、時々圓星を刺すやうな知つたか振りの警句を吐くのが、杉浦の得意とする所であつた。

いつしか日はとつぷり暮れた。暗い川面の方には、びちやり、びちやりと船の横腹を叩く波の音が聞えて、ぎい、ぎい、と鳴る櫓聲と共に、闇を行き交ふ軸の灯が、徐にする／＼と滑つて通る。宗一は久しぶりの酔心地にうつとりとなつて、縁側の敷居に足を投げたまゝ、戸外の景色を凝視した。成らう事なら二人の前に自分の戀のいきさつを打明けて、一緒に泣いて貰ひたいやうな気分にもなつた。

「かう云ふ晩に月があると猶いゝんだがな……江北江南無限の情だね。」

と、杉浦は杯を片手に、眼を低くして庇の外の空を仰いだ。

「山口、もうそろ／＼歌が出て／＼時分だらう。」

「橘君が何か聞かせると云ふんだらうがな。」

「まあ、お前からやるさ。お前の歌だけは、全くうまいんだから、僕が保護するよ。」

「さう褒めんでもやるよう。」

山口は琵琶法師のやうに柱へ凭れて眼を閉ぢ、少し仰向き加減に頤を突き出して、えへんと咳拂ひをしたが、

「それぢや立山を一つ。」と、口の中で断つて、「あ、しゃん、しゃん。」と口三味線で唄ひ始めた。

「峰の白雪麓の水、もとは互に隔てゝ居れど……」

歌の文句も、節廻しも、宗一には、此れが山口の咽喉から出るのかと驚かれる位、綿々の恨みを惹いて、美しく、見事に響いた。殊に甲の調子に高まる刹那の、りりんと張つた聲の立派さ。更に細く微な錯聲に轉じて、長く長く顛はせて行く味ひの深さ。態度と云ひ、技巧と云ひ、堂々たる藝人の堂を摩さんばかりで、到底佐々木の詩吟なぞの比ではなかつた。唄ひ終る迄、杉浦も宗一も、頂を垂れ、息を凝らし、あたりは水を打つたやうに静かであつた。

「ちよいと、唯今はどうも有難うございました。誰方だかほんとにお上手で居らつしやいます事ね。彼方へも好く聞えるんでございますよ。」

かう云つて、例のぼちや／＼太つた女中が座敷へ駆け込んで來た。

「さうら／＼、どうだ山口、いつその事みんな出しちまつたら。」

「よし、私やかうなると、幾許でもやる。」

山口は又眼をつぶつて、自分の調子に聞き惚れるやうに、額を上げ、首を振りつゝ、今度は二上り新内を唄つた。「隅田のほとりに住居して……」と、先づ最初から、魂をそゝるやうな美音を轉がすと、しんとした夜の河上に餘韻が傳はつて、遠い野末に住む人まで、耳を傾げるかと訝しまれた。古い端唄の「わしが國さ」忍ぶ羅路「秋の代」など、後から後からと、山口は聲を絞つて唄ひつゞけた。

「ほんとにねえ、あなた書生さんのやうぢやありませんねえ。」

と、女中は幾度も感嘆した。

三人とも、少し寒さを覚える程に昂奮して、一座は何となく白けて了つた。杯の酒も冷たくなつて居た。

「おい、酒だ酒だ、熱いのを持つて来い。」と、杉浦は徳利を高く翳した。

「時に杉浦さんの義太夫はどうぢや。此の頃ちつとは進歩したとらうがなあ。」

と、山口は藝事にかけては師匠であると云ふやうな、面つきをした。

「ちつとは何だ。怪しからん。」

杉浦は直ぐと負ない氣になつて肩を聳やかし、上半身を妙に拮くらせて奇態なしなを作りながら、

「其の涙が蜷川へ流れたら……………」

と、炬燵のさわりを語り出した。薩摩琵琶とも浄瑠璃ともつかない、齒の浮くやうな節廻しに、東北辯の訛が交つて、時々切なさうなきいきい聲を發したが、

「よう——ふん、ふん、なか／＼うまいで。」

と、山口が仔細らしく手を拱いて感服して見せるので、常人はさも嬉しさうに相合を崩して

語り通した。宗一は笑ふまいとしても、なかしさが込み上げて来て、吹き出さずには居られなかつた。女中も袂を口へあて、轉げながら逃げて行つた。

「どうしたんぢや杉浦さん、えらいうまくなつとるがな。」

と、山口は呆れたやうに眼を圓くして、馬鹿々々しく大げさな驚きの思ひ入りをしながら、
「……………其の涙がア、チン、蜷川へエ、ながアれれエたアア、らア、小げるウ、……………彼處邊はうまいもへゼエ いや、もう昇之助そつくりぢやがな。」

「おい、おい今度は橋の番だぜ。女中も居ないし、丁度いゝから、先刻の約束を履行するんだ、——まあ、改めて一杯やり給へ。」

杉浦は獨りて一升近くの酒を呷つて、非道く酔倒して居るらしかつた。

それでも呂律の亂れたり、體のよろけたりするやうな醜態を演ぜず、泰然自若として杯を宗一にさした。

「君、君、僕は決して人の祕密を口外するやうな人間ぢやないぜ。山口だつて、随分油断のない男だが、お喋舌りの方だけは大丈夫だよ。僕が請合ふよ。話し給へ、話し給へ。」

「何か知らんが、そんなに隠さんと、橋さん話したらどうぢや。君のやうな男は、女子に惚れられるに極まツとるんぢや。今に道樂でもして見給へ、其りや必ず持てるぜエ。」

「さう 煽てなくつてもいゝさ。」と、宗一は苦笑して云つた。
 「いや別に煽てやせんがな。君なんぞ、きつと純潔な心で女子を慕うて居るんだらうが、私に
 だつて、其の氣持は解つとるよ。」

宗一は二人の追求をすげなく拒絶する氣にはなれなかつた。山口のやうなさまじくの女を知
 り悉した人間に、自分の戀を説明して、何か其れに關する意見を叩いて見たくもあつた。山口
 が實驗の上から齎した女性に、する解釋も、一應參考にする價値はあらうと思つた。

「そんなら話をしよう。」

かう云つて、彼は何か込み入つた用件を談する事務家のやうな口吻で、一分始終を丁寧に語
 つて聞かせた。

「……それで、僕にはどうも女の心持が呑み込めないで困るんだよ。さう云ふと可笑しい
 が、本當に僕を戀ひ慕つて居るものなら、何の積りで今日のやうな手紙を寄越すんだらう。自
 分の戀を犠牲にしても親の命令に服従すると云ふやうな柔順な考へなのか、それとも、實際僕
 を戀して居ないで、今迄好い加減に醜弄して居たのが、つくづく判断に苦しむよ。女と云ふ物
 は、男とは全然違つた心理作用を持つて居るんぢやないかと思ふ。」

宗一は話の結末に、こんな疑問を附け加へて、

「兎に角・僕はもう一度會つて見たいんだ。會ひさへすれば、本人の心もよく解るし、ほんと
 うに僕と結婚したい了見なら、親父に頼んで見ようとも考へてゐるんだ。しかし、向うで手紙
 を寄越すな、面會には來てくれるな、と云ふんだから仕様がな。戀はして居ても、結婚は出
 來ないと云ふやうな戀ならば嘘だと云ふよ。」

「そりや、さうに違ひないな。……けれども女の頭と云ふ物は、案外徹底しないもんだから、
 戀と結婚とを別々に考へて、一向矛盾を感じないんだらうよ。好きな男と添ひ遂げられず、親
 の取り極めた婿を貰つて、憂い目辛い目をしながら、陸でめそ／＼失戀の悲しみに泣くやうな
 境遇を、却つて深刻だと思つてる女が澤山あるよ。それも一生泣き通すな、いゝが、大概結婚
 すると昔の事を忘れたつて、直に現在の亭主や子供が可愛くなるんだからなあ。」

かう云つた杉浦の言葉は、如何にもまかせて居て、世馴れない青書生の迷懐のやうではなかつ
 た。宗一は美代子に限つて、「結婚すると昔の事を忘れちまふ」やうな、輕薄な女でない、腹
 の中で辯解した。

「樞さん、何とかして小田原へ行つて、其の人に會へんものかな。」
 と、山口が口を開いた。

「訪れて行つたら、まさか會はない事はないだらうよ。唯あゝ云ふ手紙が來て居る位だから、

會つたところで、充分話をする機會はなからうと思ふ。それに女の方で来るなと云ふのに、此方から出かけて行くのも意氣地がないか。れ。」

「いや、構はんから、君小田原へ行き給へ。場合に依つたら、非常手段を取つて、墮落をするんぢや。」

「そんな事も考へて見たが、とても實行する勇氣はないよ。第一、女が承知しないだらう。」

「いや、する、する。承知するに極まつとる。承知しないやうなら、君に惚れて居らんぢや。——ツルゲネーフのルザンと同じことぢや。」

「山口がルザンを知つてるのは、ちよいとをかしいぜ。」

杉浦はこんな時でも、冷笑の種を見逃さなかつた。

「墮落をせんでも、半日ばかり何處かへ誘ひ出して、其の女と關係を附けて了んぢや。其れが一番早道ぢや。さうなつたら、女と云ふものは、決して男を忘れやせんがな。」

「そんな事は僕は絶対に嫌だよ。」

と、宗一は少し不快な調子で答へた。

「嫌ぢやと云ふなら、止むを得んけれど、其れが一番早道だぜ。會ひに来てくれるなとか、手紙を寄越すなとか云ふのは、つまり未だ關係が附いて居らんからなんぢや。關係が附いて了

へば、女子はもうおしまひぢや。何でも男の云ふ事を聽くんぢや。」

「馬鹿を云へ。何でも云ふ事を聽くつて、相當の家の娘を捉へて、そんな事が出来るか出来な

いか考へて見る。」

杉浦が横合から、荒々しい聲で憤慨して云つた。

「そりや君の方が解つとらんぢや。」

山口は罵られてカッとした構に、杉浦の方へ向き直つて、眞赤になつて喰つてかゝつた。

「……………相當の家の娘にしたところが、惚てる男から持ち込まれれば、肌を許すに極まつとるんぢや。寧ろ許す方が道徳上當然なんぢや。若しも許さんやうな女子なら、私や薄情だと思ふ。實際男に惚れて居らんぢや。」

「だからさ、だからさ、まあ僕の云ふ事を聞け。……………」

と、杉浦は激しい見暮で、山口を制しながら、

「……………そんな事はお前に云はれんたつて解つて居るさ。女と云ふ物は、直に男に誘惑され易いんだから、何もお前が橋をけしかけて、好んで娘をキツ者にするには及ばんぢやないか。」

「いや。いや何も好んでキツ者にさせると云やせんぜ。君は今誘惑と云ふたが、そりや成る程誘惑かも知れん。知れんけれども誘惑した後の結果を見給へ。其の爲めに二人とも望み通り

結婚が出来て、幸福な家庭を作れたらどうぢや。好い加減に弄んで、捨て、了ふとは譯が違ふとるぞ。決してキツ者になんぞなりやせんがな。」

「キツ者にならない事があるもんか。一度關係したら最後、萬一其の男に捨てられやしないかと云ふ不安と弱點とが娘に着き纏はつて、處女としての誇も純潔も失つちまふぢやないか。たとへ一時でも、結婚前に身を汚せばキツ者ぢやないか。此の位娘に取つて可哀さうな事はないぜ、それでも其の男、首尾よく一緒になれ、ばい、が、萬々一なれなかつたらどうするんだ。よくも道理を考へないで、悪い事ばかり人に教へて、それでお前は、積りなのか。」

威丈高になつて、相手を睨みかけながら、杉浦は酒々と反駁した。二人とも肝腎な宗一を其方除けにして、暫く夢中で云ひ争つた。

「君のやうな口の達者な者に、理窟を云うても抗はんが、私の云うた事は、必ず間違つとりやせん。」

結局山口は鋭く云ひ捲くられて、こんな負惜しみを云つて黙つて了つた。

「お前のやうな悪黨は始末に困るよ。」

杉浦はかう云つて、意氣揚々と便所へ立つて行つた。

「ほんとに口の達者な奴ぢや。私や議論をすると、いつでも杉浦が憎うてならん。あの馬鹿者せん。」

めがー」

と、山口は相手の後影を見送りながら、無念の齒噛みをした。

其の晩、川甚を引き上げたのは九時過ぎであつた。山口は一文も持つて居ないので、四圍足らずの勘定を、杉浦と宗一とが分擔した。

五

「橋さんは居らつしやいますか。電話でございます。」

と、寢室のドアを開けて、呼び覚ました小使の聲に、宗一はふと眼を覺した。

「何、電話？」

かう云つて、夜具を捲くつて立たうとしたが、昨夜の川甚の酒が未だ頭に残つて居て、彼はふら／＼と昏倒しさうな懈怠さを覺えた。二日酔の結果、思はず寢過したものと見えて、彼の周囲の布團は残らずきれいに疊まれてあつた。枕許の時計は、もう十時半である。顔も洗はず。寢間着の上へ袴を着けて、彼は惶て、電話口へ飛んで行つた。

「もし、もし、あなた宗ちやん……」

なまめいた女の言葉が、受話器から耳の奥へ傳はつた時、半分寢惚けて居た彼の意識は一瞬

間にハッキリと返え返つた。

「あなた宗ちゃん、……あたし誰だか判つて？」

「うむ、判つた、判つた。」

「あのね、あたし今本郷三丁目の自動電話に居るのよ。今朝早く内證で小田原から出て来たの。……宗ちゃん此の間の手紙御覽になつて、……」

「あゝ」宗一はなつかしい聲音をしみじみと味はふやうに耳を傾けた。此の聲、此の人に自分は幾日憧れたであらう。……普通の頃の女よりは稍落ち着いて、テキパキと明瞭に發音する物の云ひ振りが、電話では殊に著しく感ぜられ、美代子の姿が髣髴と浮んで来るやうであつた。

「それでね、今日中には是非歸らなくツちやならないのだけれど、いゝから、あたし宗ちゃんにお目に懸りたいの、どうにか時間の都合がつかなくツて？」

「そんなら直に行くから、其處邊に待つて居てくれないか。」

「だつて學校があるんでせう。」

「ナニ休んだつて構はないんだ。」——かう云はうとして、彼は電話の傍に腰掛けて居る寮務室の委員の手前を憚り、又一つには、男としての應揚な態度を失ひ過ぎるやうにも思つて、

「いや、別に差し支へない。」

と、答へた。

「さう、濟まないわね。それぢや四つ角で待つて居てよ。」

「うむ、左様なら。」

電話を切ると、彼は楊枝を咬へて、洗面場へ駆けて行つた。

やつぱり美代子は、宗一を戀して居るのであつた。齒を研きながら、口を嗽きながら、彼は天から授かつた幸福な今日の一日を如何にして送らうかと頭を悩ました。此の機を利用して、結婚問題の解決方法を講じなければならぬと云ふ、實際的な考へよりも、先づ第一に二人で手を携へて、喜び合ひ勇み合ふ光景の想像に心を躍らせた。

いつものやうに水風呂に漬かつて寢室へ戻つて來ると、行李の底から、取つて置きの薩摩がすりの綿入に羽織を引き出して、其を纏つた。袴も先日濱町から貰つて來たばかりの、襪の整つた、小倉の大名縮の餘所行きの方に穿き更へた。外戸へ出ると、昨日と同じ上天氣で、心持風が立つて居た。もう二三日の後に近づいて居る冬の時季を想はせるやうな、肌寒い空氣が、うらゝかな日射の裏に潜んで居た。うれしいやうな、悲しいやうな氣を起させる日であつた。

萬事を當人に打つかつてからの成行に任せて、何等の針も考へずに、彼は本郷通りを眞直

ぐにてく／＼歩いた。長らく照りが續いて、鐵板の如く燥いて堅くなつた往來の地面には、小石の粒が鉄を打ち込んだやうに埋まつて、無數に頭を並べて居る。そんな物を宗一は無心に眺めた。殆ど生活の目標を失つて居た昨日の悲觀状態から、急に希望に充ちた光明世界へ浮かび上つた喜ばしさに、半分は精神の爽快を覚えながら、日酔の胸の塞へと、蚌谷の痛みが、全く拭ひ取られないのを、彼は思まほしい事に思つた。尤も其れは僅かの間で、やがて美代子の姿を見たならば、忘れられるに違ひないであらう。

勸工場の前まで來ると、一町ばかり向うから、眼まぐるしい通行人の間を避けて、女はちら／＼と笑顔を覗かせながら、近寄つて來る。

「どうも暫く」

と、丁寧に辭儀をして、宗一の前に立つた時、いろ／＼と苦勞の種を訴へて寄越した程、美代子は打ち萎れても居なかつた。却て頬のあたりは肉が附いて、赤みが、つた、元氣の好まさらうな血色に見えた。あらい大島の龜甲緋の對の着物に、金春織の白茶地に花丸模様の丸帯を締め、銀の平打を挿した高島田の風情は、もう結婚期に迫つて居る處女の資格として、男に對する相應な落着きと分別とを備へて來たやうに感ぜられた。宗一は自分より年嵩になつて了つたやうな、物馴れた女の素振と、きらびやかな服裝に氣壓れて、軽い嫉妬を覚えながら、

「好く來られたね。——ま、其處いらまで一緒に行かう。」
と、云つた。

「今日はあたしやつとの事で出て來たの、手紙に書いた通り、此の頃は内がやかましくつて仕様が無いの。それに此の間の宗ちやんの手紙ね、あれがおッ母さんに知れつちまつて、お前は宗ちやんと何か約束でもしたんだらう、なんて云はれて、散々叱られたもんだから、あたしもうやけになつて了つたの。一昨日宗ちやんに返辭を上げた時なんか、何が何だか頭が滅茶苦茶で自分なんぞどうなつてもいゝと思つて居たのよ。」

美代子は、こんな事をすらくと流暢に喋舌つた。

「やけになつたから、誰と結婚しようが構はないと云ふのかい。」

かう云ふ意味の反問をしようとしたが、適當な、圓滑な言ひ廻しが出來ないので、宗一は遠慮して了つた。いくらひいき目に考へても、自分に遠慮と云ふ氣分を作らせるだけ、女は人形町時代から見ると、多少態度が異なつてゐた。

會はないよりは、手紙の文言から推量して女の身の上を憐れんでゐたのに、今は自分が憐れまれるやうな境遇に轉じた。女はどん／＼思ひのまゝを喋舌つて行かうとするのに、男にはどうしてもそれが出來ない。何とかして今日一日の間に、此の不自然な關係を打ち破つて、昔の

SP1

通りの親しみ易い問柄に復らなければならなかった。

「かうやって、歩きながら話をして居ても仕様がな……」

湯島五丁目の停留場のところで、宗一はふと立ち止つて、

「何時頃に歸ればいゝの。」

と、優しく訊いた。

「八時ごろまでの積りで出て来たんだけど、日一杯に歸ればいゝわ。」

かう云つて、美代子は今日の外出の口實を話した、幼い折の乳母が東京から尋ねて来て一泊したのを幸ひに、新橋まで送りがてら、ちよいと出て来たのだと云つた。其れも父の不在を附け込んで、半ばは喧嘩腰で母に泣き着き、

「お歸りには私がステーション迄見送り申しますから、大丈夫でございますよ。」

と、乳母に助言して貰つて、漸く許されたのださうである。

「お父さんには内証だから、濱町へ寄るんぢやありませんよ。」

と、出しなに母からダメを押された事まで、附け加へて語つた。

「そんなら。少しはゆつくり出来るんだね。」

宗一は一二臺の電車をやり過ごしながら、

「……上野の方へでも行つて見ないか。」

「え、け、宗ちゃんのお友達に見付かりはしなくツて？」

「大丈夫だよ。内の者にさへ知れなければいゝぢやないか。」

「だつて、學校の方に見付カツちや嫌だわ——何かあたしの事を、お友達にでもお話しなすつたの。」

美代子は臆病な眼つきをして、聞き咎めるやうに云つた。

「大丈夫だよ。」

宗一は同じ文句を繰返した。戀人に對しては、絶対に正直を守つて、微塵の祕密をも藏しまいとした心の誓が、もう破れて了つた。

「さう、そんならいゝけれど、度々手紙なんか上げたから、若しか知れやしないかと思つて、随分心配しちやつたわ。ほんとに黙つて居て頂戴ね。みだらな真以をするやうに思はれると、嫌だから。」

かう云つた最後の一句は、恥かしさうな、消え入るやうに微な聲であつた。

何處かへ行つて休むにしても、平生友達と一緒に出かける「藪そば」や牛肉屋では、女が可哀さうである。立派な令嬢、立派な學生と云ふ體面を保つに適當な、品のいゝ料理屋の靜かな

座敷を擇びたかつた。家柄の正しい新婚の夫婦が、兄妹と間違へられても、素情の悪い野合の男女のやうには見られたくない。彼の暮口の中には、寄宿舎の賄へ支拂ふ可き十一月分の食料と、それから半月ばかりの小遣ひと、合せて十二三圓の金が、此の間母親から受け取つたまゝ手着がすに入れてあつた。両親に隠して一時其れを融通しても、彼は女に肩身の狭い思ひをさせたくなかつた。

「此れをみんな遣つて了つても、何とかしたら又内から貰へるであらう。」——こんな目算が、彼の胸の奥に潜んで居た。苟くも金銭問題に關して、今迄毛程の疚しい行爲すら許さなかつた自分の良心が、女の爲めに譯なく鈍つて了ふのを、宗一は我ながら驚かれたのである。

「もう直きお午だがお腹が減つて居やしないか。」

「いゝえ、ちつとも。——もう少し歩いたつて構はないわ。」

「しかし、どうせ何處かで飯を喰へなきやならないんだから……。」

かう云ひながらも、宗一は美代子に釣り込まれて、又そろ／＼と歩き出した。

平生父が宴會の歸りに、土産に持つて来る料理の折の焼印を想ひ浮べて、百尺、岡田、福井などゝ、彼は順々に考へて見た。藝者を呼ぶではなし、酒を飲むではなし、懐の金だけあれば充分であらう。土曜日曜ならば格別、木曜日の、而も時間が晝間の事ゆゑ、下町の茶屋へ入つ

た所で、顔が會ふやうな恐れもあるまい。どうせ行くなら、父が昔放蕩を盡した柳橋の土地、なつかしい江戸の空氣の残つて居る柳橋の、大川添ひの料理屋の離れ座敷が慕はしかつた。

「兎も角も兩國まで。」と云つて、松住町から電車へ乗らうとする時、

「宗ちゃん、あなたは其方からお乗んなさいな。」

と、美代子はわざ／＼と彼と別々に、運轉手の臺の方から中へ入つて、五六人を隔てた席へ、澄まし込んで腰をかけたきり、成る可く言葉を交さないやうに側方を眺めて、たま／＼男の方から眼で笑つても、心付かない風を装つた。其の様子が、

「人ごみの中で、少しはあなたもお嗜みなさい。」

と、男を叱りつけるやうにしか取れなかつた。

「罪人ではあるまいし、何でそんなにヒク／＼する必要があるんだらう。」

と、宗一は思つた。

淺草橋で下りた二人は、暫く途方に暮れて手んだまゝ、顔を見合はせた。

「何だか此方へ來ると、濱町へ知れるやうな氣がしてならない。」

美代子は往來を見るのが恐さに下を向いた。

「いつそ柳光亭へ行つて見ないか。なまじな所よりも、却つて居心がいゝだらう。」

「さうね、あたし、何だかきまりが悪い。
きまりの悪いのは宗一も同じであつたが、強て女を勵まして、下平右衛門町の柳の植はつた
川岸通りを、柳橋の方へ歩いた。」

天氣がいつの間にか曇り始めて、淡い、煙のやうな雲が、青空を掩ひかつかつ居た。其れに
も拘はらず、大川の水の色は飽くまでも濃く、川蒸氣の白波が、殊更鮮かに眼立つて居る。阿
娜つばい、姿をした湯歸りの藝者が、二三人擦れ違ひさま、美代子の顔をふり返つて行つた。

柳光亭の門口には、きれいな俵が四五臺並んで居た。今しがた水を打つたばかりの、漆塗の
やうに輝く玄關のたゞきを見ると、宗一は再び氣後れがして、「書生の癖に生意氣な。」と女中に
蔑まれさうに弱々しい心になつた。二人はひろくとした玄關の前に立つて、案内を乞ふた
が、誰も相手にしてくれないのか、容易に奥から人の出て来るけはひはなかつた。いつそ此處
から引き返して了はうかと思つた位、宗一は極りの悪い、落着きのない氣持に襲はれた。

「お客様ですよ。誰か居ないのかい。」

暫くしてから、キビ／＼した女の聲が聞えると、女中が一人ばた／＼と駈けて来て二人の前
へ中腰に蹲踞んで、垂直に垂れた指の先を、ちよいと疊へ擦り着けながら、

「お二人さんでございますか。」

と、無愛想な顔をした。

玄關を上つて、左へ左へといくつも折れ曲つた細い廊下の盡きたところで、女中が襖を開く
と、其處は眺へ向きの大川添ひの小座敷であつた。青い青い、たつぷりとした水面が、窓より
高く漫々と膨れ上つて居るのを見ると、二人共窮屈な胸のこたばりがサツパリして、少し興奮
したやうな嬉しさを覺えた。

「お風呂が沸いて居りますが、お召しになつては如何でございますか。」

女中が茶を出しながら訊いた

「いや、僕はいい。」

「あたしも澤山よ。」

美代子は半分宗一の方を向いて答へた。

「左様でございますか、丁度空いて居りますから、お二人さんでお召しになりましたら……。」
かう云つて、女中は其の時始めて笑つた。

宗一は、いつか知らず鷹揚な、大膽な心になつて、水に近い柱へ凭れながら、片手を窓の闔
に伸ばして、どつしりとあぐらを掻いた。もう斯うなれば、女の爲めに不正の金を遣はうと、
兩親を欺かうと、其れに換難い歡樂の蜜をすゝる事を辭さなかつた。こんな時に女が駈落をし

とうと云ひ出せば、彼は決して否みはしまい。地位も名譽も捨て、どんな野の末へでも、逃げて行くであらう。

「お誂へ」を極めて、女中が退つて了ふと、美代子は手持無沙汰のやうに行儀よく布團の上へ畏まつたまゝ、黙つて居た。お互に面と向ふのが具合が悪く、川の景色を眺めるより外仕様がなかつた。宗一は、何か話をしなければならぬ場合に迫りながら、まだ本問題に入るのは早いと考へた。さうして、

「一體二人は何に見えるだらうな。」

と、さも打ち解けた、空々しい聲で云つた。

「さうね、……きつとをかしな者に見られて居るんだわ。お二人さんでお風呂をお召しになりましたらなんて、好くあんな事が云へるもんだわれ。」

「それでも未だ此處いらは好い方だよ。僕の友達なんか女と一緒に森ヶ崎の鑛泉へ云つたら、頼みもしないのに眞ッ晝間夜具布團を出されて、閉口したさうだ。」

「其の女つて云ふのは、女學生なの。」

「うん。」

「宗ちやんのお友達には、そんな方が澤山あつて。」

「澤山と云ふ程でもないさ。やつぱり僕等と同じやうな境遇になれば、仕方がないぢやないか。別段悪い事をするんぢやあるまいし……」

宗一は自分と美代子とを慰めるやうに云つた。

剃身の芥あひに、猪古と割箸を載せた平たい膳が二人の前へ据ゑられた。女中が盃洗だのお銚子だのを運び込んで来るのを見ると、宗一は何となく、酒の爲めに此の場合の神聖を汚されるやうに感じた。徹頭徹尾、今日の對談は眞面目で通したい。少しも不純な無禮な態度を以て女を遇すまい。彼はさう云ふ考へから、絶対に酔を買はない覺悟であつた。それでも、

「まああなた、お一ついかゞでございます。」

と、女中に進められて、斷りを云ふのが面倒臭さに、

「あんまり飲めないんだから、此れぎりにして、後はサイダでも貰はうかな。」

と、彼は最初の一杯を清く受けた。

「お天氣が大分怪しくなつて参りましたね。今日はお酉様ですのに、降らなければ宜しうございますか。」

女中はお酌をすると暫く其處へ据わつて、美代子の服裝を睨に視ながら話しかけた。

「あゝ今日はお酉様か、もう直き正月だな。」

「ほんとに嫌でございますねえ、年ばかりどん／＼立ってしましまして……。」

未だ十二時頃であるのに、外戸は夕暮のやうに暗くなつて、向ふ河岸の百本杭のあたりに、蒼白い霧が籠つて居た。兩國橋の電車の響きが水の上を傳はつて、始終轟々と呟くやうに聞える。空には、低い鼠地の雲が一面に蔓つて、今にもほつり、ぼつりと來さうである。時々冷い風がこつそり袂の裏へ吹き込んで、不意に肌をぞウツとさせる。

平生寄宿舎のまづい賄を喰ひ馴れた宗一には、久し振でかう云ふ家の料理を味はふのが一つの喜びであつた。彼は寒さと興奮とに顫へた手先で、お椀の蓋を取つて、松茸の薫の漂ふ暖かい露を吸ひながら、柔かい蝦の糝薯と、軽い鱈の肉を舌へ含んだ。それから、口取の蒲鉾に添へられた針魚の雲丹焼だの鳴のたゞきだのを、珍しさうに突ツついて、

「美代ちゃん、君は白いお刺身が好きだツたぢやないか。」

と、刺身の皿へ眼をつけて云つた。

「え、あたし後で、御飯の時に頂くわ。」

「さうだね、も、そろ／＼御飯にして貰はうか。」

かう云つて、宗一は立つて行かうとする女中の後から、

「直でなくても好いんだから、呼んだら持つて来てくれ給へ。」

と附け加へた。

再び、さし向ひになつた二人の座敷に沈黙が來た。お互に此れから語り出すべき事件を持つた儘、其れを控へて唇を嚙むた。

「美代ちゃん……此間の君の手紙ね。」

と、男の方から口を切つたのは、稍暫くした後である。

「え。」

と云つて、美代子は體が凝結したやうに堅くなつた。両手で握り緊めた膝の上のハンケチに眼を落しつゝ、肩を崩して、一遍忍びやかにスウツと溜息をしたのが餘所目にも著しかった。男は「可愛い指の格好だな」と、葎の汁に滲みたるやうな女の細い手先に見惚れて、指輪の彫の模様を判じるともなく眺めながら、

「あれで見ると、君はお父さんの言ひ附け通になる積りかい。決して僕は、どうのかうのと云ふ譯ぢやないんだから、正直な考へを、遠慮なく云つてくれないか。僕は唯、君の本當の考へさへ解れば、其れで満足するんだから。」

「あたし、あの手紙の事で、是非宗ちゃんにお目に懸りたいと思つて、今日やつて來たの。實は一昨日内であんまりやかましい事を云はれたもんだから、あたしやけになつちまつて、あん

な事を書いたんだけど、後で宗ちやんが怒つて居らッしやるだらうと思つて、氣になつて氣になつて、仕様がなかつたのよ。だから、是非お目に懸つて、譯を話して詫らなければならぬと思つて居たの。ほんとに濟まなかつたわれ。あたし、つくづく自分を馬鹿だと思つてよ。」

いざ喋舌り出すと、女は又雄辯であつた。宗一は敏捷な言ひ廻しに眩惑されないうやうに、要所々々を心を留めて聞き終つた後、

「そんな事は、怒るも怒らないもないよ。……………口に出すのは初めてだが、僕は美代ちやんを懸して居る。……………」

かう云つて、自分の唇が洩らした大膽な言葉に、自ら戦きながら語り續けた。

「そりや美代ちやんだつて、氣が付いて居るだらう——僕は出来る事なら、君と結婚をしたと思ふ。君の内でも、僕の内でも承知してくれなかつたら、已むを得ないけれど、若し兩方の親が許したら……………僕の所へ来るなり、他へ嫁に行くなり、美代ちやんに選擇の自由が與へられたら、君は僕と結婚をしてくれまいか。」

「宗ちやん、そりや本當のこと？」

美代子は、低い、熱心の籠つた聲で、力強く念を押した。

「うむ、……………」

「あたしのやうな者を、そんなに思つて下さるのは勿體ないけれど、宗ちやんなんか、いくらでも立派なお嫁さん貰へるぢやありませんか。……………宗ちやんはまだ、内の事情を詳しく御存知ないんでせう。あたしはほんとに不仕合せな人間なのよ。此の間から、いつそ死んで了はうかと思つた事が度々あるの。先達手紙に書いて上げた結婚の話なんぞ、あたしは嫌で嫌で仕様がなただけれど、此の頃は毎日のやうに責られるの。」

ぼたり、と、女の手の甲へ涙が落ちたかと思ふと、續いて二三滴、ばらばらと膝へこぼれた。

「君が一緒になつてくれる氣さへあれば、そんな嫌な所へ行かないでも、どうにかなる話ぢやないか。美代ちやんさへ承知なら、僕は明日にも親父に頼んで、小田原の方へ至急に相談を持ち込んで見よう。是非とも美代ちやんを、私の方へ下さいつて、折入つて懸望したら、君のお父さんだつて、まさか行かんとは云ふまいと思ふ。僕は今まで親父に向つて、此れッばかりも無理を云つた事はないんだから、一生に一度の願ひだと云つたら、親父だつて、屹度其のくらの事は聞いてくれるに違ひないんだ……………」

「宗ちやんの氣持はよく解つて居ますけれど、母はあたしに養子を貰つて、一緒に分家をする積なんだから、とてもそんな譯には行かないわ。若しも宗ちやんが一人息子でなければ、そりや何とでも考へ様があるけれど……………だから、後生だから、あたしの事はあきらめて下さい。」

其の代り、親が何と云つても、あたしは一生夫を持たずに通して了ふわ。それで宗ちゃんも、可哀さうだと思つて下されば、満足するわ。」

「そんな事が出来るもんぢやない。」

「いゝえ出来ましても、自分の決心さへ堅ければ出来ない筈はないわ。若しが出来なかつたら、死んで了ふわ。」

「けれども、其れではおツ母さんに濟まないぢやないか。おツ母さんは君一人を老先の頼りにして居ればこそ、普通ならば嫁にやるころを、わざわざ養子を貰つて分家させて、一生君に懸らうと云ふ考へなんだらう。美代ちゃんの一身に間違ひがあれば、おツ母さんがどの位失望するか、僕よりも君の方がよく解つて居なければならぬ、え、さうぢやないか。かう云ふと失禮だが、君とおツ母さんが居なかつたら、小田原の内は闇になるんだぜ。」

宗一はかう云つて、相手の返辭を待つたが、美代子は突伏して聞いて居るばかりであつた。

「……若し獨身で通すとか、死ぬとか云ふのが僕に對する義理だてなら、止めてくれ給へ。」

僕は美代ちゃんやおツ母さんの不仕合せを見せられて、決して好い心持はしないから。其れより、立派な人を婿を貰つて、夫婦でおツ母さんに孝行を盡してくた方が、僕に取つてもどんなに嬉しいか知れやしない。——君はさう考へないかい。美代ちゃんが其れを納得してく

れれば、僕だつて立派に思ひ切る。」

最後の言葉を吐くと同時に、男も危く歎歎り上げさうになつて、濕んだ聲が鼻につまつた。

「宗ちゃん、そんならあたし、あなたにお願ひがあるわ。」

美代子は何か決心したらしく、すつかり泣き止んで、ハンケチで面を拭いて、紅く脹れた眼を男の顔に注いだ。

「……いろく勝手な事ばかり云つて、濟みませんけれど、そんなら宛に角、今宗ちゃんの仰つた通りにして下さる譯には行かなくなつて。」

「僕の云つた通りッて、どうするのさ。」

「駄目かも知れませんが、宗ちゃんのお父さんから、小田原の方へ相談をして見て下さるやうに。……母は是非とも分家をさせたいのでせうけれど、宗ちゃんの所へ行くならば、もとく親類の間柄だし、いつでも會ひたい時には會へるんだから、おツ母さんだつて他人に子供を取られるのは氣持が違ふだらうと思ふわ。溜町の叔父さんさへ御承知なら、どうにでもおツ母さんの安心が出来るやうにして上げられるわ。小田原に居るのが嫌なら、東京へ引き取つてもいゝわ。一體あたしに養子を取らうと云ふのは、おツ母さんだけの考へで、お父さんは、あなしが嫁に行かうと、婿を貰はうと、おツ母さん次第にする積りなのよ。だから、おツ母さんさ

へ納得すれば大丈夫なの。」

「そりや成る程、おッ母さんしたら、それでいゝかも知れないが、いゝからと云つて、世の中の事はさう易々と實行出来るもんぢやないよ。兎に角小田原に立派な家があるのを打ッちや、り放しにして、たとへ親類であるにもせよ、娘の嫁入先へ附いて行つて、お母が厄介になれるかなれないか、考へて御覽。よしんばおッ母さんが、さうしたいと云つてもお父さんが承知しまい。君のお父さんは道樂もするし、お妾もあるし、おッ母さんなんぞ、どうなつても構はないと、思つておいでかも知解らない。けれども世間と云ふものがあるから、正妻を娘の嫁入先へ追ひ出すやうな不都合な事は出来ないだらう。さうなれば、僕の親父がいくら同情してくれつつて、人の女房を預かつて返さない譯には行かないぢやないか。」

「だけど其れは、お父さんも承知するやうな方法がいくらでもあるの。宗ちやんの仰しやつた通り、お父さんはおッ母さんに對して、ちつとも愛情なんかありやしないのよ。そりやほんとに非道いのよ、世間體さへ繕へれば、結局出て行つてくれた方がいゝくらゐなの。だから濱町の叔父さんに事情を話して、當分あなたとあたしだけに別家させて頂いて、其處へ暫らく遊びに来て居る形で、おッ母さんと呼んでもよし、未始終はおッ母さんだけ分家して、あたしの子供を養子に直して、濱町の近所へ内を持つても済むと思ふわ。」

美代子の云ふことは、女としては感心な程、なか／＼筋道が立つて、理路の整つたものであつた。女は疾から斯かる目算を胸に疊んで居て、男の了見を確めてから、始めて其れを打ち明けたのか。或はセツばつまつて窮策を案出したのか。いづれにしても宗一は、美代子がこんな綿密な實行方法まで考へて居ようとは思はなかつた。其れ程に自分を慕つて居たのなら、何故早くハッキリ知らせてくれなかつたのだらうと、彼は嬉しさを乗り越して、今更女のエゴイスチックなのが恨めしかつた。

「こんな我儘を云へた義理ぢやありませんけれど、宗ちやんと叔父さんだから、無理と知りつゝお願ひするのよ。あつかましい女だと云はれるのは、覺悟して居るわ。」

「さう云ふ譯なら、出来ないまでも、一應親父に話をして見よう。萬事を打ち明けて相談したら、何かまだいゝ分別があるかも知れない。……其れにしたところで、小田原へ掛け合ひに行くには、四五日間があるだらうし、いざ談判となつてから決定する迄には、随分暇が懸るだらうと思ふ。其の間君は、どんなに養子の方を迫られても、斷り通して居るだらうね。」

「えゝ、そりや解つて居るわ。宗ちやんの話が極るまで、あたし剛情を張り通すわ。……だけれど、今日の事だけは、濱町の叔父さんに黙つて居て頂戴な。あたしが生意氣に入れ智慧をした様で悪いから。」

「しかし。或る程度まで打ち明けなければ話が解らないよ、好い事も悪い事も残らず真相をさらけ出して、親を出し抜いた不都合な點は充分詫つた上で、頼まなければ、此方の誠意が届くまいと思ふ。勿論、美代ちゃんとは結婚したいのは僕自身の希望なんだから、何も君が入れ智恵をしたやうに話す筈はない。」

「ほんとに済みません。今日はあたし、嬉しくつて胸が一杯だわ。」

美代子は氣も心もせいせいしたやうな調子で云つたが、眼には又涙が濡んで来て、

「どうも、有難うございました。」と叮嚀にお辭儀をしながら、そつとハンケチを顔にあてた。

二人は大そう長い同會話を續けて居たやうに感ぜられた、呼鈴を押して飯を運ばせたのは、さし向ひになつてから二時間ばかり後であつた。

「もうお話がお済みでございますか。何卒御ゆつくりなすつて居らっしゃいます。」

かう云つて入つて來ると、女中は立ち上つて電燈を拵つた。座敷の中にはほの暗い夕闇の光と、赤い灯の光とが溶け合つて、庭續きの隣座敷に粹な音締が洩れ始め、向ふ河岸の本所の方から、黄昏の色が次第々々に川面へ這ひかゝつた。

「美代ちゃん、あの三味線は何だか別るかい。」

宗一は飯を喰ひながら、女中を前に置いてこんな事を喋舌り出した。

「え、清元ちゃんなくつて、保名でせう。」

「それぢや、美代ちゃんのお得意だね。——君、此の先生は清元の名人なんだよ。」

と、宗一は女中に目くばせをした。

「おや、左様でございますか、是非伺ひたいもんでございますね。三味線を持つて参りませうか。」

「あら、嘘よ、嘘よ、清元なんか出来やしないは。」

時計を見るとまだ漸く四時頃である。何にしても、二人は一旦此處を引き揚げて、夜を幸ひに街を歩きながら、残る時間を楽しみたかつた。七圓程の勘定書を取り寄せて、

「其れでは、此れで……」

と、宗一は幕口の中から、四つに疊んだ鍍くちやの十圓札を出した

「宗ちゃん、あたし持つて居てよ。」

美代子も慌て、紙入を抜き抜いたが、

「まあ僕が拂つて置く。」

かう云つて、宗一は美代子の手先を押し除けながら、其の手に握つて居る二三枚の五圓札にちらりと眼を着けて、

「へーえ、美代ちゃん大分お金持ちだね、」
と云った。

「え、さうよ。いくらでも奢つて上げてよ。」

「いづれ今日の返禮に、うんと御馳走して貰ふさ。」

結局男が全部を負担して、釣りの中から一圓の祝儀を女中に取らせ、二人はそこへ立ち上つた。長い廊下をばたばたと玄關まで送つて出て、

「御禮宜しう。……どうでお近いうちに是非、ほんとお待ち申しますよきつとでござい
ますよ。」

と、女中は二人の身の上に興味を感じたのか、一と通りのお世辭とは思はれない程、前よりは打つて變つて、親切な、愛嬌の態度で云つた。

晩秋の短い日脚がすっかり暮で、代地河岸の兩側に並ぶきやしやな家作り障子の蔭に、黄燈色の暖かい灯がふつくと包まれて居た。柳橋を渡つた、賑やかな廣小路の往來から藥研堀の方へ、二人は人形町時代のやうに手を取り合つて睡ましく歩いた。酉の市の歸りと見えて、夜目にも著い大きな熊手や羽子板を翳した傳が、何臺も二人の側を掠めて通つた。

「ほんとに旨く行けばいゝわね。もう今度はあたしのおッ母さんより、溜町の叔父さんの方が

心配だわ。叔父さんが承知して下さるといゝけれどなあ。」

「まあ僕に任して置きな。うまくやつて見せるから。」

「何卒お頼み申します。ほんとに此れさへ旨く行けば、あたし宗ちゃんに手を合せて拜むわ。」
「だけど、いよく話が極つたところで、一緒にいる迄には、随分手間が取れるだらうな。學生時代に結婚するか、大學を卒業するまで許嫁で居るか、其處いらは親父の考へ次第だからね。」

「極つてさへ居れば何年でも待つわ。大學を卒業するつたつて、二年、三年……と、もう後五年だわね。五年ぐらゐ、直き立つて了ふわ。」

「五年でも、六年でも、どんな事があらうと必ず大丈夫だと思つて待つて居てくれ給へ、僕も美代ちゃんを信用するからお前も僕を信用しておいでよ。……」

男は知らず識らず、「お前」と云ふやうな言葉を使つて居た。

「……此れからは談判が表向きになるんだから、當分の證で手紙のやり取りなんかしない方がいゝと思ふ。信じ合つて居さへすれば、顔を見なくなつて差支がない。其の代り、ふだんはいくら會はないでもいゝから、萬一お互の體に變事でも起るやうな場合があつたら、電報でも何でも構はずに打つとしよう。」

宗一は嚴肅な調子で諄々と語つたが其の話が耳に入らない位、女は上の空になつて喜んで居

た。
 「あたし、今日の事は一生忘れないわ。あたしも此れから死ぬなんて事は云はないから、宗ちやんも體を大事にして下さいな。」
 二人はかう云つて、堅い握手をした。

六

濱町の橋の家では、追々節季がまつて來たので、掃除やら、洗ひ張りやら、針仕事やら、お品は天氣の續くのを頼みにして、毎日くせつせと働いた居た。雨と云つたら、三の酉の晩に、一としきり激しい土砂降りがあつたばかり、明くる日からは又かたりと冴えて、大道の泥濘も朝のうちに乾き、梅の苔でも綻びさうな、さらさらとした陽氣であつた。

「ほんとは有り難い、——此の鹽梅なら、今年の冬は凌ぎいゝだらう。」

かう云つて、お品は宗兵衛が店へ出かけて了ふと、お午前の間に夫や倅の不斷着の綿入を解いて了つて、お午からは小間使のお兼と一緒に、物干へ出て洗ひ張りに取りかゝつた。

階下には御飯焚きのおゑい、が獨で留守番をしながら、太つた手頭を石鹼だらけにして、勝手口で白足袋の洗濯をして居た。ところへ、格子ががりと開いて、十日ばかり姿を見せなかつ

た宗一もやつて來た。四疊半の支關を上ると、座敷を一通り覗いて廻つて、

「おッ母さんは。」

と、おえいに聲をかけた。

物干に居らつしやいます。」

「まうま。」

と云つて、彼は臺所に接した女中部屋の梯子段を登つて、物干へ出た。

母は張板と張板の間へ挟まつて、西日を脊中に浴びながら、顔りにべつとりと濡れた布を板の上へ押し伸ばして居たが、ちよいと宗一を振り返つて、

「おや、今日は半どんかね。」

「いゝえ——もう直き試験で忙しくなるので、當分來られないかも知れませんが、今のうちに汚れ物を持つて來ました。」

「それぢや今日は泊らないのかい。」

「ナニ泊つても明日の朝早く歸ればいゝんです、——それに、少しお父さんにお話ししたい事がありますから、執方しても泊りませう。」

「さうかい。……今何時頃だね。」

母は、半分仕事の方に氣を取られて居た。

「二時過ぎてせう。」

かう云ひながら、宗一は、見覚えのある自分の着物の布が、順々に張られて行くのを眺めて居た。板の上に働いて居る母親の手先には、鮮かな光線がくつきりと落ちて、糊だらけの十本の指は、色こそ白けれ、傷々しく節くれ立ち、ばつくりと肉の裂けた傷口に黒い線が入つて、爪などはみんな短く擦り切れて居た。戀は神聖だとか、生活の基礎だとか、單に口の先ばかりでなく、腹の底から考へを据ゑて居た宗一も、此の手が暗示する堅實な方ある生命ライフに對しては、比較にならぬ位、浮薄な輕佻な事のやうに感ぜられた。

彼は暫く物干の手すりに倚つて、青空の下に遠く連なる街々の藁を望んだ。其處からは久松町の明治座の屋根だの、深川のセメント會社の煙突などがよく見えて、子供の折から彼の瞳孔に泌みついて居た、此の物干から濱町界隈を俯瞰する時程、自分の幼い顔を想ひ出すことはなかつた。

「あの時分から見ると、母、随分年を取つたものだなあ。」

と、宗一は思つた。

一方の手すりの外には、臺所の屋根がだら／＼と下つて居て、半分硝子障子の開いて居る引

窓の下に、流し元のおふいの頭が見えて居た。彼は物干用の冷飯草履を穿いたまゝ、屋根の上へ下りて、みしみしとたん葺を踏みつけながら、一二間離れた二階座敷の自分の書齋のとこ、るまで傳はつて行き、襪履體操をするやうに、身を躍らせて高い窓から部屋の中へ飛び込んだ。さうして、庭に面した縁側の方へ頭を向けて、大の字に寝そべつて了つた。

近所に話相手の友達はなし、内の者は働いて居るし、夕方父の歸る迄は、別段しよさいがないので、彼はかうやつて居るより仕様がなかつた。どう云ふ風に談判を切り出さうか、母の居る時にしようか居ない時を窺はうか、打ち明けるにしても、悉く白状しようか、或る程度まで保留して置かうか、殊に賄の一件などは、どうしたら好いであらう。こんな考へが、頻りに彼の頭を往來したが、結局父の顔色を見てからでなければ縁め極まかつても何にもならないとあきらめて、ぼんやりと天井を睨んで居た。

宗一が寄宿寮へ入つて以來、誰も此部屋に住む者がなくなつて、なつかしい書齋の舊態は大方面影を失ひ、六疊の一間は物置きモノ置きの如く種々雑多な品物で埋まつて居た。父が此間關西へ旅行した時の鞆が二つ三つ、旅館のレツテルを貼つたまゝ、壁の片隅へよりかゝつて、其の横には、両親の居間に敷いてあつた由多加織の敷物だの、茶の間にあつた熊の皮の蒲團など、丸太のやうにぐるぐると巻いて重ねてある。昔學校の制服や帽子を掛けた折れ釘には、新聞紙にく

るんだ鮭の鹽引が吊る下り、昨夜の雨に濡れたらしい蛇の目の傘が、座敷の中央に横がつて居る。正月、支關のとツつきに立てる二枚折の、萬歳の繪を畫いた屏風が、寢の奥から引き出されて、柱へ凭せかけてある傍に、夜具蒲團の綿が堆く積まれて、宗一が古馴染の本箱や机はみんな後へ隠されてあつた。彼は何となく其の本箱が戀しさに、綿の上へ腹這ひになつて、窮屈な、狭いところへ首を突込みながら、硝子戸の中に一杯につまつて居る書籍の數々を抜いて見た。中學時代に愛讀した櫻牛全集、一葉全集など、手に取るまゝに好い加減なページを開いて眼を落すと、つい面白さに次から次へと何枚も引き擦られて行き、平家雜感とたけくらべとを、日の暮る迄に讀み終つて了つた。あたりが薄暗くなつたので、氣が付いて見ると、もう母もお兼も物干には居なかつた。夕餉の支度をするらしい臺所から、秋刀魚を焼く匂がぶんと鼻を襲つて、ちやらちやらと皿や茶碗を揃へる音が聲えて居た。

程なく「お歸り」と云ふ聲がして、宗兵衛が戻つて來た様子である。八疊の居間へ通ると衣類を着換へて風呂加減を訊き、早速湯殿へ行つて十分許りで上がつて仕舞ひ、相撲取のやうに肥満した、眞赤にゆだつた體へ、腰巻一つ巻いて、飯の知らせを待つ間茶の間で夕刊を讀むのが例になつてゐる。其の刻限を見計らつて、宗一は目立たぬやうに書齋を下りたが、階下では既に電氣がかんかん燈つて居て、母は長火鉢の猫板に頬杖を衝き、小皿に滴らした八盃の汁を舐

めて見ながら、

「お前、何かお父さんに話があると云つたぢやないか。」
と、宗一に云つた。

「えゝ。」

「話があるなら、もう直御飯だから、今のうちがいゝよ。——茶の間に居ろつしやるから。」
母は何か、ちよいと一言話せば濟む物のやうに考へて居るらしかつた。けれども、今を除いては、親父一人の折を促へる機會がないやうに思はれて、

「さうですか。」

と云つて、彼は縁側傳ひに茶の間へ行つた。

「お父ツさん、今日は。」

かう云ひながら、潜り戸を開けて、彼はいつになく改まつてお辭儀をした。

「うむ、——試験はいつから始まるんだ」

父は依然新聞の方へ眼を着けたまゝ、氣輕に尋れた。

「十二月の十五日ごろからです。」

「體は相變らず丈夫か。」

何々事々

「ええ。」
「試験でも済んだら、また沼津へでも行つたらどうだ。……今度は温泉もいっだらう。此の間、阪へ行つた歸りに修善寺へ廻つたが、彼方は暖かだなあ。」

「はあ。」

又旅行の話になつたら、果てしがないので、宗一は氣のない返辭をした。

「尤も正月の事だから、東京に居るも好いし、まあお前の好きにするさ。休みはいつまであるんだ。」

「正月の十日時分まで、す。……お父さん、今日は……」

と云ひつゝ、彼は唾吐を呑んで、疊へ兩手をついた。

「……少し、私に取つて重大な話があつて、参りました。」

「なんだ。」

かう云つて、父は、側に疊んで置いてあつた浴衣とどてらの重ね着の襟を揃むで立ち上がり、湯氣の乾いた素肌の肩へふわつと纏つて、兩腕を袂へ通すと、縮緬の兵兒帯を手早く締め、再び坐る拍子に右の手で煙草盆を膝近く引き寄せた。

「私はお父さんにいろ／＼御託をしなければならぬ事と、お願ひをしなければならぬ事が

あるんです。實は私は、お父さんにもお母さんにも内証で、美代ちゃんも結婚の約束をしてしました。今迄餘計な御心配をかけては濟まないと思つて、隠して居りましたが、今日はお叱りを受けるのは覺悟の上で、何も彼もお話する決心で参りました。」

此れだけ喋舌るのが、宗一には容易な業ではなかつた。すら／＼と續けて行かうにも、自分の舌が言葉の重味に堪へられないで、苦しい息を吐いたり、文句を割つたりした。話の中途から、父はついそ見た事のない眞顔を作つて、煙管の金口を右の頬にあてがひ、疊の面へ瞳を注いで黙つて聞き耳を立て、居た。屹度商賣上の相談などを持ち掛けられた時、宗兵衛はいつもこんな態度を取るのであらう。相手の言葉が、いかにも明瞭に靜かに聞き取れさうな身構をして居るだけ。其れだけ宗一は一層話づらさを感じた。

「勿論、結婚の約束をしたと云つても、二人の間に何か間違ひを仕出來したと云ふ譯ではないんですから、其れだけは御安心を願ひます。私は唯どうせ將來結婚しなければならぬものなら、美代ちゃんを貰つて頂きたいと思ふんです。さう云ふ考へから、先方の意向を確むめる爲めに、今迄度び／＼内証で手紙のやり取りをしました。また小田原から美代ちゃんを呼び寄せて會つても見ました。親の眼を忍んで、二人で勝手に約束なんかした事に就いては、一言の申譯もありませんけれど、忌まほしい關係のなかつた事だけは、何處までもお父さんに信じて頂

きたいんです。」

「一體いつ頃からそんな事をして居たんだ。」

宗兵衛は、いつものやうに穏かな、打ち解けた聲で云った。

「ことしの夏時分……丁度沼津から歸つて来る時に、一つ汽車で東京へ来た事もありますし、寄宿舍へ入つてからも度々手紙の遣り取りはしました。尤も會つたのは沼津の時と、昨日と、たつた二度ぎりです。」

「昨日？きのふ何處で？」

「美代ちゃんの不意に寄宿舍へ電話を掛けて、至急に會ひたいと云ふもんですから、學校を休んで、二人で柳光亭へ行きました。それも此の間頂いた賄のお金で勘定を拂つたんです、……まことに申譯がありません。」

宗一は顔から火の出るやうな恥しさを忍び、凡ての大それた不都合を一緒くたにして、吐き出して了つた。

「己はお前の云ふ事を疑つて居やしないが、たとへ實際はそんな行ひがないにもせよ、二人で料理屋へ出入りをしたり、内証で文通したりした事がばつとなれば、世間では決してお前の思ふ通りに見てくれないぞ。お前は若い見で、關係さへしなければ、女に傷が着かないと思つ

て居るだらうけれど、世間ではうはべの様子を見ただけて、立派に傷物と極めて了ふんだ。此れからもある事だから、よく心得て居なければいけない。ましてお前はまだ學生の身分ぢやないか、どんなに自分達の意志がシツカリして居る積でも、男女の仲と云ふものは、得て知らず識らずの間に、とんだ間違ひを來たすものなんだ。——お父さんは親の怒目でお前を信用するにしても、世間の人に怪しまれたら、已だつて其れを絶対に否認する證據がない。」

宗一は思つた。昔の人は男女の關係になると、案外疑り深いものである。つまり、今日の青年の抱いて居るやうな、性慾を放れた戀愛の存在を合點する事が出来ないから、惚れたと云へば、直ぐに肉體の方面を考へる。何事に依らず早解りのする父の言葉として、證據がないから否認する譯に行かないとは實際殘念であるが、いくら辯明したところで、到底了解されないに極まつて居る。

解

「仰つたことはよウく隠りました。自分でも決して善い事とは思つて居なかつたのですから、此れから必ず氣を着けます。」

「うん、お前も教育のない人間ではなし、こんな理窟は己よりもよく知つて居る筈だから、解りさへすれば何も云ひたかあない。」

かう云つたざり、父は再び黙つて了つた。肝腎な結婚問題の腰が折れたので、逆戻りに話の

筋を立て直す可く、宗一は又新たな努力をしなければならなかつた。

「それから、さっきお話ししました結婚の事ですが、此れも學生の身分として、まだ其の時機でないことは存じて居ります。美代ちゃんが私の大學を卒業する迄、一人で居られる年頃なら、今から斯う云ふお願ひをする必要はないんですけれど、いづれ小田原の方ではお嫁の話が出るでせうし、何とか此の問題が極らないうちは、私も落ち着いて勉強する事が出来ません。美代ちゃんは、望みがかなはないで、外へ嫁くやうだつたら、死ぬと云つて居ります。私も、若し一緒になれなかつたら……一生結婚しまいと、覺悟をして居ります。かう云ふと何ですが、私は今までお父さんに御無理をお願ひした事はない積です。一生に一度の我が儘と思つて、何卒今度だけ、お聞き届けなすつて下さい、二人が自分勝手にこゝ迄話を進めて了つたに就いて、重々不都合だと仰れば據んどころありませんけれど、私としてはかうするより外、世の中に生きて行く望みがありませんでした。結婚が出来れば、二人は勿論、お父さんやおツ母さんのお爲めにも、決して悪い結果にはならないやうに存じます。」

困つたことだ、と云はんばかりに、父は腕組をしながら煙草を吸つて、考へ込んで居る。湯上りの血色のいゝ顔へ、電燈の明りが照つて、額や鼻柱がつやくと輝いて居る、宗兵衛がまだ若旦那と云はれた時代、毎夜毎夜親父やお母の眼を盗んで、轎場を抜け出した二三十年も前

の自分の姿が、ふと彼の頭に泛んで來た。其の時分は、彼とても淺ましい戀の奴であつた。互に命までもと惚れ合つた経験は、芳町にも柳橋にも二三度あつた。宗一が生れたお蔭で自分の性根が入れ變つた事を忘れず、せめて子供を立派に仕立てようと努めたかひもなく、放蕩の血が其子の胸に傳はつて居て、今になつて自分に反逆を企てようとは。自分が親に心配をかけたやうに、自分も子供に心配をさせられなければならないのか、さう思つて、宗兵衛は胸を痛めた。

「昨日の美代ちゃんの話では、おツ母さんが養子を買つて分家させる積りで居るから、なか／＼此方へは寄越すまいと云ふんです。しかし、あゝの他人へ嫁くのではなし、何とか話のしやうに依つたら、解決の道があるだらう。要するに美代ちゃんのおツ母さんさへ將來安樂に過せる保證が附いたら、纏まらないことはないだらうと思ふんです。勝手な上にも勝手なお願ひですが、御参考までに一應此の事を申し上げて置きます。」

「ま。其の話は二三日待つて貰はう。今度の日曜迄に考へとくから。」

かう云ひながら、父はばた／＼と手を鳴らして、
「おい、己の紙入を持つて來てくれ。」
と、奥へ怒鳴つた。

もう直き御飯だと云つたのに、今迄催促に來ない様子を見ると、母は話の始終を立ち聞して、遠慮して居るらしかった。水屋に續いて瓦燈口を開けて、紙入を持って出て來たのはお兼であつた。帛紗の包みを宗兵衛に渡すと、其の儘何も云はずに引込んで了つた。

「金はいくらばかり足りなくしたんだ。」

「八圓ぐらゐです。」

「それぢや此れを渡して置く。試験が忙しければ、飯でも喰べて今日は學校へ歸るがよい。」包みを解いて、菖蒲皮の紙入の中から取り出した十圓札を、宗兵衛は靜かに宗一の前に置いた。

「はい。」

宗一は謝罪の意味を含んで、畏まつて頭を下げて、札を懐に入れた。此れ程にしてくれる親を捉へて、散々迷惑を掛けなければならぬハメになつたのが、今更辛く悲しく感ぜられた。

七

とう／＼冬がやつて來た。桑寮の自修室にストーブが備へられて、教室には朝のうちだけスチームが通るやうになつた。此の二三日、清水はテニスと西洋人の訪問を止めて、圖書館に立

て籠つてる。野村は共會所通ひを好い加減にして、寮務室の二階に隠れる。ノートの整理をしたり、教科書の不審を質したり、みんな試験の準備に忙殺されて、運動家の中島でさへ、野球の練習が済んで了ふと、いつもは講道館へ出かける時間を、勉強の方に割愛して居る。相變らず香氣なのは杉浦ばかりで、

「僕ぐらゐ勉強の必要を痛切に感じて居て、而も勉強の出來ない人間はないナ。」

こんな事を吹聴しては遊び廻つて居る。

佛法の山口も、

「わしや近いうちに、一遍吉原へ行つて來んと、どうも勉強が出來ん。」

と云つて、毎晩杉浦と一緒に飲み喰ひしてはお喋舌りを戦はす。

「なんと杉浦さん、清水と云ふ男はありや可笑しいゼエ。わしや彼の青白い顔を見ると、いつでも試験を想ひ出すやな。」

「全く試験のやうな面をして居るな。」

「それから君の部屋に大山と云ふ男が居るが、ありや一體どう云ふもんぢや。」

「どう云ふもんだか僕も解らんよ。ゆうべも寢室でコソコソやつてるから、大方試験の準備かと思つたら、豈圖らんや『男女と天才』を讀んで居るんだ。」

「ヒョツとしたら、ありや大した豪傑だぜエ。」

山口は首をかしげて、頻りに大山に感服して居る。

宗一は例の懸案が片附いて了ふまで、とても仕事に手が着きさうもなかつた。晝間から寢室の窓際に机を据ゑて書籍の前に端座しながら、二三頁を進むと、直に頰杖を衝いて側方を向く。どうかすると退屈紛れに友達の本箱から雑誌や小説の古本を抜き出したが、或る時彼はウツカリして清水の日記帳を開いて了つた。

予ハ此ノ度ノ試験ニ必ズ首席ヲ占メザル可カラズ。予ハ實ニ野村ヲ恐ル、彼ハ予ノ如キニナリ、予ハ如何ニシテモ彼ノライバルヲ破ラザルベカラズ。

：ちらりと此だけ讀むと、彼は淺ましい心地がして、其の儘元の所へ突込んで置き、晩になつてから何氣なく清水に尋ねた。

「君はえらい馬力で勉強してゐるぢやないか。今度は野村が敗るかも知れんぜ。」
すると清水は頭を抑へて、快活に笑ひながら、

「いや、どうして、僕なんぞ、そりやあ君及第する自信はあるけれど、成績なんかまあ十番以上ならいゝ積りなんだよ。」

かう云つて、何喰はぬ顔をして居る。

「ところが僕は及第する自信もないぜ。毎日／＼遊んでばかり居て。」
と、傍から中島は口を出した。

「君あ大丈夫だよ。杉浦の所謂智勇兼備なんだもの。」

「さうはいかんぜ。夕方湯へ入つて飯を食ふとガツカリして眠くなつちまふ。」

「しかし、運動家は精力が續くからいゝれ。」

と、宗一は頑健な中島の體格を眺めて云つた。

「それはさうと橋君、此の頃はさつぱり小田原から手紙が來んぢやないか。試験だと思つて遠慮しとるのかい。」

「どうだか。」

「君は勉強するにも二人が／＼りだから、愉快だらうなあ。」

子供のやうな眼をして笑ひながら、柄にもなく中島はこんな冷かし文句を浴びせる。

「いや、君の方が餘程仕合せだよ。僕見たいに下らない事にかゝづらばつて居ると、勉強なんか出來やしない。一日でもいゝから、僕は君のやうな氣持になつて見たい。……」

宗一は心から中島の境遇が羨ましかつた。學問と體育とに若い精力を傾注し盡して居たら、嗚かし頭がカラツとして、年中爽快な月日が送れるであらう。自分も始めから美代子の事など

考へないで、活潑な、無邪氣な、運動家の群に投じればよかつた。

今となつて、其れを後悔したところで仕様がな、一旦乗り出した問題の決着する間、やつぱり山口と同じく杉浦を相手にして、宗一はウロ／＼と大切な時間を遊び暮らした。

「橋さん、わしや明日國から爲替が來たら、吉原へ行かうと思ふと。君も一緒に行くだらうぢや。上るのが嫌なら、見るだけでも構はんがな。一口に女郎と云ふけれど、大店の華魁はいゞゼエ。——かう云ふたら怒るかも知れんが、女が戀しいと云ふのは、つまり無意識のうち性慾の満足を要求しとらんぢや。つまりん事に頭を病まんと、一遍女を知つて了へばきつと落ち着いて勉強が出来るんぢや。君のやうにグヨ／＼して居つても、結局損ぢやがな。」

十二月の第一金曜日晩に、三人で豊國の牛を喰ひながら、頻りに山口は説きすゝめた。明日はいよ／＼女郎買に行つて、明後日の日曜から試験準備に取りかゝる前祝ひに、山口は大した元氣で飲みもしない酒を呷つた。

「へーえ、兼ねての宿願が成就して、とう／＼明日出かける事になつたのか、」

かう云つて、杉浦は眼を圓くした。

「山口の遊ぶところを一度見たいもんだな。お前の相方は別嬪かい。」

「美人ぢやないが、ポツチャリしてちよいと可愛いんぢや。わしや少し其の女に惚れとるがな。」

まあ君も一緒に來て見給へ、お職を張つとるだけになか／＼利口な奴だぜエ。」

お職と云ふ名を聞いて宗一は二三日前に讀んだ一葉全集のたけくらべに、此の言葉のあつた事を思ひ出した。

「さうだ、わしや一つ今夜出かけてやらう。どうせ明日は金が來るんだから、マントを質に入れてやるんぢや。——此れなら、五兩は借すだらう。」

十一時頃まで夜を更かして、引き上げる時分に、山口はかう云つて外套のホツカを外しながら、

「それぢや、此處で失敬する。」

と、大學裏門の眞暗な夜路を、いそ／＼と龍岡町の方へ消えて失つた、

「外套を質に入れないたつて、一日ぐらぬ待てさうなもんだが、そんなに行きたいものかなあ。

——や、何しろ奴は滑稽だ。」

杉浦は宗一と一緒に、再び青木堂で珈琲とウヰスキーの梯子飲みをして、例の如く、門限過ぎに生垣を乗り越えて寮へ戻つた。

其の明くる日、牛どんの授業が済むと、三人は又落ち合つて、本郷通を歩いて居た。不思議な事には、昨夜入質した筈のマントが、相變らず山口の肩に肩翻とひるがへつて居た。

「どうしたんだ、ゆうべ彼れから行かなかつたかい。」

杉浦が尋ねると、山口は小鼻の周圍に皺を作つて、妙ににたにた笑つて居る。

「どうしたつて、彼れからが奇抜なんぢや。わしや當分吉原へ行かんと濟む事になつた。」

「ま、一人でさう恐悦して居ないで、話したらいぢやないか。」

「かうなつたら、無論話すがな。君池の端の通りに、丁度此方から行くと左側に、汚い煙草屋があるのを知つとるぢやらう。彼處に娘のあるのを知つとるかな。」

「知らないれえ。」

「わしは知つとるんぢや。」

と、山口は顔の中央に人差指をあて、

「少し譯があつて。前からちよい／＼訪れるついでに彼の娘に眼を着けて置いたんぢや。ところが昨夜質屋へ行かうとして、彼處を通ると、娘が店の戸を締め乍ら、山口さん、今時分どちへお出でになりますつて、寄ひ掛けるんぢや。——暗い往來へ眞白な首を出して、家の中のあかりを背に受けるるとる具合が、可愛うてならんぜえ。……………」

「Devotionは好い加減にして、早く要領をいぢぢむさ。」

「こいつ、今夜何と物にしてやらんけりや、こんな機會はないと思ふて、お梅さん、——お

梅さんと云ふ名なんぢや。——ちよいと出て在らつしやいと云ふと、なあにと云ひ乍ら、下駄を穿いて、戸外からそつと戸を締めて、わしの側へやつて來たんぢや。少しあなたに話があるかと云ふて、わしや娘の手を取つて、上野の山へ行つた。」

「娘はそれで平氣なのかい。」

杉浦は大分好奇心を挑發されて、眞面目になつて山口を覗き込んだ。

「いや、多少恐ろしかつたに違ひないぢや。わしが押さへるとる手頭がぶるぶる顫へて居つたらな。——けれど、Viegeでないことは確かなんぢや。大膽な女子ぜえ。」

「いや實際呆れたもんだ。僕等の友達にこんな悪黨があるんだから驚く。」

杉浦は口を尖らし、胸を張つて、慨然と空嘯いた。

「今更悪黨にせんでもよからう。こんな例は世間に澤山ある事ぢやがな。——とこつてわしや此れから失敬して煙草屋へ行くぜえ。晝間は親父が留守で娘と小さい弟だけぢやから、萬事都合が好いんぢや。」

「一つ、家の前までくつ附いて行つて、其の娘を見てやらう。」

「見るに及ばんよ。そんな別嬪ぢやないんぢや。」

「だつてお前、さっきのDevotionに依ると、なが／＼可愛らしさうぢやないか。」

「そりや其の時の氣持で可愛かつたんぢや。——一緒にくるもいゝが、君が又娘を提へて餘計な事を云やせんかと思ふてな。わしや此れでも、正直な、堅い人間のやうに見せとらんぢやから。」

「見るだけ見れば、僕等は黙つて引き退るさ、誰がソナ面倒臭い事をするもんか。」

二人は山口の後に附いて、切通しの坂を下りた。岩崎邸の角から左へ折れて右へ曲つた池の端の通りを、二三町行くとむさくろしい煙草屋の店があつた。五六間手前から、山口は獨先へ立つてすたすたと歩いて、

「今日は。」

と云ひながら、框へ腰を掛けた。

娘は店先に陳列してある硝子張りの煙草の箱を楯にして肩から上を往來に曝しながら、火鉢にあたつて居たが、ちよいとニツコリしてお辭儀をするついでに、ちらりと戸外の二人へ秋波を送つた。それから續いて、山口と何か喋舌つて居るらしいのが、さつぱり二人には聞き取れなかつた。お白粉をこめて塗り着けて居るにも拘らず、面長の兩頬が傷ましく瘦て、額骨の飛び出た、額の抜け上つた、疲れたやうな容貌の女である。撫で肩のきやいやな體つきが粹だと云へば云ふものゝ、赤い髪を銀杏返しに結つて、古ぼけた雙子の綿入を着た戀子は、何處と

なく燻つて居て汚らしく、笑ふ度毎に眼を露ほにして、赤く爛れた眼瞼の奥から、細い瞳を光らせるのが、氣のせい、いかさま男狂ひでもしさうに見える。どう考へても、垢だらけな新銘仙に羊羹色の紋附を羽織つて、素足にびたんこな薩摩下駄を穿いた貧書生の山口とは、恰好の取組である。二人が豫期して居たやうな、ロマンチックな色彩は、微塵もない。

「アレで山口は面白いのかね。」

宗一は夥しい Description を感じて、杉浦に耳打ちをした。

「重ね重ね呆れたもんだね。あの娘が出来た爲めに、女郎買を止めると云ふんだから、女郎買の下らなき加減も以て推す可しだよ。——アレが可愛らしいんだとすると、山口の女好きよりも我慢強いに感心するぞ。」

かう云ひながら、二人が店の前を過ぎようとする時、

「あら随分ね、山口さん、あたしが梅幸に似て居たら、世間にお多福はありやしないわ。」

「いや、お梅さん本當ゼエ、お世辭を云ふとらんぢやないがな。」

などと、山口は娘を相手に、頬りと悦に入つて居た。

三枚橋のところへ來ると、宗一は俄に立ち止まつて帽子の鍔へ手をかけた。

「僕も此處で失敬するぞ………」

「何故。」

と、杉浦はつまらなさうに面と向つてイみながら、懐手をして貧乏指すりをする。

「此れからちよいと、内まで行つて來なけりやならん。……」

「例の問題でか。」

「うん。」

「ま、別れるにしても、其處いらまでもう少し歩かう。——どうなつたんだ彼れから。」

杉浦は友達を氣遣ふ親切な心よりも、寧ろ無聊に苦しんで、話の種に缺乏して居る所から、かう尋ねるらしかつた。

「今日か明日のうちに、親父の返答を聞く事になつた。」

「それぢや二日以内に君の運命が決するんだれ。」

「親父が不承知なら、直ぐに駄目と決するが、承知したとなると、此れから小田原へ掛け合ふんだから、いくらか壽命が延びる譯だよ。」

「掛け合つて駄目だつたら、どうなるんだい。」

「此の結婚が出来なければ、僕も女も一生獨身で通す積りだから、遠からず悶着が起るだらう。」

「一つ、僕が君と美代ちゃんの親父に打つかつて、大に利害得失を説明して、ウンと云はせて

やらうかな。——どうだい、僕に任せないか。かう云ふ談判は、實際うまいもんだぜ。其の代り成功したら、今學期の授業料を一時工面して貰ふ。」

何處まで本當で何處まで冗談か判らないので、宗一は面喰ひながら、

「あは、は、は、」

と、煮え切れない笑ひ方をした。尤も授業料の方は、毎晩のやうに大酒を呷つて居る杉浦の行動から察すれば、費消して了ふのは當り前である。實は宗一も今迄よく金が續く事だと訝しんで居た程であつた。

「いつもなら授業料の工面ぐらゐは出来るんだが、僕も今度は賄の食料を使つちまつたんで、どうも困る。」

「ナニ萬一の場合にはウエプスターを拂ひ下げる計畫だから、心配しなくつてもいゝよ。——それよりかほんとに其の談判は僕に任し給へ。」

「有難う。いづれお頼みしないでも、相談に與つて貰ふかも知れない。——それぢやあんまり遅くなるから。」

と、廣小路の四つ角で、宗一は電車を待った。

「あゝつまらんな。本郷座の立ち見でもしようかな。」

杉浦は天神の方へぶら／＼と歩いてつたが、又引返して、

「おい、君、君、いゝ歌が出来たぞ。——晴たる日、晴れたるまゝに曇れる日、曇れるまゝに暮るゝ悲しさ。——悲しさがいゝか、悲しさがいゝか、どつちかな、何しろ傑作に違ひないだらう。ぢや、左様なら。」

かう云つて、どん／＼行つて了つた。

早く獨りになりたいので、杉浦と別れたやうなものゝ、宗一は別段急いで家へ歸る必要もなかつた。「晴れたるまゝに曇れる日」の、雲の裏に光つて居る太陽を仰ぐと、何か不祥の運命の蔽ひ被さつて来る前兆のやうに感ぜられて、クド／＼と重い心に問題の成りゆきを考へ乍ら、其の儘お成街道を萬世橋の方へ辿つた。須田町から堀留へ出て人形町に來たのは三時頃であつた。また親父の歸宅する時間ではない。彼の事に就いて、當然父から相談を受けて居る筈の母親に、其となく顔を合はす恥かしさ窮屈さを思ふと、此れから直ぐには、内の敷居を跨ぐのが辛かつた。據ん所なく蘆河岸の甘泉堂へ入つて小豆を二三杯喰べて、明治座の立ち見をして灯ともし過ぎに濱町へやつて來た。

「大さう暗くなつてから、來たぢやないか。今日はもう遅いからどうかと居つて居たのに。」

かう云つて、お品は十能の炭火を長火鉢に移して居た。姐さん冠りをした中高の顔へ、火氣

が赤く映つてホツと上氣せたやうな血色に見える。

「本郷から歩いて來たんです。」

と、宗一は率直に答へた。少し手先のかじかむやうな寒さの宵に戸外を彷徨き廻つた揚句、急に家の中へ入つた爲めであらう、人いきれと、燈火の熱の籠つた室内の空氣に、ぬく／＼と體の温まるのを覺えて、彼は今更しみ／＼家庭のなつかしさ恵み深さを感じた。

「お前、御飯前にお湯へ入つたらどうだい。」

「えゝ、頂きます。」

「そんなら直にお入り。今お父さんがお上りになる所だから。」

母のかう云つて呉れるを幸彼は袴と帯を解き捨て、土藏と臺所の間に挟まつた湯殿の廊下へ駈けて行つた。姿見の前で素裸になつて、手拭を片手に、曇り硝子の障子を開けると、父は流しの中央に大柄な體格を据ゑて、お兼に背中を洗はせて居た。

「今日は。」

「三」

宗一は立ち罩めた湯氣の中から聲をかけて、石鹼の泡の流れて居る板の間へ下りた。

「バタ／＼と手拭を宗兵衛の肩にあて、お兼は暫く按摩をして居たが、其れが濟むと、背筋へ湯を注いだ後、小桶を一杯酌み換へて、

「若旦那、お背中を流しませうか。」

「いや、澤山。」

と、宗一が湯船の中から答へた時、父はどツかと腰を掻けて、彼と並んで體を浸しながら、
「もう試験が近くなつたな。どうだ勉強してゐるか。」

と云つた。

「えッ。」

宗一は生返事をして下を向いて了つた。「美代ちゃんの事が氣懸りで、勉強が出来ません。」と云ふのもあんまり無様のやうで、不本意ながら嘘を吐いた。

「此の間の話は、兎に角先方へ相談してやるから、其積りで勉強するがいい。——いづれゆつくり聞かせたい事もあるけれど、試験が済むまで、學校の方に精を出すさ。」

かう云つて、ザアツと凄しく湯の溢れる音を立て、宗一衛は湯船を出た。

八

随分と暫く御無沙汰仕候。寒冷の候大兄には相變らず御壯健にて結構に存じ候。小生事、試験終了後、一度御目にかゝり、いろいろ御話致し度存じ居候ところ、家の方に用事出来、昨夜

遇く京濱電車にて六郷へ歸省仕候。多分此の暮は田舎にて越年致す事と相成可く候。ソルツウオースの大好きな小生も、寮の生活の自由にして豊富なる都會の色彩の華麗にして複雑なるに比べて、今年ばかりは、故郷に塾居する事の淋しき物足らなさをつくづく感じ申候。昨今は父を始め家族一同の顔を見るのも嫌にて、一日鬱々と讀書したり、煙草を吹かしたり致し居候。

春子との Marriage 問題は、遂に破談と相成候。先方は勿論、小生の父も賛成、母も賛成、妹も賛成なるに拘らず、急に小生の心變りて、契約を破棄致し候次第、此の事に就きてはいづれ拜眉の節委しく申上ぐる積りに候へ共、要するに春子の性格が小生の妻として甚だ不適當なるを發見したる結果に外ならず候。彼の女は小生如き愚直一徹なる人間の妻たるべく、餘りに伶俐にて、度胸が好すぎるやうに覺え候。寧ろ外交官の夫人にでもなりて、歐洲の交際界に押し出し、數多の男子を手玉に取る方が其の本領に候可きか、もと／＼小生などの思ひを懸けたるが誤りに御座候。先達父が姫路へ参りて、其れとなく春子の實家を調査致し候處に依れば、土地にて可なりの家柄には相違なきも、彼の女の兄が申す程の資産は無之やうの趣に候。小生とても彼の女の愛情に疑を挟む者には無之、かう申しては可笑しきやうなれど、小生の家は聊か纏まりたる財産も有之候へば、多少其の邊の利害關係に心を動かしたりとするも、全然愁づくにて仕掛けたる事とは存ぜられず。極めて冷靜に忌憚なく申せば、先づ第一に春子の兄が小生

の朴訥らしき氣象に惚込み、次で相當の財産あるを確め、これに彼の女の戀——たとへ不純なるにもせよ。——が加はりて、今度の相談と相成り候やうに考へられ候。其の點を察すれば、今更氣の毒の感も致し候へど、性格の背馳せる兩人の結婚は、お互に將來の不幸と存じ、淡泊に先方の兄に打ち明け被約を乞ひ候處、兄も妹に負けぬシツカリ者として、不平を色にも表さず、兎にも角にも快諾致し、さらば此後とも親友として往復致し度き希望を述べて、譯なく落着仕候。

小生の初戀が、斯くも悲惨なる終りを遂げたるは實に意外にて、形式上の解決は着き候へ共、手痛き創痕の痕は容易に恢復仕らず、當分懊惱の種と相成り申す可く候。いかにして此の頃の無聊、倦怠孤獨を致はんか、刺戟なき生活は小生の一日も堪へ難きところ。さればとて第二の戀を作る元氣もなく、昔のクリスチャンに復る心にもなれず、過去を想ひ出す度毎に、思々しく、情なく、徒にいらだち申候。

せめて、小生の心事境遇を最も熟知せらるゝ大兄を捕へて、悶々の衷情を訴へたく、近日憂さ晴らしに上京して御尊宅を訪問仕可く候。此の際飄然と旅行に出かけたき存念切に候へども、破約以來家族一同小生の舉動を解しかね、何かにつけて餘計な心配を醸し居る拵柄故、蟲を殺してダツと辛抱致し居候。先は御近狀御尋ね旁御報法以上。

十二月二十四日

橋 大兄 机下

佐々木如之助

暮れの二十一日に試験が済むと、宗一は早速寮を引き拂つて濱町へ歸り此休暇の間に小田原の方の話を始末して了はうと思つた。さうして、一旦物置き代りに使はれた自分の書齋を綺麗に片附て、再び其の部屋の住人となつた。父からは容易に何の挨拶もなかつたが、あれ程清く承知してくれた以上、あまり執念く追求する譯にも行かず、毎日毎日返答を待ち焦れつつ空しく時を過ごして居た。丁度此の手紙が届いてから、中一日置いた二十六日の事である。また宗一が寢て居る時分に、佐々木がヒョッコリ訪れて來た。

「何處かへお出掛けになるといけないと思つて、今朝六時前に内を立つたんです。……先達の手紙は御覽になつたでせう。」

「うん、此頃は始終退屈で困つてゐんだ。今日はゆっくりして行つてくれ給へ。」

宗一は二階の縁側の、日あたりの好い東向きの障子を開け放して、鴨居際に八端の座蒲團を据ゑ、佐々木と差し向ひに庭の檜の霜除けを眺めながら語つた。疊替へをしたばかりの座敷の中に、朗かな朝の空氣が透き徹つて、佐々木の薫らす敷島の煙が、青く白くゆるやかな闇を描き、恰も水に流るゝ女の髪の毛のやうに、たゆたひながら漂つて居た。

「大層書齋が立派になりましたね。——あれは何ですか。」

佐々木は身を風めて、向う側の壁に沿ふた本箱の硝子戸を透かしながら、

「君、ドイツイン、コメデイーを買つたんですね。全部お読みになりましたか。」

「此の休みに読む積りで居たんですが、まだ十頁ぐらゐしか手を付けません。」

「あれには、ロンケフェローの譯と、ロセツチの譯があるさうですが、孰方がいいでせう。」

「さあれ。」

と、宗一は曖昧に云つた。中學時代に一級下であつた關係から、佐々木はいまだに彼を先輩扱ひにして、言葉遣ひを丁寧にするばかりか、自分が専攻する文學上の質疑までも、宗一に聽かうとする。其れが一片の禮讓から出たのではなく、本當に相手の學識を買ひ被つて居るらしいので、宗一は度々遺憾を感じるのであつた。

「僕は此の間、クォー、グアスを読んで見ました。」

「僕もあれは讀んだ。」

「素晴らしいもんぢやありませんか。此頃の小説で、あの位動かされた本はありませんね。井ニチアスと云ふ人は、日本の文覺上人の標な所がありはしませんか知ら。」

「それでも戀が成就したゞけ、文覺上人よりは合せだと思ふ。」

しかし、今の青年は文覺上人よりもつと不合せですよ。僕等にとつても彼れ程無遠慮に、自分の戀を貫くだけの熱情が湧きませんもの。文覺や井ニチアスのやうに、熱烈な生一本な感情が持てれば、其れだけでも僕は幸福だと思ふんです。今の人間はどうしたつて、あんな單純な頭にはなれませんからなれ。」

「君なんぞでもさうかなあ。僕は此の間の手紙を讀んで、實際意外に思つたよ。春子さんの方で逃げたのなら格別、君の方から嫌になると云ふのは可笑しいぢやないか。」

「そんなに可笑しうござんすか。」

「可笑しいさ君、今になつて性格が合はないとか、將來の不爲めだとか、そんな冷靜な判斷が出来やう筈がない。よしんば判斷が付いたところで、單に理屈一遍で別れるなんて、君にやり通せる藝當ぢやないぜ。やつぱり飽きたんだね。」

「飽きたんだと云はれれば、其れもさうでせう——しかし、僕が彼の女に飽きた原因は、どうしても性格の相違する點にあるんです。だん／＼附き合つて見ると、そりやナカ／＼喰へない女なんです。まあ、まるで僕なんぞとは別世界の人間ですね。僕に對する素振にしろ、仕打ちにしろ、一一政略の細工を持つて居るんです。必ずしも悪い動機から技巧を用ふるんぢやないとしたつて、實際腹が立ちますよ。此の儘捨て、置いたら、僕は氣が弱いから、次第に彼の

女に壓服されて了ふでせう。」

「惚れた女になら、壓服されたつて構はないぢやないか。」

「そりやさうです。けれども遣り方が如何にも見え透いて居て淺ましいから、壓服される前に先づ不快を感じて、嫌になるんです。あれではいつ迄馬鹿にされるもんかと云ふ敵愾心を起させるばかりです。」

「君のやうな道徳家——道徳家と云ふのも變だが、正直な、愛情の清い人でも、飽きると云ふ事があるのかねえ。何にしても意外だつたよ。」

宗一は意味ありげな微笑を浮かべながら、相手の表情を判じるやうに凝視して、

「君、彼の人と何か関係があつたんぢやないのかい。」

「決してありません。」

と、佐々木はキツパリ答へて、強く首を振つた。

「そりや、二人で夜遅く散歩した事は随分あるんですけど、關係なんかは斷じてないんです。」

「さうか知ら。——山口の説に依ると、男と云ふものは關係が附いて了へば、直に女を棄てるさうだから、或は其の邊の事情があるかと思つて、……」

「それこそ、僕に出来る藝當ぢやありませんよ。藝者を買つたり、女中に手を附けたりしたの

ら、棄た所で冷酷とは云へますまいが、其れとは場合が違ふんですもの、かうなれば、何も彼も打ち明けてお話ししますがね。いつか夏の晩に芝の山内をうろついた時なんぞ、春子をベンチへ据わらせながら、僕は後から庇髪の中へ鼻を埋めて、両手で頬を挟んでやつたり囁きました。其の他の時にも Shake hand & Kiss は何度したか知れませんが、けれど決して、其れ以上には進まなかつたんです。」

宗一は友達の甘い物語を、黙つて聞かされる程、寛大ではなかつたが、佐々木のやうに眞剣に惚けられると、冷嘲する隙がないので、いつも謹聽を餘儀なくされた。

「さう云へばね、一度妙な事がありましたよ。此れは決して、他へ行つて話されちや困りますか……」

と、何を想ひ出したのか、佐々木は眼を光らせて、一段と調子を低め、

「一時僕が千駄木に二階を借りて居た事があつたでせう。あの時分、土曜日になると、屹度春子が僕の妹と一緒に、——兩方とも〇〇女學校の同級生だもんですから、互に誘ひ合つて訪ねて来たものなんです。たしか去年の四月ごろでした。半どの晩に二人でやつて来て、十一時過ぎまで話し込んで、とうとう泊ることになつちやつたんです。其れまで彼處へ泊つたと云ふ例はないんですが妹も一緒だし、差支あるまいと思つて、座敷へ蒲團を三つ並べて敷いたんで

すよ。すると、寝る時に春子が「あたし此處がいゝわ。」と、中央の蒲團へ入つたんでせう。其れがいかに無難作に軽く云はれたもんですから、僕も別段氣に留めないうで寝ちまつたんです。今考へると、彼の調子なんぞ、全くうまいもんでしたれ。」

「其座敷には灯がついて居たのかい。」

「いゝえ。僕は暗くないと寝られませんが、それにランプでしたから、危険だと思つて消してしましました。春子は妹の方へ背を向けて、いつまでもコソコソ僕に話しかけて、なか／＼寝さうもないんですよ。二時間ばかりさうして居るうちに、だん／＼此方へ體を寄せながら、腕を伸ばして僕の手頭を押さへるんでせう。妹も寝られなかつたと見えて、其れまで我慢して居ましたが、とう／＼夜具を被つてシク／＼泣き始めたんです。其のお蔭で、まあ、際どい所を逃れましたがね。」

「若しも妹が知らなかつたら、随分危いもんだつたね。」

「二人ぎりだと受け合ひませんが、側に妹が寝て居るんですから、たとへ知れないでも、そんな真以は出来ませんよ。妹も後になつて、春子さんは妾と同じ年だけれど、まるでする事が姉さんのやうだつて、皮肉を云つてましたつけ。——此れで彼の女の性質は大概解るでせう。」

「事に依つたら、もういぢやないんだらう。」

「さあれ、随分そんな疑ひも起りますね。——しかし、今になつても、僕は春子を憎いとは思ひません。兎に角あれ程に僕を慕つてくれたのだし、未だに未練があるらしいんですから、可哀さうな氣もしますよ。一生友達附き合ひをして、幸福を謀つてやる責任はあらうと思ふんです。」

と、佐々木は傷ましい顔をして云つた。

宗一は、一身の秘密を隠さず打ち明ける友達の信義に對して、自分が今迄、美代子の事を屋毫も告げなかつたのが、濟まないやうに感ぜられた。殊に、山口のやうな人間に洩らして置きながら、佐々木の耳へ入れないと云ふのは、どう考へても不都合である。自分の戀が、將來何の心配もなく、易々と成就するめでたい話なり、失意に沈む現在の佐々木に語らすとも宜いであらう。しかし、佐々木が宗一に胸中の苦悶を訴へると同じく、彼も佐々木の同情を求めたいのが、目下の状態であつた。

「ところで僕も、昨今君のやうな問題に悩まされて居るんだよ。」

かう云つて彼は、川甚の折よりも更に詳しく、戀の成行をこま／＼と話して聞かせた。

「しかし、君のお父さんはよく解つた方ですれえ。」佐々木は宗兵衛が何も云はずに金を呉れた處置に感心して、「ほんとに君は仕合せですよ。」

「あんまり捌けて居られるのも困り者だよ。だだを捏ねて催促する事も出来ず、やけになつて道楽する譯にも行かず、實際此の頃はヤキモキして居るね、——君のお父さんは、どんな工合だい。」

「僕の親父も、決して解らない方ぢやありませんが、あんまり如才なさ過ぎて、人を欺すやうな真似をするので、時々腹が立ちますよ。それに、何しろ僕が我が儘者ですから、腫物に觸るやうにして御機嫌を取るんです。妹なんぞお父さんは陰険だと云つて、嫌ひ抜いて居ます。——尤も、親父としては多少の政略も無理はないんですが、戀愛の問題なぞになると、どんな仲の好い親子だつて、感情の齟齬は免れませんよ。戀の味を知り始めたら、誰だつて家庭に不満を抱くやうになるんです。」

「全くさうだ。……」

宗一は熱心に、佐々木の意見に賛成の意を表した。

「僕なんか、此れまで親父にも母親にも心服して居て、出来るだけの孝行を盡す積りで居たんだ。今日でも兩親の仕打ちに何一つ手落ちはなし、涙がこぼれる程有難いと感じながら、どう云ふものか、さつぱり内が面白くない。九月に寮へ入つたのも實は其の爲めなんだ。それでも今度の休暇中には是非望を付けやうと思つて、内へ歸つたんだが、一日不愉快で、落ち着かない

で、仕様がなけれ。兩親と遇ふのが嫌で、用事の外は、めつたに階下へなんか下りやしない。と云つて、少しも兩親が憎いんぢやないのだ。つまり兩親の顔を見ると、氣の毒で溜らなくつて、自分の不考なのが、悲しくなるんだらう。」

「けれども君は仕合せですよ。お父さんは行き届いた方だし、美代子さんだつてなか／＼考へがシツカリして居るし、そんなにヤキモキ心配する必要はないぢありませんか。安心して、落ち着いて、吉左右を待つて居たらいいでせう。」

「吉左右が來ると極まつて居れば、安心するけれど、さう譯なく運びさうもないんだよ。向ふの家が、さつき話した通りの込み入つた事情なんだからね。」

「どんな事情があつたつて、美代子さんさへ、さう云ふ考へなら安心ぢやありませんか。君はたゞ、神を信じると同じやうに、美代子さんを信じて居ればいいんです。大丈夫ですよ。吉左右に極まつて居ます。どうしたつて、一緒になれない筈はありません。夫れ程に二人が思ひ合つて居乍ら、結婚が出来ないなんて嘘ですよ。」

真心の籠つた、燃えるやうな舌に説き慰められて、宗一は氣が弛んだのか、遣る瀧ない胸の憂ひが一時に込上げ、

「こんな所を見せちや恥かしいが、僕は美代子が可愛さうで仕様がななんだ。」

かう云つたまゝ、頭を膝の上へ伏せた。

「……美代子は望みがかなはなければ死ぬと云つてゐるんだぜ。さうなれば、僕だつて死にたいけれど、男は親に對する責任があるから、そんな譯には行かないぢやないか。だから可哀さうで仕様がななんだ。」

「今から其れ程ガツカリする事はありませんよ。大丈夫ですよ。」

佐々木はうつむいて瞑目しながら、簡単な言葉に力を籠めて云つた。けれども宗一は容易く泣き止まない。歎歎り上げる聲がだん／＼忙しく、遂に梯子段のトまで漏れさうになると、佐々木は狼狽して、女のやうに友達のを背筋を撫でつゝ耳元へ顔を近づけ、

「どうしたんです、君はあんまり悲觀し過ぎますよ。まあ、よく考へて御覽なさい。美代子さんが斷じて餘所へ行かない覺悟なら、いくら親が不賛成でも、結局君の所へ寄越すより外方法がないぢやありませんか。君だつて又、そんなに心配なら、遠慮せずにどん／＼お父さんに催促したらいゝぢやありませんか。此の場になつて義理が悪いの恥かしいのつて、云つてゐる際ぢやありませんよ。結婚さへして丁へば、結局圓滿に收まるんだから、一時の騒動や衝突なんか頓着しないで、ドシ／＼押し切つて進んだらいいでせう。さうなさい、さうなさい、君の生涯に關する大事ぢやありませんか。」

佐々木の唇から流れ出る勸告の辭が、長い／＼戀の歌でも聽くやうに美しく感ぜられて、宗一は久し振に快くさめ／＼と泣いた。友達にこんな手敷をかけて、自ら訝まれる程涙に掻きまわされて、それで漸く此の頃のもの／＼やくしやが軽減されたやうに思つた。

「時に、もう何時でせう。」佐々木は袴の紐にからんだ銀鎖に手をかけて、

「十一時ですれ、——どうです、ちつと散歩でもしませんか。」

「ま、飯を喰べて行き給へな。——ほんとに失敬しちゃつた。」

かう云つて、宗一は面を擡げたが、まだしやくくりが止まらなかつた。

「御馳走になつても宜ござんすけれど、何か喰べに行きませうよ。氣が變つていゝぢやありませんか。」

「ぢや其處まで出かけて見よう。……君、眼の周圍がまだ赤かないかい。」

宗一は明るい方へ顔を嚙して云つた。

「その位なら判りやしません。」

二人は支度をして、梯子段を下りた。

「もう御歸りでございますか、まあお午でも召し上つて……何にもございませんが、宗一、お前お止め申したらいゝぢやないか。」

お品は惶て、支關へ送つて出た。

「はい、どうも毎度伺ひまして、お邪魔ばかり致します。」

と、佐々木は上り端へ畏まり、叮嚀にお辭儀をして、中腰に立ちかけながら、

「橋君も此の頃はお丈夫で、結構でございますね。ではこれで失敬を致します。私の方は田舎で淋しい處でございますが、川崎へでもお参りに入らっしゃいましたら、ちとお立ち寄り下さいまし。」

こんな風に挨拶する所は、質朴なしかしな／＼達者な口ぶりで、お品には末頼もしい青年のやうに思はれた。

戸外へ出ると、佐々木は早速宗一に耳打ちをした。

「何ですれ、君のおッ母さんは。話をしながら、始終氣を配つて眼を働かせて居ますね。同じ親切でも、故々苦勞を盡した、複雑な心から出る親切と云つたやうなところがありますね。」

「君にもさう見えるかな。」

「そりや見えませんとも。——僕のマーザーなんか、人間は正直ですけれど、氣が小さ／＼つて、怒りッぱくつて、其の癖馬鹿に臆病なんです。田舎の内へ知らない男がやつて来て、金を強請つたりなんかしようものなら、忽ち青くなつて顔へ上るんですから。何かの時には全く役に

立ちませんよ。」

「役に立つ點から云へば、僕のマーザーは實際、えらいよ。兎に角箸にも棒にも懸らないやうな道樂者だつた僕の親父を、い、工合に操縦して了つたんだから。母親の云ふ事だと、親父は一言もなく承知しちまふんだ。柔順なやうで、心底は案外シツカリした、悪く云ふと少しずるい位利口なんだぜ。——今度の事件なんぞ、親父よりお母の方が何かと思ふ。」

「なあに、そんなことはありませんよ。マーザーだつて、お父さんの時分に故々經驗して居らつしやるんだから、まさか無闇な壓制はなさらないでせう。」

「ハズバンドが大人しくなつたかと思ふと、今度は子供が心配をかける——マーザーも長い間苦勞する人間だ。」

二人はこんな事を云ひながら、中之橋を渡つて、水天宮前へ出た。

人形町の大通りは、もうすっかり新年の装ひになつて、軒並に松を飾り竹を結び付け、大賣り出しや、福引の旗が方々に飄つて居た。菓子屋の店先には、眞白な、春き立ての餅が、座蒲團のやうに積み重なつて居る。溝に沿ふた露店の筵には、輪飾り、穂俵、蝦、裏白などが、所狭く展がつて居る。羽子板を冷かす客、寄切れを見る女、いろ／＼の人間が忙はしげに薄晩の町を右往左往する。

「おい、君、何處へ飯を喰ひに行かう。」

大観音へお参りをして、出口の石段へ戻つて來ると、宗一はかう云つて立ち止まつた。

「何處でもよござんす。——君はこゝいらをよく知つてゐるぢやありませんか。」

「うまい物を喰ひに行くのか、落ち着いて話したいのか、どつちだね。」

「此の邊の喰ひ物なら、僕には何だつてうまござんすよ。靜かな、話の出来る所がいゝぢやありませんか。」

田舎者を標榜する佐々木は、江戸趣味の野村と違つて、花村なぞよりいつそ洋食屋の二階の方がいゝらしかつた。

宗一は末廣が鳥安へ行つて、久しぶりで好物のあひ鴨を喰へたかつたが、靜かなところと云ふ注文に懸念して、茅場町の藥師の地内の丸金へ案内した。

下戸の佐々木が相手では、杯の數も進まず、鍋をまん中に、一本半ばかりビールを飲むと、直に飯を取つた。格別會談の興を添ふ可き話柄も盡きて、二人は折々黙つて了つた。一時間程で、其處を出ると、佐々木は鎧橋の袂で、

「それぢや、失敬ませう。」

と、云つた。

「まあ、もう一遍内へ來ないか。」

それでも獨りになるよりはいと、宗一は思つた。

「又にしませう。此れから丸善へ廻つて、買物をしなげりやなりませんから。——ところで、さツきの勘定は幾らでした。」

「あれはいゝんだ。」

「いゝえ、僕に半分出さして下さい。」

かう云つて、佐々木は一圓ながしの錢を無理に宗一の手へ渡して、逃げるやうに駈けて行つた。

取引所の角から、兜町の方へ消えて了つた友達の後姿を見送つて、宗一は再びとぼくと歩を移した。鎧橋の在右に伸びた川筋の、一方は永代、一方は魚河岸の果まで、毛程の曇りもない空が、秋の水のやうに澄え渡つて、石版刷の繪の色を想ひ浮ばせる。紅葉川に分れ口にある古い西洋館——澁澤事務所の屋根から三四尺上に輝く日光が、鋸の齒を並べたやうな小網町河岸の土蔵の壁に、まざくと黄色く漂つて居る。——彼は、ふと、少年の折の事を考へ出した。七つ八つの時分、丁度肩の高さぐらゐある此の橋の手すり、に掴まつて、足許を通る往來の船を、ザツと瞰下した事が度々あつた。橋桁の底へ潜つて行く船を視詰めて居ると、船が動かないで、

橋が前進するやうに思はれる。其れが子供心に面白くつて、一艘、二艘、三艘と、次ぎから次ぎへ漕ぎ寄せる船を待ち構へつゝ、つめたい鐵の欄干が自分の願で温まるまで、長い間眺め暮らした。其の頃の西洋館と云へば珍らしくつて、あの濹澤事務所の圓い柱や硝子窓が、どんなに彼の好奇心を募らせたであらう。いまだに彼はあの建築を見ると、西洋の封建時代の城塞に附隨するやうなローマンスを胸に描く。河竹默阿彌の脚本『島嶼月白浪』に現れたやうな、明治初年の風俗を憧憬する。

それから才五半あまりも歳月が立つて、自分はこんなに變つて了つた。二十一歳の暮も、あと五晝夜過ぎれば終りを告げる。——宗一に取つて、今年ほど忘れられぬ年はあるまい。去年の秋から持ち越した肋膜炎の大病が漸く直つて命拾ひをしたのも今年である。初恋の味を舐めてから、此れまでの人生觀が動搖し出したのも今年である。茅が崎から歸つて半年の間に茶屋酒を飲む度胸も附いた。親を欺く行爲もあつた。贅澤な金遣ひの方も覺えた。戀と學問とを、同じ程度に尊重する積りであつたのが、健康を快復してから、彼はどれだけ勉強をしたであらう。どれだけ讀書をしたであらう。年内に讀破する決心で、手帳へ書き連れた十二三冊の書目のうち、一冊として片附いたものはないではないか。去年の今日に比較して、どのくらゐ獨逸語は進歩したらう。どのくらゐ單語の數を餘計知つたらう功名と云ふ事、事業と云ふ事、其れ等を

悉く忘却して、自己の全部を美代子に捧げて了ふ程、彼は自分を女々しい男とは氣が付かなかつた。

美代子の話は美代子の話として、此れから断然勉強しなければならぬ。片時の猶豫もなく、直に内へ歸つて、讀書に取りかゝらなければならぬ。——かう張り詰めて見るものゝ、二三町歩く間に勇氣が沮喪して、到底實行し難い事のやうに感ぜられる。問題の解決がつかぬうちには、失神した人間も同然である。美代子と完全な握手が出来ない以上、當分宗一の復活する道はなかつた。

銀杏八幡前へ來た時、彼は深い沈思の底から泛び上つて、體中の意識をハッキリさせて、あたりを見廻した。電車が二三臺置きに滿員の赤札を下げて、一杯の人數を運びながら、凄じく走る。切山椒を買ふお客が、多勢三原堂の店先へ押しかける。誰も彼も追ひ立てられるやうな顔をして、動いて居る。宗一は野路に行き暮れた旅人の如く、賑やかな四つ辻のまんまかに茫然とゐた。

此れから何處へ遊びに行くに云ふあてもない。内へ戻つて、夜になるまで、どうして時間を送つたら好からう。……彼は退屈凌ぎに、新年の雜誌を二三冊流り求めたが、かう云ふ時の暇つぶしには年始状でも認めるのが一番いと心付いて繪端書を三十枚と、書き好きさうな古

梅園の毛筆を二本買った。歸つたら早速、二階の書齋に端座して、硯の墨を濃く擦つて眞白な紙の面へ「恭賀新年……」と揮毫する樂しさを想像しながら、宗一は俄に活氣づいて道を急いだ。

「唯今。」

と云ひつゝ、玄關の障子を開き、六疊の間を跨いで行かうとすると、お品は其處に裁板を置いて、獨りで火熨しをかけて居た。

「佐々木さんはお歸りなすつたのかい。」

「えゝ、つい鐘橋のところへ別れました。」

宗一は少し畑つたさうな面持ちをして梯子段の上り口に立ちすくんだ。

「ちよいとお前に話があるんだが……」

まあ、此處へ来て掛われ。と云ふやうに、お品はちらりと宗一を見て、

「此の間お父さんから聞きました。が、出来る事ならお前の望み通りにして上げてたいけれど、なか／＼チョククラ行きさうもないんだよ。正月になつて嫌な話をするでもないから今の中に云つて置くがね。……」

「とても駄目なんでせうか。」

かう云つて、宗一はバタリと母の傍へ腰を落した。

「さうも云へないが、美代ちゃんのお母さんが不承知らしいから、私やむづかしからうと思ふ。お父さんも心配なすつて、今月になつてから、二三度小田原へいらしたんだよ。いろ／＼手を換へ、品を換へてお頼みなすつたらしいけれど、何しろお綱さんは、若い時分から剛情な人でね。自分が斯うと云ひ出したからは、後へ引くやうな性分ぢやないんだもの。」

聞いて居るうちに宗一は、身が沈んで行くやうな、果敢なき、傾りなきを覺えて、悲しみが胸一杯に充滿した。

「わたしも美代ちゃんなら差支ないと思ふし、殊にお前がさう云ふ考へだから、成る可く纏めるやうにしたいと思つたんだけど、先方が許さない以上は、仕方がないぢやないか。お前、何とか考へ直して見る氣にはならないかい。」

「ほんとに駄目となつたなら、考へ直すも直さないもありません。——しかし、それでも、もう一遍頼んで下さる譯には行きませんか知ら。」

「そりや、春にでもなつて、又折があつたら話しても見よう。今のところ、お父さんだつてお忙しいから、さう／＼小田原へもいらつしやれやしないよ。」

「私は決して急ぎませんから、兎に角もう一度お話しなすつて下さい。小田原の方だつて、美

代ちやんが飽く迄賢を貰ふのを拒めば、いつか折れる時が来るでせう。いよく駄目だったら、私は其の時まで待つてもいい積なんです。」

「其の後、美代ちやんから手紙でも寄越したのかい。」

「あれきり音信不通になつて居ます。——何も彼もお父さんにお任せした以上、當人同士は直接に往來しないと云ふ約束をしたんですから。」

「何卒此れからもさうしておくれ。本来ならかうなる前に、私の耳へ入れてくれればよかつたんだよ。それをお前が陸へ隠れて、内々美代ちやんと相談なんかしたのだから、向ふでも少しは氣持を悪くしたんだらう。今となつて、其れを云つても仕構がないがね。——たゞ私が心配するのは、お前が待つと云つたところで、此れから先何年かゝるものか判らない。美代ちやんだつて、だん／＼月日が立つうちには、どう變らないとも限らないから、一途に其れをあてにすると、飛んだ間違ひが起ると思ふ。」

「しかし、私は美代ちやんの性質から考へて、其點だけは疑はないんです。」

「いゝえ。此ればかりはナカ／＼當人の思ひ通り行かないものなんだから、いくら美代ちやんが其の積りで、堅い約束をしたからつて、先の事は判りやしないよ。當人同志は勿論、親と親とが立派に取り極めた許嫁でさへ、五年十年と立つうちには随分破談になるぢやないか。お互

に明が日貧乏するかも知れないし、いつ何時病氣にかゝつて、死なない迄も片輪になるとか、一生直らないとか、——そんな事があつてくれちや大變だけれど、人の身の上はどうなるか判らないんだから、其の時になつて、以前の約束を楯に取る譯にも行かなくならあれ。それに女は氣が弱いから、親に手を合はされて、拜まれてもして御覽、いつ迄強い言も云つて居られないから。」

「私だけは、どんなに境遇が變つたつて決して違約しない積りです。けれども先がそんな薄情な眞似をするかどうか、其の場にならなければ何とも云へませんが、若しさうなつたら、私もキツパリ思ひ切ります。」

「お前は一概に薄情と云ふけれど、さうばかりも云へやしないよ。だんだん年を取つて見れば解る事だが、いくら當人は一緒になりたくつても、據んどころない事情が澤山出來てくるのだから。——私や兎に角、一旦あきらめて貰つた方がいゝと思ふ。さうして、お前が大學を卒業する迄には、五六年もあるのだから、其の後になつて、双方の心が變らないで居るやうだつたら、改めて話をしてもいゝぢやないか。何にしても、このところ、當分そんな話は忘れちまつて、學校の方に精を出すと。さう云ふ風にしてくれないか。」

宗一は何と答へてよいか、當惑して、眼の前に坐つて居る母親の白足袋の裏を視詰めながら、

狛犬のやうに躊躇つて両手をついて、「宜しうございます。そんなら一旦あきらめて了みます。」
 「かう答へたら、勿論母は満足する。前後の行き掛りが、自分に此の答へを、血を吐くやうな
 此の答へを餘儀なくせしめて居る。親に安心を與へる爲め、たつた一言云つて了へば済むの
 であるが、宗一には其れが口惜しかった。眞の覺悟が極まららないのに、一時逃れの挨拶をして、
 お茶を濁すのは快くなかつた。」

「あきらめなければならぬ時が來れば、私も男らしくあきらめますから、もう暫くお見逃し
 なすつて下さい。いろ／＼御心配をかけて済みませんが、今のところ、まだ早計のやうに考へ
 られて、どうもそれ程にする氣にはなれないんです。其の爲めに學校を怠けるとか、手紙の
 遣り取りするとか、そんな不埒な眞似は一切致しません。以前の通り勉強もします。品行も慎
 みます。唯私が心の中で思つて居る事だけ、許して頂きたいんです。此ればかりは忘れろと仰
 しやつても、またいくら自分で忘れようとしても、容易に忘れられるものぢやないと思ひます。」
 「忘れられない、忘れられないと思つて居るから、駄目なんだよ。お前の氣の持ちやう一つで、
 どうにでもなる話ぢやないか。——出來ないと云ふなら、無理にとほ云はないが、それで學校
 の方が疎かにならないか。口ではさう云つたつて、女の事に氣を腐らせたりなんかした日に
 や誰でも怠け癖の附くものだ。みーんなさう云ふのが原で、道樂を始めたり、財産を失した

り、しまひには墮落をして了ふのさ。今時分から、色の戀のツて嫌らしい騒ぎをするやうぢや、
 ナカ／＼出世は出來やしない。……」

母はクド／＼と意見しながら、始終せはしなく手を働かせ、細々した着物の布を根よく取り
 出して、順々に火熨斗を掛て居たが、其れが済むと、やがて長火鉢の傍へ立て膝をして、柄草
 を吸ひ始めた。態度と云ひ、調子と云ひ、別段氣色ばむでもなく、憎らしい程落ち着いて居る。

「お前は教育のある人間だから、よもや間違ひはないだらうけれど、どんな利巧な者だつて、
 女の事では、分別が起るものなんだから……」

父にも母にも、「教育のある人間」と云ふ言葉を、宗一は何回聞かされるだらう。「教育のある
 人間」は、心が鐵にでもなるのか知らん。

「勉強だけは必ずするから大丈夫だ、なんと思つたつて、其の通り行くものぢやないんだから
 御覽。ほんとに今が肝腎の時だよ。よく考へて何かしないと、一つケレ出したら、一生の損
 になるよ。お前だつて、お父さんの若い時の事を知つて居るぢやないか。それでも中途で眼がお
 覺めなすつたから、漸う取り返しがついたもの、今だつて、内は決してお祖父さんの時分の
 様に好くないんだよ。わたしやいまだに、お父さんがあんな道樂をなさらなかつたら、もう少
 し何とかなつて居るだらうと思つて居る。——お父さんも御自分に覺えがおあんなさるから、

此の頃はお前の事などのくらゐ心配していらつしやるか判りやしないよ。」
其の時臺所に續いた障子を開けて悪いところへ打つかつたと云ふやうに、お爺が恐る／＼顔を出した。

「あの、おかみさん鐵瓶が沸騰ちましてございますが、後へ何をかけますんですか。」

「伽羅路を煮るんだから、さつきのお鍋を掛けといっておくれ。今わたしが行つて見ますから。」
母はぼんと煙管をはたいて、

「まあ、こんな事は常人の心次第で、ハタがいくら八蓋しく云つても無理な話だから、二三日とつくり考へて見るさ。わたしが此れ丈云つたんだから、お父さんは改めて何も仰しやるまいと思ふ。」

かう云つて、立つて行つた。

どうなる事かと案じて居たのに、辛くも放免されて、宗一は胸を撫で下ろしながら、逃ぐるが如く梯子段を上つた。さうして買つて来た雑誌や繪端書を机の上へ放り出して、惱まじげに腕組をしたまゝ、書齋の中をグルグルと廻り始めた。丁度三廻りばかりして四度目に本箱の前へやつて来た時、パツと雪燈のあかりがついた。まだちつとも暗くならないのに細い赤いカーボンの線が、電球の中にもぼんやり光つて居るのを見ると、心がせかせかと焦ら立つやうに感ぜ

られて、彼はいきなりバチンとスヰッチを拵り返した。

「お父さんは、改めて何も仰しやるまいと思ふ。」——此の言葉から察すると、母は明かに父の意を體して、倅に忠告したのであらう。事に依つたら、父の寛大を齒痒く思ひ、母が自ら進んで、憎まれ役の衝に當つたのかも邪推される。放任主義の父の遣り方としては、少し干渉し過ぎるやうである。父だつて昔の事を考へたら、そんなに強い事を云へる筈がない。色戀に關して立派な口が利けるのは、自分だけであると云ふ地位を利用して、母は倅の監督權を、父の手から奪ひ取つたのであらう。……

戸外を歩いて居た間に、火鉢の炭がすっかり灰になつて、部屋はしんしんと凍切つて居た。寒さが、うら寂しい彼の心に沁み徹つて、一層悲しく情ない感慨を催さしめる。何にしても、此惶しい歳晩の五日間が早く過ぎてくれ、ばい、正月になつて、一陽來復の春めいた景氣に出會つたならば、少しは氣分も引き立つてあらう。……彼があれ程苦に病んで居た問題が、こんなに突然、こんなに雑作なく、且こんなに不得要領の結末を告げようとは思はなかつた。もう内に燻つて居る必要はないのだから、若し兩親が許すならば、彼は何處へなりと旅行に出かけて了ひたかつた。

出かけるならば、人里離れた山奥の、雪に鎖された温泉宿へ籠りたい。真綿のやうな雪がこ

んこんと降り積つて、谷を埋め、川を塞ぎ、庇の垂氷の三四尺も下るやうな一軒家に隠れて、戀の炎を封じ込めて了ひたい……。

九

冬の休暇になつてから、中島と清水は歸省して了ふ。野村と大山は旅行に出かける。山口は千駄木の安下宿へ移る。杉浦一人が、寄寮寮へ踏み止まつて、桑寮一番の寢室を我が物顔に横領して居た。年末のソワソワした空氣も、向陵の門内へはまるきり吹き込まない。授業の鐘は鳴らず、朝寝坊の邪氣は這入らず、いつも蒲團を敷き放しにして、森閑とした晝の静けさに無聊を啣ち、夜になれば山口を誘つて、銀座通や淺草公園や、下町の賑やかな景氣を見物に歩く。其のうち、とうとう大晦日の晩となつて、しよさいなさに宵の九時頃から眠つて了つた。元日の朝は、彼も例になく早く起きて、國許から届いた地織木綿の綿入の袖の紋附を重ね、少しばかり身じまひを整へて食堂の雑煮を喰つた。寒い事は寒いが、風が止んで空が晴れて、申し分のない天氣である。保証人の家と、縣の寄宿舍と二三軒年始に廻つて、それから橋でも訪ねようか知らん、と思つて居る所へ、
「おめでたう。」

と云ひながら、山口が飛び込んで来た。此れも珍らしくさかやきを剃つて、青々として髭の跡を撫でながら、至極涼しさうな顔をして居る。親父の古物らしい縞絲織の羽織に、嘉平次の袴を穿いて、妙にヒカ／＼と取り濟ました様子である。杉浦は一と眼見ると、何も云はずに腹を抱へて吹き出しかけた。

「何を笑ふとるんぢや、杉浦さん。」

「だつて、あんまり可笑しいからよ。お前のさうやつた處は、どうしたつて私立大學生だぜ。一體、何と思つて、ソナナ服装をして来たんだい。實際不心得千萬な男だ。」

「不心得千萬だつて、今日は正月ぢやがな。君も何だかめかしとるぜニ。」

「いや、僕のは何でもないさ。——お前の着物は、そりや一體何だい。いやに絢爛の美を極めてるね。」

「ふむ、此れか。」

と、山口は得意らしく自分の胸を俯向いて見て、

「こりや、昨夜まで質に入れてあつたんぢや。——ゆうべ漸う煙草屋の娘に工面させて、出して来たんぢや。」

「へーえ、もうそんな事を始めたのかい。——其の後何か面白い事でもあつたのか。」

杉浦は年始を其方除けに、落ち着き拂つて其の場へ座り込んで了つた。

「面白いよりは、少し大變な事件が起つとるんぢや。こりや未だ君に話したうもないがな。」

「構はないから、話して下さ。なんだ大事件と云ふのは。」

「煙草屋の娘に別な男のあるのを發見したんぢや。」

話したうもないと云ひながら、山口は直ぐと口をすべらして、

「詳しい事を云うてもいいが、何處か戸外で飲まうぢやないか。君、正月だから、わしに酒を御馳走せい。——それとも年始に行くのかな。」

「年始なんぞ、いつでもいいんだ。これから橋の處へ行つて御馳走にならう。——先生此の頃は屈託してるから、大概今日等は内に燻つて居るよ。」

實は杉浦も、遅延に遅延した授業料を漸く二三日前に納めた爲め、正月早々一圓の小遣ひすら持つて居なかつた。

二人は空家のやうな學校の門から連れ立つて、春めいた本郷通の大道へ出た。去年の暮れから飾り付けた門松も、今日は一と入整然として、さすがに町は陽氣である。

「此の前の冬は故國へ歸つて知らなかつたが、やつぱり東京は面白いなあ。」

と、杉浦は小首をかしげて、しきりに都會を讚嘆する。

「橋さんの近所はモット面白いぜ。わしや芳町の藝者の妾が拜みたうてならん。」

山口の口にかゝると、藝者と云ふ者はまるで神様のやうに、貴く有り難く取扱はれて居る。

電車の中も、山高帽や七子の紋附や、酒臭い息の男が澤山乗り込んで、赤い顔を列べて居る。

淺草橋から兩國を過ぎて、追ひ／＼下町へ入つて來ると、

「ほう……………」

と、山口は時々黄な聲を發して、戸外を指さしながら、

「ちよいと杉浦さん、あれを見い。下町の娘は綺麗だのう、何處となく赤抜けがしとるから不思議ぢやなあ。」

かう云つて、恐い程眼を見張つて、念入りに目的物を覗みつける。

居蘇の酔の廻つたらしい廻禮の人々を通る。塗り立てのゴム輪の俵が何臺も往來する。立矢の字に萌えたやうな鬱金の扱帯をだらりと下げた娘達が、カチンカチンと羽を衝いて居る。皮羽織を着た鳶の頭が、飾りの下を潜つて、手拭を配つて歩く。獅子舞ひの太鼓の音、紙鳶の呻り。——人形町は水天宮の縁日で、殊に雑沓が夥しい。山口の樂しみにして居た芳町を藝者が、出の着物を着飾つて箱屋を従へ、彼方此方の新道から繪のやうな姿を現はす。

濱町へ訪れて行くと、果して宗一は在宅であつた。

「やあ、おめでたう。——何卒二階へ。」
と、機嫌よく云ひながら、玄關に飛んで出て来た。

家の前には、虎の皮の褥や、びろろどの膝掛けが着いた殿しい人力が二三臺待つて居た。立派な營養だの証目の正しい男物の下駄が、踏み石に一杯揃へてあつて、突き當りにある萬歳の衝立の向うには、五六人の年始の客が落ち合つて居るらしい。宗一の母と思はれる女の聲と、客の男の笑ひ聲とで、賑かな座敷はゴタ／＼に賑はつて居る。

丁度二人が宗一に案内されて、廊下の方から曲らうとする時、衝立の後の襖がスラリと開いて、

「や、それでは、もう此れで御免を蒙ります。」

と、美々しく盛裝した五十恰好の男が、仙臺平の袴をキユツキユツと鳴らしながら、玄關の帽子掛けの下に立つた。

「宗一ツつあん、お友達がおいでよげすかな。」

かう云つて、獵虎の襟巻を結んで、外套を肩に、ちよいと反身に構へて見せる。髪は脱げ上つた、赤ッ鼻の、氣の好ささうな爺さんである。

「……唯今おッ母さんに伺ひましたが、昨年あんなにお煩ひなすつたのに、學校を及第なす

つたてえなあ、驚きやしたなあ。もう再来年は、大學だてえちやありませんか。」

「え、お蔭様で。」

「ふうん、早いもんですなあ。」と、鼻の穴を脹らがして、二三度頤を強く引いて、

「なんしろ、お父さんはお楽しみだ。何ですぜ、ちとお休み中に宅へも遊びに入らつしやい。

れ、ようがすか、三日の晩に娘達が骨牌會をやるさうだから、其の時がい。」

こんな事を云ひながら、例の虎の皮の俵へ乗り移るや否や、顔を平手で撫で下すと同時に、きちんと取り済まして、梶棒を上げさせた。

「學校を及第なすつたてえなあ、驚きやしたなあか。」

杉浦は廊下を案内されながら、口眞似をして、

「ありや一體何處の爺さんだい。」

「やつぱり兜町の間さ。大分酔拂つて居るんだ。」

「酔つてるかも知れんが、好い年をして、滑稽な人間が居るねえ。——橋宗一君も、下町へ來ると嶄然頭角を露はして、秀才面をして居るから面白いナ。」

「けれども、三日に骨牌會のあるのはいゝぜエ。橋さん彼の人の娘は別嬪かどうぢや。」

三人縦に列んで、窮風な螺旋の梯子段を上る時、一番下の方から山口が云ふ。

「そんなによくはないよ。」

「しかし、君は行くんぢやらうがな、どうだ、わしも連れて行け。」

「お前のやうな悪黨は、女の居る所へはとでも連れて行かないよ。新年早々、煙草屋の事件に就いて、非道い報告を齎して來てるのを、橋は知つて居るか。」

三人は二階へ上つて、蒲團に坐るまで、始終休まず話し續けた。宗一も久し振で心配を忘れなやうに、元氣よく語つた。

「ひどい報告と云ふのは何だい。」

「煙草屋の塚に立派な男があるんださうだ。山口は道徳上 Adultery を犯して居るんだから怪しからん。」

杉浦は威丈高になつて説明し始める。

「まあ、其の話は止してくれや。わしや君に云はんと置けばよかつた。」

「云はんと置けばよかつたつて、そりや知れるから駄目だよ。悪黨も悪黨、他人の女を押領するとは、實際驚きやしたなあ。」と、又爺さんの口眞似をして、

「どうせ判つたんだから、酒でも飲みながらすつかり白状したら好からう。——橋どうだい、山口を少し酔はせないか。」

「うん、御馳走してもいい。」

今迄書生の友達が訪れて來ても、酒だけは出した例がないから、母が許すかどうかであらう。

宗一は其れを危んで、若し許さなかつたら、近所の鳥屋へでも飲みに行かうと、腹を極めた、さうして、階下へ下りて行つて、

「おッ母さん、ちよいと。」

と、空間の外の縁側から呼んだ。

「お友達に何か御飯を出してくれませんか。二人共お酒が行けるんですが、飲ませちゃいけませんか知ら。」

「さうさね、みんな大學の方なんだらう。」

母は襖の間から、首だけ出して、

「修業中はマア止した方がいゝけれど、不斷と違つてお正月だから、上げるならお上げなさい。お重に辨松の料理があるから、有り合せ物だけれど。あれでもお肴にしてね。——お兼に云ひ附けて、支度をさせたら宜からう。」

かう云つて、承知してくれた。

やがて、三人は二階で杯の遣り取りを始めた。

「君の酒は、いゝ酒だなあ。此れで漸く正月らしい氣持になつた……。」

「山口を酔はせるんだ」と宣言して置きながら、一番先に杉浦が酔拂つて、

「おい、早く一件を打ちまけたら、いゝぢやないか。」

と、執拗に肉邊する

「話してもいゝが、Adultery など云はんでくれや。そりや多少不道德な行爲かも知れんが、わしや始めに男のあるの知らなかつたんぢや。娘は最近になるまで、其れを知らせなかつたんぢや。つまりわしが娘に欺されたんぢやと思ふ。」

「あんまり欺される柄でもないぜ。」

「ま、さう云はないで。」

と、宗一は制して、

「しまひまで黙つて聽く事にしよう。其の男と云ふのは何者だい。」

「大學生ぢや。」

「大學生ツて、帝大ぢや。」

「帝大ぢや。」と、宗一は尋ねて置いてくれ。あの娘は内が貧乏の癖に、女學校へ通つて居るんぢやが、其れはみんな男の方から學費を給してやつとるんぢや。なんでも大學生が

あの娘に惚れ込んで、女學校をやらせる代りに、エンゲージしたいんぢやさうな。——尤も娘は不服ぢやさ

「ほんたうに不厭か、あんな娘の云ふことがアテになるかい。」

杉浦が嘴を入れた。

「いや、そりや恐らく本當なんぢや。親父と云ふ奴は、極善弊な頑固な人間だから。——兎に角、現在は其の男よりわしの方に惚れて居るのは確かなんぢや。」

「そりや女の事だもの、一遍でも關係のあつた方に惚れるのは當り前さ。何と云つてもお前の誘惑したのが悪いんだよ。」

「悪くないと云やせんが、娘だつて随分不都合なところがあるぜエ。關係のあつたのは、わし斗りぢやないんぢや。ありや恐ろしい淫婦ぢやがな。」

「君と不都合のあつた事が、もう男へ知れちまつたのかい。」

「そんな、露顯するやうなへまはやらんよ。此れから先、萬一氣が付いたつて、證據がなければどうもならん。」

山口は傲然と空嘯いて、杯を唇にあてた。酔が廻つて來たと見えて、以前のやうに悄氣では居ない。襟頭から耳朶の縁を好い色にさせて、眉毛まで眞赤に染まりさうになつて居る。

「お前、これから先も、依然として繼續する了見なんだらう。」

「うん、さうぢや。」

あたり前だと云はんばかりに、山口は軽く頷いて、

「判りさへせんけりや、當分吉原へ行かんで濟むだけでも得ぢやらうがな。」

「ひどい奴だなあ。」

杉浦はわざと仰山に、甲走つた聲を出した。

「へまをやらん積りだつて、長い間にはきつと知れるに極まつて居るから笑止千萬だ。ほんとだぜ、山口、好い加減に止した方がいゝぜ。」

「さう頭からケチを附んでも好からう。——君はわしの事を一々ケナシ居るが、そりやどう云ふ譯なんぢや。をかしい男ぢやなあ。内々面白がつて居る癖に、口ではモラリストのやうな事ばかり云ふて居やがる。——杉浦さん、悪い事を云はんから、君一逼道樂をせい。君は惻巧な男なんぢやから、少し道樂をすると、屁理屈を云はんやうになる。」

「餘計なお世話だよ。道樂をしなくつても、お前の氣持ぐらぬは大概解つて居るよ。……」

二人は川甚の二の舞を演じさうに、凄い顔をして睨み合つた。

「僕は決してモラリストぢやないが、無理に道徳に反抗して痛快がつたり、新しがつたりす

るのは、今ぢやもう古いよ。實際無意味な話だよ。今日の社會は、さう云ふ生半可の近代人の多きに苦しんで居るんだから、道徳に遵奉しない迄も、何とか新機軸を作らんけりやあならんね。偽善の人を誤るよりも、寧ろ偽悪の人を誤る方が、どのくらゐ有害だか知れやしないぜ。世間では多く功利主義の道徳を目して偽善と云ふけれど、其のくらゐの程度の道徳を持つて居ることは一應必要だらうと思ふ。勿論其れが、根柢のある人生觀の上に築かれて居なくつても、差支ないんだ。寸毫も自己の Sincerity を傷つけやしないんだ。」

かう云つて杉浦は眞面目になつた。

「さう云ふ話は、わしにやよく解らんがな。」

と、山口は黙つて了つた。到底議論をしても、抗はないとあきらめたらしい。

「桶、君は嘗て佛教か耶穌教の信者になつたことがあるのかい。」

杉浦は山口の相手にならぬのを見て、今度は宗一に話しかけた。

「佐々木にかぶれて、二三度教會へ出入したが、其れも僅かの間だよ。今ぢや全く信仰なんか持つて居ない。——僕などは宗教に頼つて生きて行ける人間ぢやないんだが、一時熱に浮かされたんだね。クリスチャンを標榜して居る時代でも、今考へると本當の信仰があつたか何か、怪しいものさ。」

「佐々木はいまだに信者なのかい。」

「先生も僕が止めようとした時には散々忠告した癖に、いつの間にか還俗したから可笑しいよ。しかし思ひ切りが悪くつて、『僕にはどうも神の存在を全然否定する氣になれない。』と云つて居るがね。一體何かに感心し易い男なんだから、いまだにエマーソンやカーライルを讀めば、直ぐと動かされるんだ。どうしても彼れば文学者よ、ブリーチャーの方が適任だね。——ま、あゝ云ふ人間は、始終何かに刺戟されて、緊張したライフを送つて行けるだけ幸福だよ。」

「あんまり幸福でもないさ。——そんなライフは煩悶が少くつて氣樂かも知れないが。決して羨ましいとは思はんぜ。何の爲めに僕等は學問をしたんだ。何の爲めに僕等は知識を要求したんだ。われ／＼はモウ少し眼を高い所に据ゑて、努力を續ける必要があるよ。神を信じたり、女に惚れたりして、濟まして行かうとするのは恥づ可きことだ。苦しくつても淋しくつても、光榮ある孤立を維持して行く人間があつたら、それが一番えらいんだ。僕の如きは、たしかに其の一人たるを失はないね。」

酒臭い息と一緒に議論を吹き掛けながら、杉浦は肩を怒らし、眼をむき出して夢中になつて居る。傍若無人に滔々と喋り捲くる禰子は、あんまり苦くも、淋しくもなさうである。さうして、時々ガブリ／＼と水でも飲むやうに酒を呷つた。

「かう見えても、實際僕は寂しい人間だよ。山口が Adultery をする。橋が美代ちゃんを追つ駈ける。佐々木が春子を振つたり惚れたりする。此の間に處して、僕の孤立は眞に偉とするに足るね。——野村江戸趣味とか、清水クリスチャンのやうな眼の低い連中は、彼等相應のライフに甘んじて居るからいゝが、吾輩不幸にして眼識一世に高く、天卜に頼る可き何物の價値をも認めない爲めに、斯くの如く孤立して居る。どうだい、えらからう。」

かう云つて、盃を置いて、ごろりと横になつた。

宗一も杉浦の氣焔を聴きながら、知らず知らず量を通こした。額の皮が、鉢巻をしたやうに痺れて、動揺が激しく體中へ響き、座つて居るさへ、ふら／＼と眩暈が起る。舌の附け根から、不快な生唾吐が湧いて、口中が引き締められるやうである。こんなに酔つたのは生れて始めてであつた。

後の二人もやがて横になつて、マチ／＼と豆を炒るやうな追ひ羽子の音を遠くに聞きつゝ、のどかな元日の晝をとろ／＼と眠つて了つた。

十

十二月の試験の結果が、本館の廊下の壁へ貼出されたのは、七草の頃であつた。清水は豫期

心は、著しく傷つけられた。

「しかし君なんざ、少しぐらゐ遊んだつて大丈夫だから、心配はないぢやありませんか。——それ、リ僕の方がどんなにミセラアルだか、考へて御覽なさい。」

佐々木は其の朝、運動場で宗一を捉へると、慰めがてらいろ／＼な頭痛をこぼした。彼は宗一よりも一層神経質なだけ、成績の不良に殊更胸を痛めて居た。

「春子の事があつたりすると、とても本なんか読んで居られやしませんよ。去年の後半期と云ふものは、間断なく頭の中に *Self* が續いて居て、殆ど何に費やしたか、今から考へると無茶苦茶ですれ。ほんとに恐ろしいもんです。」

佐々木は陰鬱な調子で、俯向いたまゝ後庭の草原を歩みつゝ語つた

「君は運が悪いんだよ。杉浦でも僕でもあんなに怠けたのが、其れほど影響して居ないんだもの。山口と来た日にや、あの通りの不行跡をやつて、依然として十二三番に漕ぎ付けて居るからね。」

「そりや、山口君なんぞとは気分が違います。」佐々木は昂然と首を擡げ、

「どうして、どうして、僕が春子から受けた打撃は非道いもんですよ。山口君のやうな、呑氣なのとはまるで一緒になるもんですか。君にしたつて、随分頭を使つたでせうが、君はまだ、

男性的な、強い氣象があるから好ごさんす。………」

「僕を強いと云ふのは、君ぐらゐなもんだよ。」

「いゝえ、君は強うござんすよ。僕なんぞ我れながら不甲斐ないと思ふくらゐ、決断力がなくて、女々しくつて、お話しにならないんです。」

何でも彼でも、彼は自分の煩悶が一倍深刻であると極めて居るらしかった。

「それにしたつて、君はもうきれいに春子さんと手を切つたんだから、此れから充分に讀書が出来るだらう。」

「えゝ、さうしたい積りですが、當分精神がぼんやりして、仕事に手に付かないで困ります。」

——君にしても、同じことでせう。やつぱり今学期も入寮なさるんですか。」

「うん、多分明日あたり入寮するだらう。——實は今日と思つただけれど、晩に近所で骨牌會があるから、もう一晩内へ寝ることにした。若し都合が宜かつたら、君も一緒に骨牌へ來ないか。」

「一體どんな内なんです。」

「親父の知つて居る仲買人の本宅さ。成る可く多く友達を誘つて來てくれつて、頼まれて居る人だから、一緒に行つて見ないか。遅くなれば、僕の所へ泊つてもいゝ。——君の好きな下町

風の娘が澤山見られるぞ。」

かう云つて、宗一はにや／＼笑つた。

「さうですれ、行つても好ござんすね。」

と、佐々木は同じく妙に笑ひながら、煮え切らない返答をした。

「そんなら、直ぐと飯を食つて出掛けやう。一時迄に集まる約束なんだから。」

二人は淀見軒の安いまづい洋食で晝餐を済ますと、三丁目の停留場へ急いだ。寒空のところどころにちぎれ／＼の雲が散亂して、烈しい北風が、砂埃を捲き上げつゝ荒ぶ日であつた。乗手の少い電車の中に、びつたり體を摺寄せ乍ら、二人とも濛い顔をして膝頭を顛はせた。

茅場町の四つ角で下りて、植木店の横町へ曲ると、梓屋の家元から二三軒先の小粋な二階建の前で宗一は立止まつた。

「あゝ、此處ですか。」

と云つて、佐々木は「淺川」と記した軒燈の球を仰いだ。大分來會者が集まつたと見えて、家の内からなまめかしい女の囁りが、醋に聞えて居る。板塀の上の二階座敷には、きやしやな中硝子の障子が縮まつて、縁側の手すりの傍に籐椅子が一脚据ゑてある。格子を開けると、ちりん／＼とけたたましく鈴が鳴つた。

「今日は。——一人ぢや心細いから、友達に援兵を頼んで、とう／＼やつて來ました。」

玄關に現れた四十三四の、如才なさうな上さんに挨拶して、宗一は活潑に口を利いた。

「おや、ようこそ、さつきからみなさんが宗ちやんを待ち焦れて居るんですよ。」

上さんは佐々木の様子盗み視てから、再び宗一を振り返つた。

お友達はお一人なの。もつと多勢さんで入らつしやればい／＼ぢやありませんか。——さあ、さあ何卒お上んなさい。」

かう云ひながら、二人の脱ぎ捨てた外套を片寄せて、

「ちよいと、誰か皆さんのお穿き物をチャンと直してお置きなさいよ。こんなに土間が散らかつて居ちや、足の入れ場がありやしないやね。」

と、高い調子で叱言を云つた。

佐々木は宗一の後へ附いて、遠慮がちに身をすくめつゝ玄關へ上つた。丁度突きあたりの芭蕉布の唐紙の、一寸ばかり開いた隙間から、すらりと居並んだ令嬢達の花やかな衣服の色彩が細長い六歌仙の縦繪のやうに窺はれた。すると忽ち、其の繪がお納戸地の縮緬の羽織で一杯に塞がれたかと思ふと、冴え冴えした、黒味がちの圓い瞳が、白い頬を襖の縁へ押し着けて、一生懸命に此方を隙見して居る。佐々木は極まり悪さうに下を向いた。

「お勢ちゃん、何をしてゐるんだい。」

宗一はかう云つて、瞳を追ひ駈けるやうに其處を開けると、座敷の中へ入つた。矢庭にお勢は疊へ突伏して、

「おほ、おほ、」

と、頓狂に笑ひ崩れた。二十前後の、發達し盡した豊かな肩の肉が、笑ひを堪へると息づかひと一緒に、背筋のあたりでグリ／＼と力強く動いて居る。

新しい青疊の八疊の間に、袖の座蒲團だの、柔の煙草盆などが秩序よく置かれて、煙草の煙や炭火の熱が、少しカツとする様に籠もつて居た。床框の前と、縁側に近い柱の傍と、二箇所据られた大きい桐の火鉢の周圍へ、七八人の男女が花瓣の如く取り纏り、互に肘を張り合つて、骨牌のうまさうな、細長い手先を炙つて居る。縁側の向ふには、下町に珍らしい、こんもりとした植込があつて、生茂つた枝葉の透き間から小さな稲荷の祠が見える。佐々木は一人離れて、一番遠い座蒲團の方へ腰を下した。

「此れは僕の友達で、一高の文科の佐々木と云ふ人です。」

宗一が紹介すると、みんな一度に佐々木へお辭儀をした。

「宗ちゃん、佐々木さんにもつと此方へ来て頂けなくつて。」

と、二十一二になる此處の娘のお静と云ふのが、火鉢を包んだ一團の中から首を擡げた。すらりとした鶴のやうな撫で肩へ、地味な緋の大島お召の羽織を纏つて、銀杏返しの髻の毛をふるはせながら、きれいな、メタリツクの聲を出す様子と云ひ、引き締まつた目鼻立ちと云ひ、新派の喜喜村カキムラにそつくりの女である。

「静ちゃん、君は黙つて居らっしゃいよ。高等學校の方はみんなお勢ちゃんの受け持ちでさあ。」かう云つたのは、頭をてか／＼と分けたにきびの痕のまだ消え切らない男である、毛絲ワッヤツの上へ、襦袢や胴着や緋の銘仙の對の綿人や、何枚も寒さうに重ね込んで居る。

「あら嘘よ。澤崎さん覚えて居らっしゃい。」

突伏して居たお勢は急に起き上つて、さも憎々しうに睨みつけた。

「だつて、さうぢやありませんか、ねえ。」

と、澤崎は圖に乗つて嬉しがつて、

「君は一高の生徒が好きだつて云つたぢやないか、」

「あたし、何時さう云つて？」

「云つたとも、云つたとも。——此の間僕と一緒に本郷通りを歩いた時に、後から一高の生徒が來たら、『あたし彼の人にハンケチを拾はしてやるんだ』つて、君はわざとハンケチを遺した

ぢやないか。」

「あら、嘘よ。」

お勢は慌て、取り消したが、一座は可笑しがつて、笑ひどよめいた。

「へーえ、それからどうしたの。とうとう拾はしたんですか。」

と、お静が訊いた。

「え、とうとう其の學生が拾つて、お勢ちゃんに渡したんです、『ほら御覽なさい。拾はせてやつたでせう。』ツて、お勢ちゃん得意になつて居るんです、僕ア驚いちやつた。」

澤崎は一座の幫間のやうな格で、頻りと滑稽な仕業や辯舌を弄しては、如才なく娘達に愛嬌を振り撒いて居る。人を毛嫌ひする癖のある宗一は、何となく嫌な男だと思つたが、それでもお勢の奇抜な行動には、吹き出さざるを得なかつた。

「君のハンケチなら、僕等はいつでも拾つて上げるぜ。」

かう云つて、彼は萎れ返つて居るお勢の顔を睨るやうに眺め込んだ。

「宗ちゃんお止しなさいよ、あんまりからかうと、お勢ちゃんだつて怒つちまふわ。——それよりか、もうそろそろ始めなくつて。」

お静は宗一を止めて、牌骨の箱を取り寄せた。

同勢九人のうち、一人が迭る迭る讀み手になつて、四人づゝ二組に別れ、何回も勝負が行はれた。宗一も、佐々木も、一度づゝは總ての人を敵に廻して札を争つた。一番上手なのは澤崎で「ハッ」「ハッ」と景氣の好い掛け聲を浴びせながら、指先で撥ね飛ばす働きの素早さ。牌骨は彼に弾かれると、燕のやうに室内を舞つて走つた。其の間も、彼は種々雑多な身振手眞似を弄して、敵方を笑はせ、狼狽させ、威嚇がす可くあらん限りの術策を施すことを怠らない。勝敗の埒外に出て、歌を讀み上げる時でさへ、得意さ加減、可笑しさ加減は一と入で、「天津風雲のかよひ路」だの、「むべサンブクを嵐」だの、「振さけ見ればシユンシツなる」だの、いろ／＼の讀み方を心得て居て、薩摩琵琶のやうな節になつたり、浪花節のやうな音になつたり、激しくなると、「天智天皇あきんどの假り寝の夢」だとか「菅家紺の足袋は黒くて丈夫」だとか、たわいなし悪落洒に、女達の腹の皮を綱らせた。

澤崎に次いで上手なのはお勢であつた。澤崎が女を喜ばせるよりも、もつと格別な意味で、お勢は男を喜ばせた。初對面の佐々木だらうが、宗一だらうが、お勢にかゝると散々に鼻毛を抜かれ、容赦なく引ツ搔かれるやら、組み付かれるやら、打たれるやらした。佐々木は勝負の最中、幾度となく自分の額に觸れたお勢の前髪の柔かさを忘れることが出来なかつた。

「お勢ちゃんは一高の生徒にハンケチを拾はせても、牌骨は拾はせないんだね。」

宗一がかう云ふと、お勢は息せき切つて、
 「そんな口惜しからなかつて好い事よ。骨牌に負たもんだから、口で替を取るなんて、男の癖に卑怯だわ。」

「さうだわ〜。一高の生徒の癖に卑怯だわ」と、後から澤崎が交ぜつ返した。

斯界の兩雄——澤崎とお勢とが敵味方に別れた時の騒擾、喧囂亂脈は、實に當日の壯觀であつた。殆ど全體の勝敗が其の一騎打ちに依つて決するかの如く、互に秘術を盡し、お勢を極めたが、たまく此の兩人が同じ組の鬨に中ると、敵方は滅茶々に蹂躪されるので、
 「これぢや、とても抗はないわ、澤崎さんとお勢ぢやんとは、始終敵味方でなげりや面白くないわ。」

こんな動議をお静が提出した。さうして、最後の試合迄、二人は別れ別れになつた。結局七度の戦ひのうち、五度は澤崎の勝利に歸した。

四時頃になると、みんな休憩して、御馳走の鮓を煩張ながら、一しきり賑やかに戯談を云ひ合つた。

「お勢ぢやんどうでした。やつぱり男の方には抗はないと見えますね。」

かう云つて、さつきの上さんも出て来て席に加はつた。

「え、お勢ぢやんなんで、まるで相手にならないんです。弱い人ばかりいぢめて居て、僕にはちつとも向つて来ないですからなあ。」

澤崎は肩を揺す振つて、兩手に拵へた握り拳を、鼻の先へ高々と重れた。

「あら、小母さん嘘よ。澤崎さんそんなに威張るなら、二人で勝負をするから、此處へ出ていらつしやい。あなたなんぞに負るもんですか。」

「おほ、まあお勢ぢやん、急がないでもゆつくり替をお取んなさいな。今お静にさう云つて、かるたの間に福引をやらせますから。——どうぞ皆さん、どんな物が申つても、苦情を仰しやらずに、持つて歸つて下さいませよ。」

上さんは用意して置いた福引のかんじよりを娘へ渡して、

「さあ、めい〜で、一本づつお引き下さい。」と云つた。

淺草觀音の鳩が豆の皿へ群る様に、多勢はお静の手元へ集まつて、我れがちに鬨を引いた。紙の端には、一つ一つの謎の文句が認めてあつた。佐々木の引いたのは「小松内大臣」宗一のは「間男」と云ふのであつた。

「岡男と云ふのは怪しからんね、一體此れは何です。」
 「あら、宗ちやんが岡男を引いたんですか、——そりやいゝものよ。内のお父さんが考へた謎なの。」

お静はかう云つて、魚を焼く二重の金網を出した。

「宗ちやん其れが解りますか。『兩方から焼く』と云ふんですつて。」
 上さんが説明すると、みんな手を叩いて可笑しがつた。

佐々木の『小松内大臣』は「苦諫」と云ふ謎で、蜜柑が三つ来た。澤崎は「往きは二人で歸りは一人」といふのに中つて、往復はがきを貰つた。其の外澤庵を持たされたり、草蓆木を擡がせられたり、大分迷惑したらしい連中があつた。謎の秀逸はお勢の引いた「晝は消えつゝ物をこそ思へ」で、電燈の球が来たのには、奇警にして上品な思ひつきに、誰も彼も感服した。「電氣の球はよかつたな。それは誰が考へたんです。」
 と、宗一はお静に訊いた。

「うまいでせう。あたしが考へたのよ。」

「晝は消えつゝ物をこそ思へ」は、全く頭が好うござんしたね。何しろ今日中の傑作に違ひありません。」

佐々木までが、かう云つて賞め讃へた。

福引が済むと、再び戦闘が開始された。丁度五時から七時頃の間五六回勝負をやつたが、お勢はとう／＼澤崎に抗はしないで、

「あたし口惜しいわね。——澤崎さん近いうちに内であるた會をやるから、是非入らつしやいな。きつと負かして上げるから。」

など云つた。

「もう大分遅くなりましたから、徐々失禮しませんか。」と、誰か云ひ出した時、

「まあお待ちなさい。皆さんの運動が激しいから、お腹が減つたでせうと思つて。」

と、上さんは氣を利かして、尾張屋のそばを振舞つた。みんな暖かい鳴南蠻と玉子とじとを、黙つて食るやうにして喰べた。

「佐々木さん、どうぞ此れから宗ちやんと一緒に遊びに入らしつて下さいな。別にお構ひ申しませんが、内は此の通り香氣なんですから。」

お静にかう云はれると、佐々木は實直らしく膝頭へ兩手を衝いて、

「えゝ、また今度、骨牌會があつたら是非伺ひます。」

と、馬へ乗つて居るやうに、臂を彈ませて云つた、

「かゝるたの時でなくつても、いゝぢやありませんか。近いうちに弟が退院して戻つて参りますと、お話相手も出来ますから。」

「弟と云ふのはお静さんより一つ年下で、高等商業へ行つて居るんだよ。」
傍から宗一は説明して、

「良ちゃんば、まだ退院が出来ないんですか。」

「もう四五日かゝるんですッて、良作も體が弱くつて困つて了ひますよ。宗ちゃんの様に丈夫になるといゝんですがねえ。」

お静は火箸の上へ白く柔かな兩手を重ね、何か知ら長話の端緒でも語り出すやうに、落ち着いて、しみじみと喋り始めた。淋しい冬の夜寒を、二人共成らう事なら、此の女を相手に今少し時を過ぎたく思つたが、お勢も澤崎も歸つて行くので、據んどころなく、老残を惜みながら席を立つた。

「佐々木君、もう遅いから、僕の内へ泊らないか。」

戸外へ出ると、宗一は云つた。晝間の風が未だ止まないで、街鐵の敷石の上に渦を巻く砂煙が、電柱のあかりにぼんやりと照されて居る。電車が時々、クオーと悲鳴を擧げるやうに軋みながら通る。

「彼處の娘は喜多村にそっくりですね。聲まで似て居るぢやありませんか。」

佐々木は鏡橋を渡る時、不意にこんな事を云つた。

「誰もさう云ふよ、常人も喜多村が最良なんだ。——君はお氣に入つたのかい。」

「えゝ、ちよいと好ござんすね。」

「春子第二世にしたらどうだい。」

「さあ。」

と、佐々木は考へて、

「春子の轍を踏んぢや困りますから、一番直して、静子第一世にしませうか。さつき『ひるは消えつ』の謎なんか見ると、頭もなか／＼いゝやうぢやありませんか。」

「惚れた弱味で、謎にまで感心しなくつてもいゝよ。惚れられると徳をするんだなあ。」

と、宗一は笑つた。

濱町の家へ着くと、丁度時計が九時を打つた。「まだ風呂を抜かすにあるから、女中の入らないうちに」と進められて、二人は早速湯に漬かつた。

「佐々木さん、此處に宗一のフランネルの洗濯したのがありますから、お上りになつたら、浴衣代りにお召し下さいまし。」

母は湯殿へ出て、二人の體質を並べて見ながら、

「ほんとに佐々木さんは好いかつぶくで居らつしやること。宗一なんぞはとても抗ひませぬえ。」

と云つた。宗一も佐々木の裸體を見るのは久し振で、筋肉が瘤のやうに隆起して居る逞しい骨組や、丈夫さうな赤黒い皮膚の上に、石鹼の白泡が快い對照をなして流れて行くのを、羨ましく思つた。

「かうやつて居ると、何だか田舎の温泉へでも來て居るやうな氣がしますね。」

佐々木は湯船の縁へ頭を載せて、湯氣の籠つた天井を眺めながら、伸び伸びと空嘯いた。

風呂から上つて、二階の書齋へ行くと、いつの間にか蒲團が二つ敷いてあつた。互に顔を向け合つて、夜具を被つたものの、容易に眠られない。——階下で時々、宗兵衛の咳拂の音が聞える外、淺川の家には比べると、ズット陰氣な、死んだやうな座敷の沈黙が、妙に眼を冴え冴えとさせる。

「どうだい、僕の内は靜かだらう。——こんな晩に獨で居ると、淋しくつて淋しくつて、とても寝られやしない。」

かう云つて、宗一は蒲團の中で、肩を傾けた。雨戸の外では、風がひゅうひゅうと鳴つて

居た。

「僕はこんな所が大好きですよ。君だつて、ラブ、アッフエイアがなければ、此處の方が却つて勉強出来る筈です。寮に居ると下らない附き合ひに時間を浪費して、いけませんね。旅行でも、讀書でも、僕は Solitude が一番いゝと思ひます。」

「しかし、昨今の僕は Solitude に堪へられないよ。」

「そりやあゝ云ふ事情があつては、無理ありません。——どうになりました小田原の方は。」

「やつぱり破談になつた。暮に母親から散々意見されて、一と先づ斷念しろとまで云はれた。」

「それから、君はマザーに何と答へたんです。」

「一應反抗したけれども、到底根本から考へが一致しないんだから、好い如減な氣休めを云つて置いた。徒に心配させたつて、仕様がなないもの。」

「此れから先、どうする積なんです。」

「どうしていゝか、全く迷つて居るよ。美代子さへ約束を守つて居てくれれば、結局は大丈夫だと信じて、それ程悲觀もしないがね。」

「かう云ふ問題は、だら／＼長くなると、仕事が出来ないで困りますから、成るだけ手取り早く片附る方が宜ござんす……………」

佐々木はだん／＼眠さうな聲を出して、やがて、
「もう寐ませうかれ。」

と云つて、ぐるりと壁の方を向いた。

十一

歌舞伎座の春の狂言が、十四日に蓋を開けたので、初日から五日目の日曜日に、野村は中島と杉浦を誘ひ、西の花道に近い平土間へ陣取つて居た。遅れ馳せに宗一の馳け着けた頃は、既に一番目の大詰の幕が下りて、天井、機敷、一面の究隆に電燈が燦然と閃き、劇場の内部は、さながら灯の雨が降るやうに光の海を現じて居た。

「おい、其處に居るのか。」

と、聲をかけながら、土間の割りを傳はつて行く時、宗一には二三人の友達の顔が真赤に燃えて輝いて見えた。

「おう、君遅かつたのう。もう一番目が済んで了つたぞ。」

野村は半分席を譲つて、自分の横に宗一を座らせ、頻りとオメラ、グラスを八方へ廻して居る。「市村羽左衛門」「片岡仁左衛門」など、記した綴子や繪子の引幕が無臺の一方から一方へ、

何枚もする／＼と展いては縮まつて行く。

「鬼と呼ばれし高方も、涙の味を覚えて御座る。……」

杉浦は唇をへの字なりに歪めて、仁左衛門の口真似をして、

「今の幕は、仁左衛門が好かつたぜエ。もう少し早く来ると、面白かつたのになあ。」

「家光になつたのは、ありや何と云ふ役者かい。」

と、相變らず中島は説明を求めて居る。

「アレは八百藏さ。——どうも家光らしい機略が見えないで、八百藏としては出来の悪かつた方だよ。」

「しかし、立派な聲ぢやのう。輪廓もなが／＼整つとるぢやないか。」

中島は杉浦の批評が臍に落ちないで、内々八百藏に感心したらしい口吻である。

出方が五六人東の花道に立つて、

「〇〇御連中様、御手を拜借！」

と、怒鳴つたかと思ふと、向ふ側の鴉、高土間、新高の観客の間から、パタ／＼と拍手が起つて、無数の掌が胡蝶のやうに翾る。

杉浦は伸び上つて、割りの板に腰かけながら、